

秦の韓魏を善して趙を攻る者の必韓魏の趙を救すと思へりなりされり王の軍の孤からん又王の秦より事ふとの韓魏は如さるを以てあらんと如此くある時王は年々六城を割て秦より事へしむるよて即ち坐して城尽なん來年秦復地を割とを求めあつ王將は尙之よ與へんとするか君若與へざる時の前々割たる土地の功を棄て秦の禍を挑み招くと云ふへし之よ與んとする時の後よ土地の給する事あからん語又曰く強き者の善攻め弱き者の守ると能すと今坐して秦よ聽あひ秦の兵の弊れすして多く地を得せしむるよて徒よ秦を強して趙を弱すあり益々強きの秦よ向て愈々弱の趙を割く其計故より止ざるあり且王の地の盡るとありて秦の求めの己むとあし盡る事有るの地を以て己むと無きの求め應す其勢必ず趙無からん趙王計未だ定まらず樓緩秦より來り趙王樓緩と之を計て曰く秦よ地を予るの何如予る毋と孰か吉ある樓緩辭讓して曰く此の臣の能知る所よ非ざるなり王曰く然れども試よ公の私心を言出よ樓緩其時答へけるの王も亦夫公父文伯の母を聞玉ひしや公甫文伯魯よ事へ病て死したり女子爲よ房中よ自殺せし者二人其母之を聞て哭せするの相室の曰くいかて吾子の死して哭せざる者あらんや其母の曰く孔子の賢人なり魯よ逐れし時此人隨ひ行さりき今死して婦人か爲よ自殺する者二人是の如き者の其長者よの薄くして婦人よの厚き故よと故よ此言母より之を言ふ時は是賢母あり妻より之を言ふ時は是必ず妬める妻たる事を免れす故其言の一なれとも言ふ者異なる時の人の心も變る者なり

今臣新よ秦より來て予る事勿れと言ひ計よあらず之よ予へよと言ひ王臣を以て秦の爲よすとする事を恐る、なり故よ敢て對へす然れとも臣をして大王の爲よ計とを得せしめり之よ予ふるよ如す王曰諾と虞卿之を聞と齊しく入りて王よ見へて曰く此節て説を爲せし者あり王愼て予ふる事勿れ樓緩之を聞くと又もや往て王よ見ゆ王又虞卿の言を以て樓緩よ告く樓緩對て曰く然らず虞卿の其一を得て其二を得ず夫秦と趙と難を構て天下皆説へり其故何りや曰く吾且よ強よ因て弱よ乘せんと今趙の兵秦よ苦む天下の戰勝を賀する者の必ず盡く秦よ在かん故よ亟よ土地を割て和好を以て天下を疑ひしめて秦の心を慰むるよ如す然かざる時天下將よ秦の疆怒よ因り趙の弊よ乘り瓜の如く之を分たんとす趙且よ亡ひんとす何り秦を之圖るよ暇あらんや故よ曰く虞卿其一を得て其二を得ず願くは王此を以て之を決し玉へ復他人よ計玉ふと勿れ虞卿之を聞くと王よ見へて曰く危きか樓緩の秦の爲よする所以の者は愈々天下を疑ひしめて何り秦の心を慰めんや獨天下よ其弱を示すと云ふへし且臣の予ると勿れと言ふ者の固より予るべきのみよ非るなり秦六城を王よ索めて而るを王六城を以て齊よ賂ひなり齊の秦の深き讎あり王の六城を得て力を并せて秦を撃つと齊の王よ聽すと辭の畢るを待たすして諾する時は是王六城を齊よ失ひて償を秦よ取るなり齊趙の深き讎以て報ゆへく而して天下よ能爲と有を示すへし王此を以て聲を發じ玉ひなり兵未だ境を窺ひすして臣秦の丁輩ある賂遺趙よ至て反て王よ和媾を求めん秦より構

を爲して韓魏之を問あり 盡く王を重せん王を重せし必ず重寶を出きて王先ん則是王一た
 ひ事を擧げ三國の親を結て秦と道を易ふるあり趙王の曰く善し則虞卿も東の方齊王も見しめて
 之と與よ秦を謀らんとす虞卿未だ返らす秦の和媾を求むるの使者已も趙へり來りけり樓緩之を
 聞て亡去ける趙是も於て虞卿を封するも一城を以てせり居ると頃くありて魏國より從約を爲ん
 と請けれり王虞卿を召して謀る朝も入る途中虞卿平原君の家も過けるも平原君か曰く願くは卿
 王の前も於て從約の便利を論じられたしと託しけり虞卿入て王も見ゆ王問て曰く近日魏國從
 約を爲さんと乞へり如何すへき對て曰く魏國過てり云ふへし王の曰く寡人未だ之を許さず對
 て曰く王過ちたもふと云ふへし王の曰く魏從約を請ふと云へり卿魏過てり曰ひ寡人未だ之を
 許さずと云へり卿又寡人過てり曰ふ然る時從約の到頭不可あるか對て曰く臣聞くは小國の
 大國と事も從ふり利ある時大國其福を受敗有る時小國其福を受と今魏小國を以て其禍を請
 て王大國を以て其福を辭し玉ふ臣故も曰く王過てり魏も亦過てり云ふは是あり臣竊も以て從
 を爲すと便利もころと王曰く善しと乃ち魏も合て從を爲せり虞卿魏の魏齊の秦の應侯も惡まれ
 て亡て信陵君も託する時卒も趙を去り梁も困む魏齊已も死し意を得ずして書を著せり上春秋を
 採り下近世を觀る曰く節義稱號揣摩政謀凡り八篇以て國家の得失を刺譏せり世も之を傳へて虞
 氏春秋といふ

太史公か曰く平原君の翩翩たる濁世の佳公子あり然るも未だ大休を賭す鄙語も曰く利の智をし
 て昏からしむ平原君馮亭の邪説を貪り趙も長平の兵四十餘萬を 陥しめ邯鄲幾も亡んとす虞卿
 事を料り情を揣り趙の爲も畫策す何り其れ工あるや魏齊も忍さるも於て卒も大梁も困り庸夫
 すら且其不可あるを知れり況て賢人をや然れとも虞卿窮愁も非れり亦書を著して以て後世も
 見るもと能はずと云

信陵君列傳第十七

魏の公子無忌の魏の昭王の少子もして魏の安釐王の異母弟なり昭王薨し安釐王位も即き公子を
 封して信陵君と爲す是時范雎魏を亡て秦も相たり魏齊を怨を以ての故も秦の兵大梁の都を圍み
 魏の華陽下の軍を破り芒莩を走しむ魏王及び公子之を患ふ公子の人と爲り仁もして士も下る士
 賢不肖の別なく皆謙遜もして禮を以て之も交り敢て富貴を以て士も驕高らす士此を以て方數千
 里争ひ往て之も歸す食客三千人は是時も當りて諸侯公子の賢もして客多きを以て敢て兵を加へて
 魏を謀らざると十餘年公子一日魏王も博せり然るも北の國境もて烽火を傳へ擧て言けるも趙の
 寇至りて且も界も入らんとすと魏王博を釋て大臣を召て謀んと欲せしも公子王を止て曰く趙王
 田獵するのみ寇を爲すも非ざるなり復博すると故の如し王の大も恐れ心博も在す居ると頃く
 ありて復北方より來りて傳言して曰く趙王獵するのみ寇を爲すも非るありと魏王大も驚きて

曰く公子何を以て之を知るや公子の曰く臣の客能く趙の陰事を探得る者あり趙王の爲す所客輒も臣も報せける故臣此を以て之を知れりと魏王公子の賢能を畏れ國政を以て公子に任す魏も隠士あり侯嬴と曰ふ年七十家貧しくして大梁の夷門の監者たり公子其名を聞て往て請て厚く之を遺らんと欲しけれども受肯せず曰く臣身を脩め行を潔よくすること數十年終り監門にて困究する故を以て公子の財を受す公子是より於て乃ち置酒して大賓客を會し座席已に定る公子車騎を從へ車の左と虚くし自ら夷門の侯生を迎ふ侯生弊れたる衣冠を攝ひ直り公子の上座に載り少しも讓せず以て公子の容を觀んと欲せしよ公子轡を執り愈々恭し侯生又公子を謂て曰く臣に一客の尤も親しき者あり市屠乃中より在り願くは車騎を枉て過り玉へ公子車を引て市より入れ候生下り其客朱亥を見て睥睨を故と久しく立て其客と語り微く公子の容を察するよ公子の顔色愈々和きて更は厭しき氣色なけれは侯生心より大に感し此人の爲よ命を抛んと思ひけり是時よ當て魏の大將宰相宗室賓客堂上より充滿して公子を待て酒を舉んとなしつゝも歸りの遅きを訝りける市人の皆公子の轡を執を見て驚き怪み從騎の面々の又皆竊り侯生を罵りけり侯生公子の顔色の終り變せざるを視て愈々感し聽て朱亥に謝して車を就きて家に至る公子侯生を引て上座に座せしめ徧く賓客を贊ければ賓客皆驚きけり酒酣ある時公子起て壽を侯生の前より爲す侯生因て公子を謂て曰く今日嬴か公子の爲よするも亦足らん嬴の夷門の抱關なり而るよ公子親車騎を

枉て自ら嬴を衆人廣座の中より迎へ玉ふよ宜過る所あるへからず今公子故よ之より過く然り嬴公子の高名を就んと欲す故より久しく公子の車騎を市中より立て親友の家より過り以て公子を視るよ公子益々悲し市人皆嬴を以て小人と爲し公子を以て長者よして能士よ下ると爲すありと意中を明して語りける既にして酒を罷む嬴遂に上客となる侯生公子を謂て曰く臣の過る所の居者朱言此子賢者なり世能知る事あり故より屠間を隱るゝのみ公子往て數々之を請ふよ朱亥故より復謝せず公子竊よ之を怪みけり魏の安釐王の二十年秦の昭王已に趙の長平の軍を破り進て邯鄲の都を圍みたり公子の姉の趙の惠文王の弟平原君の夫人あり數々魏王及び公子を書を遺りて救を魏に請ふ魏王將軍晋鄙を命して十萬の衆を將として趙を救ひしむ秦王使を以て魏王に告しめて曰く吾趙を攻て旦暮且より下らんとす而るを諸侯の敢て救ふ者あらは已に趙を拔て後必ず兵を移して先之を撃んと魏王恐れて使を以て晋鄙を止めしむ晋鄙軍を留めて鄴に壁し名に趙を救ふと爲して實に兩端を持し以て觀望す平原君の使者冠蓋相屬て援を乞ふ事絶間なく信陵君を讓て曰く勝の自ら附て婚姻を結ひたる故に公子の高義能く人の困みを急よするを以てあり今吾國邯鄲の都旦暮の中秦より降んとす而るよ魏の救ひ至らす安か公子の能く人の困を急よすると謂へけんや且公子縦ひ勝を輕し之を棄て秦より降せ玉ふとも獨り公子の姉を憐み玉のぬとい有へからずと頻り追るよ信陵君深く患へ數々魏王に請且賓客辨士を以て魏王に利害を説しむると万端すれとも魏王

一途は秦の猛威を恐怖し遂に公子の請を聽さるより信陵君自ら度は終に援兵を王に得ると
 能さるへしされぬ獨生存へて趙の國のみ亡させし吾天下の豪傑を對して何とて面を合さるへ
 きと乃ち賓客を請ひ車騎百餘乗の人数を約し客を以て往向ひ秦の大軍と一戦し趙の國人と相俱
 快戰死するより他の策なしと心此を決しければ其準備既に全く定り彼夷門に至り侯生を
 見て具に秦の大軍に向て戦死せんとするの状を告げ辭決して行んとする時侯生か曰く公子勉強
 し玉へかし臣年老て往も用なく妨あらんと辭して他言のあらされぬ公子の別て去る事二三里
 心中甚だ快からず吾侯生を待ふ所以の者の聊か缺る所なく禮義を全く備へたる天下の人も
 聞及て知さる者のなき程あるよ今吾且死せんとする時又當り彼曾て一言半辭も吾を送る事な
 し我豈平生彼を待ふは尙失ふ所有ものかと心深く怪みければ復車を引て還りて侯生は打向ひ
 心中を包す語るは侯生笑て曰ける臣固より公子の復還り玉ふを知居れり公子の士を喜玉ふ名
 の天下は聞へてあるものを今かゝる大難は陷玉ひ他端なくして秦軍を撃入らんとするとの譬
 の肉を以て餒たる虎は投與るか如し何の功か之有んや尙安る客を事とせんや然も公子の臣を
 遇ひ玉ふと殊も厚し公子今死し趣き玉ふは臣送り奉らす是を以て公子の之を恨みて復返り來
 り玉ふとを知るあり其時公子再拜して先生奈何ある計か有る願くは教へ玉へと問ければ侯生從
 者を屏けて問かよ公子は語りけるは竊聞く鄴の地は滯軍したる將軍晉鄴か兵の符の常は王の臥

内は在りと聞く今如姫最も王に寵幸せられ王の臥内は出入するとを許されたりと力能此兵の符
 を竊得ると成りぬへし竊聞く如姫の父人は殺され如姫復讐の心を資畜居ると已は三年も及へり
 魏王より以下其父の仇を報ずるとを求んと欲するも能得るとあし公子客を命して其仇の頭を斬
 らせて敬みて如姫を進め送さる如姫の公子の爲に死せんと欲して辭する所なからん願も未だ路
 あらざるのみ公子誠一たひ口を開きて如姫を請ひ玉ひなり如姫の許諾事必定あり其時の晉鄴は
 與へある片割なる虎符を以て晉鄴か陣營に至りて其軍を奪ひて北に趙を救て西に秦を却けなん
 此五霸の伐と云ふへきあり臣其如姫の父の仇を知れり事云々して斯々なりと云ふは悦び其仇を
 撃しめて如姫を送て兵符を奪ふとを請ひければ如姫の父の仇を報せられたる大恩は答へずん
 恩義を知らぬ者なりと一命を掛て晉鄴か兵符を盗みて公子はこりの與へけり公子既も兵符を得
 て將も發せんとするよ及びて侯生公子を謂けるは大將外は在る時の主の命とても受さる所あり
 て以て國家を便するを第一義とせり公子即ち符を合するも晉鄴公子は兵を授けして復王よ之を
 請ひなり百計發露して事破るのみならず公子の身危かるへし臣か親友彼屠屠者の朱亥ある者こ
 り其任は堪たる者よあるなれ俱に與よし玉ふへし此人力量衆も出たり晉鄴故なく兵を渡さる
 事成就して大よ善きも或り疑ひて聽さる時の朱亥よ之を撃しむへしさらすの破れやあらん
 と事詳かよ説よけり是時公子泣ければ侯生か曰く公子死を畏れ玉ふよ何故泣せ玉ふると問

へん公子のされのよて晉鄙の魏國よて嘯暗たる議論多き大將なり往て兵符を合するとも聽ざる
 ことを恐る、ありされの必す殺すに至るの必定あり故に思す泣たるのみ豈死を畏るとの有へきや
 と是より公子の朱亥の家に至り其概略を窺ふ語り俱に行とを請ひしかの朱亥咲て曰く臣の乃ち
 市井の刀を鼓する屠者にして公子數々之を存問玉ふの身は餘りたる大恩あれと今日とても報謝
 し奉らぬの以爲は小禮用ゆる所なしと今公子一大事あり此乃ち臣か命を效すの時よころと遂に
 公子と俱よせり公子返て侯生に謝しければ侯生か曰く此回の一大事臣も宜しく扈從すへき者な
 れとて老て其任は堪かたし請らくの公子か行せ玉ふ日數を數へ晉鄙の軍に至り玉ふの日を以て
 北に向て自到ねて以て公子の出戦を送りなん公子遂に行き鄴に至り魏王の命令と矯りて晉鄙
 と代て大將たらんと爲しけるよ晉鄙符を合せて大に疑ひ手を舉て公子を視て曰く今吾十万の大
 兵を擁て境上よ屯せり國の重任よて有ものを單車よて來て之よ代るとい如何ある事や一應王
 よ使を奉り其命よ任すへしとて中々聽受へき容あらぬの朱亥の隠し持たる四十斤の鉄の椎と出
 すよと見へしか其場を去らせず晉鄙の頭を撃ければ晉鄙の争か堪ゆへき二言ともあく仆れ死し
 ける公子遂に晉鄙の軍勢を奪ひ兵を勒めて令を軍中よ出して曰く父子俱に軍中よ在る者の父の
 歸れ兄弟俱に軍中よ在る者の兄の歸れ獨子よして兄弟あき者の歸て父母を養へと是等を去て選
 る兵士八万人を得て兵を進て秦の軍を撃ければ秦軍此勢よ恐れけん兵を解て退きければ邯鄲の

都の始めて此時危急を免れけり趙王及び平原君 自公子を國界よ迎へ平原君の羈矢を負て公子
 の先引を爲して招じ入れ趙王再拜して曰く古へより賢人未だ公子よ及ぶ者わらすとて頻に尊敬
 なしよけり此時よ當り平原君敢て自ら人よ比せずと深く謙退なしよけり彼侯生の公子と決し公
 子の軍に至りし日を數へ北に郷ひて 自到ねたりと又魏王よの公子の其兵符を盗み矯りて晉
 鄙を殺すを怒りけるよ公子も亦爲す所の道よあらぬを知るものから已に秦軍を逐ひ退け兵士よ
 用なけれの裨將よ命して其軍よ將として魏の國へ歸し公子の罪を恐れ獨り其客と趙の國へ留
 りける趙の孝成王公子の王命を矯て晉鄙か兵を奪ひて趙を存するを恩徳とし乃平原君と計り五
 城を以て公子を封せんとす公子之を聞て意氣驕り矜りて 自功とするの顔色ありければ客公子
 よ説けるの物忘るへからざる者あり忘れすんのあるへからざる者あり夫人公子よ恩徳あるの公
 子忘るへからず公子人よ恩徳あるの願くの公子之を忘れ玉へ且魏王の命令を矯て晉鄙の軍を奪
 ひて趙を救ふの趙よ於てする時の功あるも魏よ於てする時の未だ忠臣と謂べからず公子乃て自
 ら驕て之を功とし玉へり竊ふ公子の爲よ取ざるなり是よ於て公子 立よ自ら攻め容る所無き者
 の如し趙王掃除し自ら迎へ主人の禮を執り公子を引て西の客階よ就しめけるよ公子側行辭讓し
 て趙王の後よ從ひ東の主階より上り自ら罪過を言ひ魏よ負き趙よ功無きとを以てせしかの趙王
 酒よ侍り暮よ至るまで口よ五城を獻するとを言ふよ忍すこの公子の退讓して尤も禮ある故心よ

其少きを恥てなり公子竟も趙も留る趙王邸の地を以て公子の湯沐の邑とあし魏國もても信陵の地を公子へこり奉けり趙も處士あり毛公と云者の博徒は藏れ孽公と云者の賣漿家も藏れ居ると公子預て聞傳えしも他國の事故行は由なくありけるか此時こり兩人を見んものと彼處此處と訊れしよ兩人の自ら匿れて公子を見るを肯せず公子兩人の所在を熟と聞質し乃ち間歩して此兩人は尋ね遇ひ從ひ遊て甚た歡愛なしけり平原君之を聞て其夫人は謂て曰く始め吾夫人の弟公子の天下無雙の人なりと今吾之を聞くも博徒賣漿者と遊ぶ公子の妾人と云んれみ夫人其言を以て公子は告けれの公子乃ち夫人は謝して去んとす夫人愕て之を止めけれの公子の曰く始め吾平原君の賢なることを聞し故魏王は負て趙を救ひ以て平原君の請ひも稱へたり今其言を聞くも平原君の游の徒は豪者を擧る耳士を求るとい言かたし無忌故國大梁は在りし時より此兩人の賢なることを聞くも久し幸も此國も至り見るとを得ざることを恐ひ無忌より往て之も從ひて遊ぶも此兩人我を拒んとを恐れたるも幸よしして容られたるの悦ひも堪へずざるを平原君の乃て以て羞となす其從ひて遊ぶもい足さる人と思ふなり乃ち旅装して去らんとするも其儘も止かたく夫人具も平原君に告けれの平原君大も羞ち冠を免て謝し固く公子を留む平原君の門下の士之を聞て半の平原君を去りて公子は歸し且天下の士も復往て公子は歸しけれの公子平原君の客を傾けり公子趙も留まると十年もして歸す秦公子の趙も在ると聞き日夜兵を出して東の方魏を伐ける

故魏王之を患ひ使を以て往て公子は歸國を請ひけるも公子の魏王の怒を恐れ歸る心のあらされ乃ち門下は誠らく敢て魏王の使の爲も講を通する者あらは死せんと賓客皆魏を背て趙も往き敢て公子は歸るとと勸る者もあかりけり毛公薛公の兩人往て公子は見て曰く公子の趙も重せられ名の諸侯は聞ゆる所の者も徒魏有るを以ての故なり今秦魏を攻む魏急もして公子恤へ玉秦大梁を破りて先生の宗廟を夷けしむるとあらは公子當も何の面目ありて天下も立んと思ひ玉ふやと其語未だ卒るも及のさるも公子立地も顔色を變申を命し駕を趣し歸て魏を救ふ魏王公子を見て相與も泣き上將軍の印を以て公子は授けれの公子遂も將たり魏の安釐王三十年公子使を以て遍く諸侯も告しむ諸侯公子の將たりと聞て各々兵を將ひて魏を救ふ公子五國の兵を率て秦の軍を河外も破りて秦の大將驂鷲を逐走し遂も勝も乘して函谷關も至て秦の兵を抑へたり秦の兵敢て出す是時も當て公子の威天下も振ふ諸侯の客兵法を進む公子皆之も名く故も世俗魏公子の兵法と稱す秦王之を患ひ乃ち金千斤を魏も行なひ晋鄙の客の恨を報ひんを欲する者を求め公子を魏王も毀らしめけるの公子亡て外も在ると十年も今歸て魏國の大將たり諸侯の將皆屬せり諸侯徒も魏も公子有るとを聞て魏王有るとを聞す公子もし此時も因て南面して王位を奪へんと欲す諸侯皆公子の威靈も畏れて方も共も之を立んと欲すと秦數々反間を以て偽りて賀せしめ公子の立て魏王と爲るも未ありやと問せけり魏王日も其毀を聞て信せざるも能す後果して人を公

子代て將たらしむ公子自ら再び毀を以て廢らるゝことを知り乃ち病と謝えて朝せず賓客と長夜の飲を爲し醇酒を飲み多く婦女を近づけ日夜樂飲を爲す者四歳竟酒を病て卒せり其歳魏の安釐王も亦薨しぬ秦公子の死したるを聞て蒙驁を大將として魏を攻め二十城を拔て初めて東郡を置く其後秦稍魏を蠶食し十八歳又して魏王と虜よきて大梁を屠りけり漢の高祖微少みて在し時數々公子の賢あるとを聞き天子の位よ即きて後大梁を過る毎々常々公子を祠れり高祖の十二年黥布を伐て還る時公子の爲よ守冢五家を置き世々歳又四時を以て公子を奉祀とを定めけり太史か曰く吾大梁の墟を過き其所謂夷門を求め問ふ夷門の城の東門なり天下の諸公子亦士を喜む者あり然るよ信陵君の巖穴の隱者よ接り下交を恥さるの以有るかな名の諸侯よ冠たるの盧しからさるのみ高祖之を過る毎々民よ命して奉祀の絶さらしめられけり

春申君列傳第十八

春申君の楚人あり名の歇姓の黃氏游學して博聞の聞えあり楚は頃襄王よ事ふ頃襄王歇を以て辨と爲し秦の國へ使よ遣りける此時秦の昭王白起よ命して韓魏を攻しめ之を華陽よ敗り魏の大將芒節を禽よしければ韓魏服して秦よ事へぬ是よ因て昭王白起よ命して韓魏と共よ楚を伐しむ未た行すして楚の使黃歇適々秦よ至り秦の計を聞く是時よ當て秦已よ前よ白起よ命して楚を攻て巫黔中の郡を取て鄢郢の地を拔き東の方竟陵の地まで掠めけれり楚の頃襄王東よ徙りて陳縣よ

都せり黃歇楚の懷王の秦よ誘かれて入朝し遂よ欺かれ留りて秦よ死するを見る頃襄王の其子なれり秦之を輕し一ひ兵を擧て楚を滅すとを恐れ歇乃ち上書して秦の昭王よ説て曰く天下秦楚より強きの莫し今聞く大王楚を伐んと欲すと此猶兩虎相與よ闘ふか如し兩虎相與よ闘て驚馬其弊を受く因て楚を善するよ如かす臣請ふ其説を言ん臣聞く物至る時の反る冬夏是なり致至る時の危し累基是なり今大國の地天下よ遍く其東西の二垂を有てり此生民より以來万乗の地未た嘗て有さるなり先帝文王莊王の身三世忘れず地を齊よ接し以て從親の要を絶つ今王感橋をして事を韓よ守らしむ盛橋其地を以て秦よ入る是王甲を用ひす威を信すして百里の地を得たり王能有と謂へし王又甲を擧て魏を攻め大梁の門を杜き河内を擧燕の酸棗虛桃を拔て邢よ入る魏の兵雲の如く翔て敢て據す王の功も亦多し王甲を休へ衆を息へ二年よして後之を復せり又蒲衍首垣の地を并せて以て仁平丘の地よ臨み黃濟の地の城よ嬰て魏氏服しぬ王又濮磨の北を割き齊秦の要を注ち楚趙の脊を絶天下五よ合ひ六よ聚りて敢て救いす王の威も亦單せり王若能功を持ち威を守り攻取の心を細けて仁義れ地を肥し後の患へ無らしめり三王も四よするよ足す五伯も六よするよ足す王若人徒の衆を負み兵革の強きよ仗り魏を毀るの威よ乘して力を以て天下の人主を臣とせんと欲せり臣其後患あるとを恐るゝあり詩よ曰く初有らさると靡く克終有と鮮し易よ曰く狐水を涉りて其尾を濡すと此始めの易して終の難とを言かり何を以て其然るとを知るよ

れハ昔智氏趙を伐の利を見て檢次の禍を知らず吳齊を伐の便を見て干隧の敗を知らず此二國ハ大功なき非す利ハ前ハ没て患を後ハ易たるなり吳の越を信するや從へて齊を伐ち既ハ齊人ハ艾陵ハ勝て越王ハ三渚の浦ハ禽となれり智氏の韓魏を信するや從へて趙を伐ち晉陽城を攻て勝と日あり韓魏の二國之ハ叛き智伯瑤を鑿臺の下ハ殺せり今王楚の毀れざるを妬みて楚を毀るの韓魏を強くするとを忘レたり臣王の爲ハ慮りて取らざるなり詩曰く大武遠きハ宅を涉らすと此よりて之を觀れハ楚國ハ敵あり鄰國ハ敵あり詩曰く趨々たる麋兔犬ハ遇て之を獲らる他人心あり余之を忤度ると今王中道よして韓魏の王を善するとを信するハ此正ハ吳の越を信するあり臣之を聞けり敵ハ假すハからず時ハ失ふハからず臣韓魏の辭を卑し患を除きて實ハ大國を欺かんと欲するとを恐る、あり何となれハ則王ハ世を重るの韓魏ハ徳する無くして世を累るの怨みあり夫韓魏ハ父子兄弟踵を接て秦の爲ハ死する者將ハ十世ハ及んとす本國ハ殘ハれ社稷ハ壞られ宗廟ハ毀たる腹を割腸を絶頸を折き頤を拉き首身分離れ骸骨を草澤ハ暴し頭顱儘れ仆れて境ハ相望む父子老弱脛を係け手を束ね群虜と爲る者路ハ相及ふ鬼神孤傷し血食する所なし人民生を聊す族類離散流亡ハ僕妾となる者海内ハ盈滿り故ハ韓魏の亡ハひざるハ秦の社稷の憂ハあり今王之を資て與ハ楚を攻るハ亦過ちならずや且大王楚を攻るハ將ハ惡より兵を出さんとするや王將ハ路を仇讎なる韓魏ハ借んとするか兵出るの日よして王其返らざるを憂

るなり是王兵を以て仇讎の韓魏を資くるあり王若路を仇讎の韓魏ハ借すんハ必隨水の右壤を攻なん隨水の右壤ハ皆此廣川大水山林谿谷多く不食の土地なり王之を有つと雖も地を得ると爲さず是王楚を毀るの名のみ有て地を得るの實なし且王楚を攻むるの日ハ四國必悉く兵を興て王ハ應せん秦楚の兵構て離されば魏氏將ハ出て留方與。鉅。湖。陽。蕭。相を攻んとすれハ故の宋國ハ必す盡なん齊人南面して楚を攻むハ泗上の地ハ必す擧げん此地ハ此皆平原四達膏腴の地よして齊獨よ之と攻しむ王楚を破りて以て韓魏を中國ハ肥して齊を勁くせん韓魏の強きと秦ハ核るよ足り齊ハ南泗水を以て境と爲し東海を負ハ北河水ハ倚て後の患なき時ハ天下の國ハ齊魏より強きハ莫し齊魏地を得利を葆て詳て下吏ハ事ハ一年の後帝とあると未だ能すとも其大王の帝となることを禁するよ於てハ餘りあらん夫大王の擧土の博き人徒の衆き兵革の強きを以て壹たハ事を擧て怨を楚國ハ樹て遲ち韓魏ハ帝業を歸し齊國を天下ハ重んせしむるハ是大王の失ちの計事と云ふへし臣大王の爲ハ慮るハ楚國を善するよ若ハ否ハ秦楚合て一と爲て以て韓ハ臨ハ韓必す手を斂て爲すとかなるべし大王施すハ東山の嶮岨を以てハ帶むるよ曲河の利を以てせハ韓ハ必す秦の關内の諸侯とならん若是よして大王十方の兵と以て鄗を成しめハ梁氏ハ心を塞からしめん許。鄢。陵。城ハ嬰て上蔡。召。陵ハ往來の路斷絶せん此の如くある時ハ魏國も亦大王の關内の諸侯とあらん大王一たび楚國を善して關内兩萬乘の主を得て地を齊國ハ注ハ齊の右壤

手を拱きて取るへきなり大王の地一も東西の兩海を經り天下を要約せん是燕趙の齊楚を待すして服せん昭王
 楚の燕趙をきなり然る後燕趙を危め動し直も齊楚を搖しな此四國の痛を待すして服せん昭王
 の曰く善し是よ於て白起を止て韓魏を謝し使を發して楚を賂ひ約して與國を爲りよけり黃歇約
 を受て楚を歸る楚歇をして太子完も傳として入て秦も人質とせしむ秦之を留めると數年よし
 て歸さす楚の頃襄王病も係りけるも太子の國へ歸るとを得す而るも楚の太子の秦の宰相應侯范
 雎と善かりしかの黃歇乃ち應侯も説て曰く相國誠も楚の太子よ善きか應侯の曰く然り歇か曰く
 今楚王疾も係りて起と能いさるとを恐る其太子を歸すも如す太子楚王よ立とを得り其秦も事ふ
 ると必ず重して相國を恩徳とするも究りなからん是與國を親みて万乘も儲るとを得るなり若
 歸ざる時の咸陽の一の布衣のみ楚更も太子を立い必ず秦も事へすうれ與國をうしなひて万乘の
 和を絶り計りことよ非らず願いけり相國執とこれを慮たまへ應侯諾して秦王も聞しける
 秦王聞てさらの楚の太子の傳も先往て楚王の疾を問せよかし其人返て後もこころ之を圖て然るへ
 しと命しにけれの黃歇の楚の太子の爲も計て曰く秦の太子を留るの利を求んと欲してあり今太
 子の力未だ能秦を利するの資財なし歇之を憂慮ふと甚たしきも如何とも爲かたし而して陽文君
 の子二人中も在り父王大命を卒玉ひ太子在る時の陽文君の子必ず立て後嗣とあらんされの太
 子の宗廣も奉とを得へからす回て秦國を亡去て此度楚國へ行く使者と共も出玉ふよの如と有

へからす臣請ふ留りて死を以て秦王の責も當らんと勸めけるより楚の太子の因て衣服を變して
 楚の使者の御者と爲りて關門を出て楚國へ逃歸りける黃歇の舍を守て常も太子の爲も病と謝し
 太子の已も遠く去り今の追兵も及しと思ふ日限を計て歇乃ち自ら秦の昭王言て曰く楚の太子
 已も歸り出る事遠し歇の罪死も當れり願くは死を賜るへし昭王大も怒り黃歇も自殺を聽さんと
 爲しける時應侯か曰く歇人の臣と爲り己か身を投て以て其主の難も殉り忠と云へし太子楚
 國も君とあらん必ず歇を用ゆるあらん故も罪するもなくして之を歸し以て楚と親むよ如いなし
 秦王之も聽て黃歇を楚國へこころ遣返しけり歇楚も歸て三月もして楚の頃襄王卒しぬ太子完立
 て位も即く是を考烈王とす考烈王の元年黃歇を以て宰相とし封して春申君と爲し淮北の地十二
 縣を賜ふ後十五歳黃歇之を楚王も言て曰く淮北の地の齊國も邊し其事急かり請らくは以て軍と
 爲こころ便利あらん因て淮北の地十二縣を併せ獻し封地を江東の地も請ひけれの考烈王之も許し
 けり春申君因て故の吳王の墟も城を美麗も建築して以て自都邑と爲しけり春申君既も楚も相
 たり是時齊國も孟嘗君あり趙國も平原君あり魏國も信陵君あり方も争ひて士も下り賓客
 を招き致して相送も傾け奪ひ國を輔け權を執りぬ春申君楚の宰相とあるも四年もして秦趙の長
 平の戦ひあり五年秦の兵趙の都の邯鄲を圍みける故邯鄲將も陥んとするの急を以て楚國も救を
 請ひけれの楚の春申君を大將として往て楚之を救しむ秦の兵も亦去りぬ依て春申君の歸りけり

春申君楚國に宰相たる八年ふして楚の爲に北伐して魯國を滅しぬ大儒荀卿を以て蘭陵の令と
 なせり是時ふ當て楚國復強し趙の平原君人を春申君に使す春申君之を上等の客館へ舎せしめた
 り趙の使楚に誇んと欲し瑋瑋の簪を爲り刀劍の室に珠玉を以て之を飾り使命を春申君の客に請
 ひけるよ春申君の客三千餘人其上客の履と躡て趙の使を見しかり趙の使の夫は慙入ける
 春申君宰相たると十四年秦の莊襄王立ち呂不韋を以て宰相とし封して文信侯と爲し東周を取れ
 り春申君相たると二十二年諸侯秦の攻伐との己むとあきを思へ乃ち相與ふ合從して秦を伐ける
 よ楚王從約の長たり依て春申君事を用ひ秦の函谷關まで至りけるよ秦も兵を出して諸侯の兵を
 伐けれぬ諸侯の兵大に敗走しぬ楚の考烈王春申君を咎む春申君此を以て益々疎る客を觀津の人
 朱英と云ふ者あり春申君よ謂て曰く人皆楚國を以て強しとして君之を用ゆると願し其英は於て
 然らず先君の時秦よ善きと二十年よして楚を攻さるとい何うや秦黽隘の塞を踰て楚を攻むる
 の便ならず道を兩周に假り韓魏の二國を背よして楚を攻むるの不可なれなり今然らず魏國
 の且暮よ亡んとし許の鄢陵の地を愛むと能はず其許の地の魏割て以て秦よ與へんとす秦の兵陳
 の地を去ると百六十里臣の觀る所の者の秦楚の日よ闘ふを見るなりとの議論ふ因て楚の陳の都
 を去りて壽春と云地へ徙りけり楚の考烈王子なし春申君之を患へ婦人の子を生むべき者を求て
 王よ進ると幾人かよ及ひしも卒に子なし趙人李園其妹を持て之を楚王よ進んとせしか其妹の子

よ宜き体格よあらされば久しき内よの寵愛の母らんとを恐ひ李園の聽て春申君よ事へ舍人と爲
 るとを求め已よして一旦謁て家よ歸り故よ日限を遅引して歸り謁まければ春申君何故斯遅引せ
 しと問ければ對て曰く齊王使を以て臣の妹を求められしよ依り其使者と酒を飲み思ひす期日
 を失りしと謝するよ春申君其婚姻の娉物已よ濟たるかと問れて李園未だ然まてよ至らずと對る
 詞よ春申君其妹を一見するとあるへきかと問れて李園うの容易の事なりとて乃ち其妹を進めし
 よ即ち春申君よ幸せられ聽て懐胎おしよければ李園乃ち其妹と謀て間を窺ひ春申君よ説けるに
 楚王の君を貴幸すると兄弟とても及ひかたし今君楚に相たると二十年よして楚王子おし即ち百
 歳の後よ至るに將よ更よ王の兄弟の中を立んとするからん其兄弟を立る時亦各々其故の親む
 所を貴ひて君よ又安んず永く今日の寵貴を有ち玉のんや徒夫のみよ非ずして君貴くして事を用ゆる
 と久し多く禮儀を王の兄弟よ失ひ玉ひし事も有なん誠兄弟の立玉の禍の身よ及ふに必せり争
 か宰相の印と江東の封地とを保たせ玉のん今妾自ら身有るとを知れり世間の人の知るよ由お
 し且又妾か君よ幸せられ侍りしも未だ久からされは是亦世人の争か知らん誠君の身身の重きを
 以て妾を楚王よ進玉の、王の必す妾を幸し玉のん妾天の幸を得て此子の男子よありもせり是君
 の子の楚國の王と爲り玉ふなりされは楚國の盡く得へきありは身の測れざる罪よ臨み玉ふと
 孰與と思ひ玉ふりやと云れて春申君大に然りとし乃ち李園の妹を出して謹みて別殿よ舎らしめ

之を楚王よ言けれぬ楚王の召し見て大よ悦び遂よ之を幸し間もなく男子を産けれぬ立て太子と爲し李園の妹を以て王后と爲し爲しよけり是よ於て楚王李園を貴ふ園よりて事を用ゆ李園其密謀の春申君の語より泄て益々驕り亢るを恐れ陰よ死士を養ひて春申君を殺し口を滅さんと巧みけり國人頗る之を知る者有けれど李園の威權よ辟易して口を籍み知らぬ顔して過去ぬ春申君宰相たると廿五年よして楚の考烈王病よ懼りけり爰よ朱英の一日春申君を訪ひ左右を屏けて謂て曰く世よ母望とて思ぬ福のある者あり又母望とて思ぬ禍の有る者あり今君死生常あき母望の世よ處て安か母望の人無かる可けんや春申君か曰く何如ある事を母望の福と云ふとや朱英か曰く君楚國よ相たると二十餘年名の相國と雖も實の楚王あり今楚王病よ係り且暮の内よ將よ卒せんとす君少嗣君を相けて因て代立て國よ當り伊尹周公の如くし王長して後政を返し不さる時の遂よ南面して孤と稽して楚國を有ん此所謂母望の福と云ふへけれ春申君か曰くさらぬ又母望の禍どの如何なる事りや朱英か曰く李園國を治めずして君の仇より有へけれ兵卒の爲よあらずして死士を養ふの日久し楚王卒する時の李園必ず先權よ據て君を殺して口を滅せん此所謂母望の禍と云へけれ春申君か曰くさらぬ又母望の人どの如何なる人を云ふ事りや曰く君臣を郎中の官よ置たれぬ楚王卒せぬ李園必ず先入らん臣君の爲よ李園を殺さん此所謂母望の人と云へけれ春申君か曰く足下置ね李園の弱人よこり且僕も最睦しく語への争かか、る企

の有へきやと異見を用ゆる容なけれぬ朱英の禍の身よ及ぬんとを深く恐れ跡を暗まし逃去けり後十七日よして考烈王卒しぬ李園果てし先入て死士を城の棘門の内へ伏置けり春申君の棘門の内へ入るを待て狭みて之を刺殺し其頭を斬り之を棘門の外よ投捨けり是よ於て遂よ更人よ命して春申君の一家を滅し李園の妹の産たる春申君の子を立て是を楚の幽王と爲しよけり是歳秦の始皇帝立て九年嫪毐も亦乱を秦國よ爲し事覺て三族を夷られ呂不韋も廢せられけり太史公か曰く吾楚國よ適き春申君の故城宮室を觀しよ盛あるかな初春申君秦の昭王よ説き及ひ身を出し抛て太子を遣り歸すよ至て何り其智の明かあるや後李園よ制せらる、の旄しならん語よ曰く當よ斷すへくして斷せされぬ反て其乱を受くと春申君朱英を失するの謂ひ耶

范雎蔡澤列傳第十九

范雎の魏人なり字の叔諸侯よ游説し魏王よ事へんと欲すれ共家貧きて自ら資あきを以て乃ち先魏の中大夫須賈よ事ふ須賈魏の昭王の爲よ齊よ使せり范雎隨從し留ると數月未だ報を得ず齊の襄王雎か辨口を聞て乃ち使を以て金十斤及ひ牛酒を賜りけるよ雎辭謝て取て受す須賈之を知りて大よ怒り范雎魏國の陰事を以て齊よ告たる故か、る饋を得たる者よ以爲其牛酒を受て其金を遠させけるか既よ齊より歸りて後心中よ雎を怒り以て魏の宰相よ此事を告よけり魏の宰相の魏の諸公子よして魏齊と曰ふ魏齊の聞て大よ怒り舍人よ命して痛く答せ脅を折齒を摺く雎伴て

死し即ち其屍を簀を巻て厠の中よ置き賓客の酒を飲たる後ハ酔て更々睢ハ溺せしむ故又辱め
 て後の人々を懲し安かる言を他國へ告る者無らしめんと計ひける睢簀の中より守者よ言けるハ
 公能我を出し玉ハれ我必ず厚く公よ謝せん守者乃ち簀の中の死人を出し弄んと請ひけれハ魏齊
 醉たるとなれハ其死生をも検査せず可なりと指揮しけれハ范睢纒も出るとを得たり魏齊後よ之
 を悔ひ復召て之を求めしかハ魏人鄭安平預て范睢の才略ハ深く服して有けれハ乃ち遂ハ范睢を
 操携へて亡て兩人伏匿れて范睢ハ名姓を張祿と更めて遂ハ捕縛を免けり此時ハ當りて秦の昭王
 謁者王稽を魏よ使よ遣しけり鄭安平ハ詐りて卒と爲り王稽よ侍し竊ハ范睢を薦んと思ふ時しも
 王警ハ鄭安平よ打向ひ當國ハ賢人の吾ハ歸ると與よ俱ハ西秦國ハ游ふ者ハ有と無きヤと問れて
 鄭安平心よ悦ひ臣ハ里中ハ張祿先生と云ふ者あり君よ見へて天下の議論を盡さんと願へども其
 人仇ある故を以て晝間よ見えかたかりと言ふハ王稽夜とても何か厭ふへき汝與俱ハ伴ハ來れと
 言ふハ鄭安平愈々悦ひ其夜竊ハ張祿を伴ひて王警よ見えさせけり語未だ究ぬハ王稽范睢ハ賢人
 なることを知り先生我ハ歸國の日を期して三亭の南ハ待て玉ハれかし俱ハ秦國へ伴ハんと私ハ約
 して去よけり己よして王稽ハ魏の報を得てけれハ歸路三亭を過て范睢を車よ載て秦ハ入り湖關
 至る車騎の西より來を望見て范睢ハ曰く彼來る者ハ誰人リヤ王稽ハ曰く秦の宰相穰侯東の方
 縣邑を巡行する者リ范睢ハ曰く吾聞穰侯ハ秦の權柄を專よし諸侯の客を内るとを惡りと此恐く

ハ我を辱しめん我寧車の内ハ匿れかんと物を覆て打伏たり頃くありて穰侯果して至り王稽の使
 の勞と勞ひて因て車を立て語て曰く關東何の變かある王稽ハ曰く變有と無し又王稽ハ謂て曰く
 謁君諸侯の客子と俱ハ來る無とを得んヤ益なくして徒ハ人の國を亂すのみ王稽ハ曰く敢てせず
 即ち別れ去けれハ范睢ハ曰く吾聞穰侯ハ智士なりと然れども其事を見るよ遲し郷者ハ車の中
 人ハ有とを疑ハあから之を索とを忙たりとて范睢ハ直ハ車を下りて走りて曰く此必ず悔て引返
 して來かんと行と十餘里果して騎兵を還て車の中を索せけるハ客無りけれハ事ハ已ぬ王稽遂
 ハ范睢を伴て感陽の都ハ入り己ハ使命を報し因て言て曰く魏ハ張祿先生と云ふ者あり天下の辨
 士あり先生の曰く秦王の國ハ累卵よりも危し臣を得れハ則安し然れども其言書を以て傳ふハか
 らず故ハ臣車よ載て共ハ來れり秦王其言を信せず旅舎よて蔬食草菜の饌具を與ハ命を待しむる
 と一歳餘より及ひける是時ハ當りて昭王己ハ立て三十六年南の方楚の鄢郢を拔き楚の懷王秦ハ
 幽れて死し秦又東の方齊の濬王を破り嘗て一旦帝号を稱して後之を去り數々三晋ハ困められ天
 下の辨士を厭て信する所なし穰侯華陽君ハ昭王の母宣太后的弟あり涇陽君高陵君ハ皆昭王の母
 弟なり穰侯宰相たり三人の者更々大將として封邑を有ち太后の故を以て私家の富王室より重し
 穰侯秦の將とあり且ハ韓魏の二國を越過て齊の剛壽を伐ち已ハ陶の封邑を廣くせんとするよ及
 ひて范睢乃ち上書して曰く臣聞明主の政を立るハ功ある者ハ賞せさるとを得ず能ある者ハ官

せざるを得ず勢大なる者の其祿厚く功多者の其爵尊く能衆を治る者の其官大なり故に能なき者の敢て職に當らず能ある者も亦蔽ひ隠すとを得ず臣の言を以て可と爲しめ願くは行ひて其道を利せよ臣の言を以て不可と爲さぬ久しく臣を留むるも爲となし語曰く庸主の愛する所を賞して惡む所を罰す明主の則然らず賞の必ず功あるに加へて刑の必ず罪あるに斷す今臣の曾以て横質に當るに足す而して要に以て斧鉞を待し足す豈敢て疑ふ事をして王を試んや臣を以て賤人と爲して輕し辱むるといへとも獨臣を任する者の王は反覆無きとを重せざる耶臣聞く周は砥礪あり宋は結緑あり梁は懸黎あり楚は和朴あり此四の寶玉の土の生する所良工の失ふ所あり而して天下の名器となる然る時の聖主の弄る所の者の獨以て國家を厚くするに足さらんや臣聞く能家を厚くする者の之を國に取善國を厚くする者の之を諸侯に取ると天下明主有る時の諸侯は厚くするを得ざる者の何うや其榮を割か爲あり良醫の病人の死生を知りて聖主の成敗の事は明かあり利ある時の之を行ひ害ある時の之を舍疑き時の少く之を嘗む舜帝禹王復生すると雖も改むると能ざるのみ語の至る者臣敢て之を書き載す其淺き者の又聽ふ足す意者臣愚にして王の心は關涉せざるか其臣と言者賤者あるを亡りて用ゆへからすとす然るに非るより臣願くは少しく遊觀の間を賜ひ王の顔色を望み見るとを得ん一語効あるん請ふ斧質は伏して誅を待ん是に於て秦の昭王大に説ひ乃ち王稽は謝し傳車を以て范雎を召しむ范雎乃ち離宮

よて見ゆるとを得たり詳て永巷を知らざる爲して其中に入る王來る宦者怒て之を遂て曰く王至りと范雎繆爲て曰く秦安う王を得んや秦獨り太后穰侯あるのみ以て昭王を感し怒しめんとす昭王已に至り其宦者と争ひ言を開き遂に延て迎へ謝して曰く寡人宜く身を以て命を受へきと久し會々義渠の軍の事急なり寡人且暮自ら太后に請ふ今義渠の軍も已に已たり寡人乃ち命を受るとを得たり竊に閔然として不敏の者あり敬みて賓主人の禮を執て相見ゆるなりと言ふ范雎辭し讓けり此日范雎の昭王を見る景を視たる者の洒然顔色を變し容貌を易さる者なく敬ひける秦王左右の侍臣を屏く宮中虚しくして人無きか如し是に於て秦王跪きて請ふて曰く先生何事ある事を以てか寡人教へん范雎か曰く唯々是の如くする者三たび秦王跪きて曰く先生幸に寡人教へざるか范雎人教へん范雎か曰く唯々是の如くする者三たび秦王跪きて曰く先生幸に寡人教へざるか范雎か曰く敢て然るに非ず臣聞く昔者太公望の渭水の邊にて周の文王は遇ひ身漁父と爲て渭濱に釣するのみ此の如き者の交も亦疎りしかり已に悦びて立て太師の官と爲し車に載て與に俱に歸る者の其言の深き故あり故に文王遂に功を太公望の力に收て卒に天下に王たり卿に文王をして太公望を疎ましめて與に深く言しめされは是周の國の天子の徳無くして文王武王與に王業を成すと亦からん今臣の羈旅より至りし臣あり交り王に疎くして陳んを願ふ所の皆君を匡諫する事人の骨肉の間を處す愚忠を効とを願とも王の心を知らず此王三たび問玉ふも敢對へざる者な

り臣畏、と有て敢て言さるよの非す臣今日之を前よ言て明日誅後伏するとを知るされども
 敢て避さるなり大王信よ臣の言を行ひ玉の、臣の死するとも臣の患とするよの足す亡するとも
 臣の憂と爲るよの足す身よ漆ぬりて癩病と爲り髪を被りて狂人となるとも臣か恥とするよ足す
 且五帝の聖を以てすら死し三王の仁を以てすら死し五伯の賢と以てすら死し烏獲任鄙の力てす
 ら死し成荆孟賁王慶忌夏育の勇てすら死す死の人の必ず免れざる所あり必ず然るの勢も處て少
 くも秦國よ補ひと爲るとあらん此臣の大願ふ所あり臣よ於て又何う患るよ足んや伍子胥身を
 藁み載て昭關を免れ出夜の行き晝の伏れ陵水よ到て其口を餉ふへきとあし膝よて行き蒲伏し稽
 首肉袒腹を鼓き箠を吹き吳の市中よ乞食せしも卒よ吳國を振ひ興して吳王闔閭を伯とあした
 り臣よ謀を盡すとを得せしめ伍子胥の如くよして且幽囚られて終身王よ見るとを得さるとも
 是臣の説の行ゆる、と謂へきなり臣又何う憂へん箕子接輿の如き身よ漆ぬりて癩病と爲り髪
 を被りて狂人と爲るも其主君よ益あし假使臣をして行なひを箕子よ同じくするとを得せしむる
 とも賢とする所の主君よ補ひ有る可の是臣の大なる榮なり臣何の恥か有らん臣の畏る所の者の
 獨臣か死するの後の天下の人臣の忠心を盡して其身の死するを見て因て是を以て口を杜き足
 を裹て秦よ郷ひ來るとを肯する無きとを恐る、のみ足下上の太后の嚴なるを畏れ下の姦臣の態
 よ感ひ深宮の中よ居り何保の手を離す身を終るまで迷ひ感ひ與よ其姦惡を昭かよするとなし大

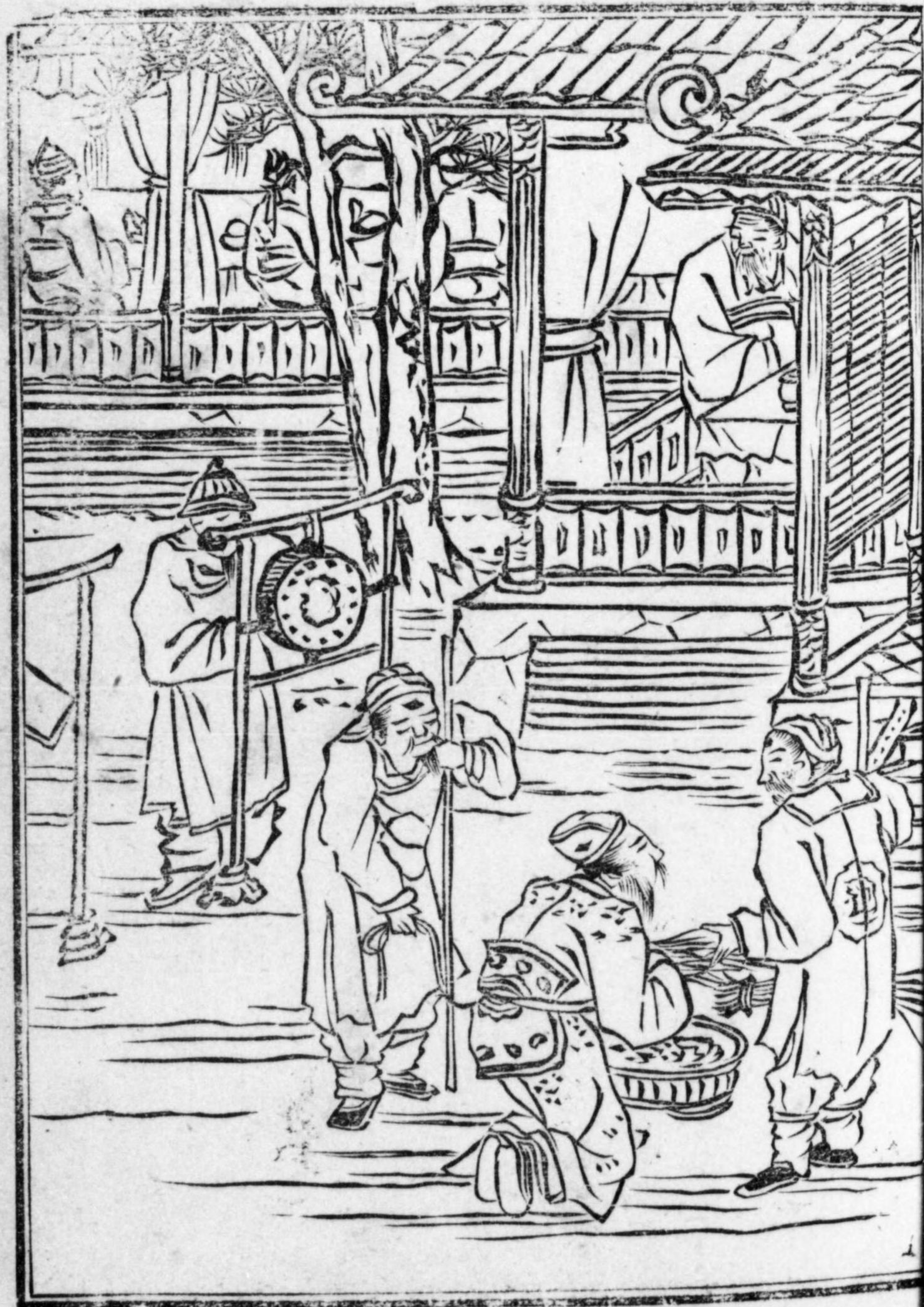
ある者の宗廟滅ひ覆り小なる者の身孤よして危し此臣の恐る所のみ夫究し辱められ死し亡ふる
 患への如き臣敢て畏れざる所あり臣死して秦國治りあり臣の死の生るより賢りかん其時秦王
 又跪きて曰く先生は何の言や秦國の僻遠よして寡人愚不肖あり先生乃ち幸よ辱けなく此地よ
 至れり是天寡人を以て先生を尊して先王の宗廟よ存しめんとの事ならん寡人命を先生よ受ると
 を得の是天秦の先王よ幸を降して其孤を棄さる所以なり先生争てか、る言を出すや秦國の事
 大小となく上の太后よ及ひ下の大臣よ至るまで願く先生悉く以て寡人よ教へよ寡人を疑ふと
 勿れ此時范雎起て拜しけれの秦王も亦拜して禮と爲しよけり范雎再ひ説出して曰く大王の國
 四方塞を以て固めとせり北よ甘泉谷口の險阻有り南よ涇渭の二水と阻隴蜀を右よ受關阪を左よ
 廻したり雲擊の勇卒百萬ありて戰鬪の堅車千乘あり利ある時の關を出て之を攻利あらざる時の
 關を閉て之を守る此天下よ王たるへきの地あり人民の私の門ひよ怯くして君の戦よの勇あり是
 天下よ王たるへきの人民なり大王此二つの者を并せ有ち玉へり夫秦卒の勇氣と車騎の大兵を以
 て諸侯を治め平けなむ譬の韓盧と云壯犬を馳て蹇の兔を搏よりも易し霸王の業致すへし而るよ
 群臣其位よ當ると莫し今日よ至るまで關を閉ると十五年よして敢て兵を出して山東の諸國を
 窺ひさる者の是穰侯か秦の爲よ謀ると不忠よして大王の計失ふ所あれのあり秦王跪きて寡人願
 くの失計を聞んと問けれども然れども左右の臣下鋌よ聽者多きとを恐れ范雎未だ敢て内事を云

先外事を言て以て秦王の俯仰を觀んと思ひ因て進て曰く夫穰侯韓魏の二國を越て齊の綱壽を
 攻の計よあらず少しく兵を出す時の齊を傷るよ足す多く師を出す時の秦よ害あり臣意よ王の
 計少く師を出して韓魏の兵を悉して出さしめんと欲する時の不義と言ふへし今與國の親まざる
 を觀つ、人の國を越て攻むるの可あらんや其計よ於て疎あり且昔者齊の潛王南楚を攻めて軍を
 破り將を殺し再ひ地を辟くと千里而に齊よ於て尺寸の地も得るとなき者の豈地を得るを欲せ
 さらんや形勢の有つと能されのなり諸侯齊國の罷れ弊て君臣の和せさると見て兵を興して齊
 を伐ち大よ之を破り士の辱られ兵の頓り皆其主を咎めて言けるの誰人か斯る計を爲したるやと
 言ふよ王の孟嘗君此計議を爲せしと言より大臣等乱を作し孟嘗君出奔をころ爲しよたり故よ齊
 の大よ破、所以の者の其楚を伐て韓魏を肥すを以てなり此所謂賊よ兵を借して盜よ糧を齎す者
 なり故よ王よの遠國と交を結て近國を攻取るよ如のなし一寸の地を得る時の王の一寸の地あり
 一尺の地を得る時の王の一尺の地あり今此策を釋て敵國を越て遠國を攻るの亦僂らずや且昔者
 中山の國地方五百里なりしを趙國よて獨之を呑み功成名立て利も亦附たり天下一人として之を
 害する者あし今夫韓魏の中國の處よして天下の樞かり王其霸たらんと欲せよ必ず中國を親みて
 天下の樞と爲して楚と趙とを威すへし楚強き時の趙を附なん趙強き時の楚を附なん楚趙皆附ん
 ばの齊必ず悞れん齊悞るれよ必ず辭を與し幣を重くして秦よ事へなん齊附るの韓魏の虜よすへ

きあり昭王の曰く吾魏を親まんと思ふと久し而るよ魏の變詐多き國なり寡人親むと能す請ひ問
 ふ魏を親むとい如何して善からん對て曰く王詞を卑くし幣物を重くして之よ事へされとも可す
 んの土地を割て之を賂ひさるも可されの因て兵を舉て之を伐ん王の曰く寡人敬て先生の命を
 開りと乃ち范雎を拜して客卿となして兵事を謀り卒よ范雎の謀を聽て五大夫の官なる縮と云者
 よ命して魏を伐て懷を抜き後二歳よして刑丘を拔たり客卿范雎復昭王よ説て曰く秦韓の地形相
 錯ると繡々如し秦の韓有るとの譬の木の益有るか如く人の腹心の病有か如し天下變なけれの則
 已ん天下變ある時の其秦の患を爲す者の孰か韓より大ある者あらんや王韓を収るよ如す昭王の
 曰く吾因より韓を収んと思しかり韓吾か言を聽さる時の奈何せん對て曰く韓安よ聽受さると有
 んや王兵を下して滎陽を攻る時の登成皋の道の通路絶へん北太行の道を斷つ時の上黨の師の下
 るとを得ず王一たび兵を興して滎陽を攻る時の其國斷て三段と爲らん夫韓必ず亡るを見ん安
 り聽さるよを得んや若韓聽るの霸王の事因て慮るへし王の曰く善し且よ使を韓の國へ發せん
 と欲す范雎日よ益々したしまる復説の用らる、と數年よ及ひける一日秦王の間を請ひ説て曰く
 臣か山東よ居し時齊の孟嘗君あるとを聞て其王あるとを聞さりき秦の太后と穰侯華陽高陵涇陽
 君と有るとを聞て其王有るとを聞さりし夫國を擅よするを王と謂ひ利害を能するを王と謂ひ殺
 生の威を制するを王と謂ふ今太后擅よ行ひて願みす穰侯出て使して報せず華陽涇陽君か決斷

して諱かるとかく高陵君進退請ひす四ツの貴き者備りて國危からざる者の未た之有らざるなり
 此四ツの貴き者の下たれの所謂王無しと謂へし然る時の國の權柄安か傾むかざるを得ん命令
 安か王より出るとを得んや臣聞く善國を治むる者の内よ其威を固くして外其權を重す穰侯の
 使者王の重を操て制を諸侯に決し符を天下に剖き敵を征し國を伐つと敢て聽さるとなし戰て勝
 攻て取る時の利の己か封邑の陶國に歸して諸侯を弊め御し戰ひ敗る、時の怨を百姓に結て禍社
 穰侯歸す詩に曰く木實繁者の其枝を披と其枝を披る者の其心を傷り其都を大とする者の其國を
 危くし其臣を辱くする者の其主を卑す崔杼淖齒齊を管りて王の股を射王の筋を擡き之を窟の梁
 又懸て宿昔よして死せり李兌趙を管りて主父を沙丘よ因て百日よして餓て死したり今臣聞く秦
 の太后穰侯事を用ひ高陵華陽涇陽之を佐て卒に秦王を無せんとす此亦淖齒李兌の類あり且夫三
 代の亡る所以の者の君專政を授け酒を縱よし馳騁弋獵して政事を聽す其授る所の者の賢者
 を嫉み才能を妬み下を御し上を蔽ふて其私を成し主君の爲に計すして主君之を覺悟らす故に其
 國を失ふ今秩祿有る者より以上諸の大吏に至り下り王の左右の侍臣に及ぶまで相國穰侯の腹心
 の人よ非る者なし王のみ獨朝廷に立を見る臣竊に王の爲に萬世の後秦國を有つ者王の子孫よ非
 ると恐る、なり昭王之を聞て大に懼て曰く善し是に於て太后を廢し穰侯高陵華陽涇陽君を關
 外に逐斥け乃ち范雎を拜して宰相と爲せり穰侯の印を收て陶の封邑に歸らしめ縣の官吏に命し

車と牛とを給して徒しむ車數。千乗有餘關に到りしかの關吏其寶器を聞しよ寶器珍惟王室より
 も多かりしと秦范雎を封するに應の地を以てして號して應侯と爲す是時の秦の昭王四十一年
 あり范雎既に秦に相たり號して張祿と曰ひし故魏に於て絶て其范雎たることを知らて范雎の前
 に既に死したりと思ひ居たり魏秦の且よ東の方韓魏を伐んとすると聞き大に懼れ魏の大夫須賈
 に命して秦に使せしめけり范雎之を聞て微行し敝表まで間歩し邸に至りて須賈に面謁を請ひ
 ければ須賈之を見て大に驚きて曰く范叔固に恙なくして在けるか范雎曰く然り須賈笑て曰
 く范叔秦に説と有しや曰く不然るとい非るなり雖前日過を魏の宰相に得たり故に亡逃て此地に
 至りしのみ安う敢て説とあるへき須賈曰く今范叔は如何なる事をなしてか活計を爲居ると
 りや范雎曰く臣人の爲に庸賃して一口々々を送るのみ須賈意に之を哀み引留めて飲食を與へ
 俱に坐して昔語に及ひしか須賈の聽て公の衣服甚だ薄し一に寒るとなからんやと一領の鹿なる
 綿袍を取て之を與へ因て問て曰く秦張君を宰相とすと聞り公之を知たるや吾聞く秦王の寵幸の
 臣に於て天下の事のみを張君に決せりと今吾魏の使として來りし去留も畢竟張君の心に在り焉
 豈國人の張相君に習ある者有るか范雎曰く吾も庸賃する所の主人翁至て相君と習知あり故に
 唯に於ても幸に相君に拜謁するを得たり請らくの君を張君に紹介せん須賈曰く吾遠方の客
 されの馬の病ぬ車の軸も折か、りぬ大車駟馬に非れの吾固より出つるとなし如何すへきと躊躇



世 須 報 舊
 食 賈 怨 茫
 了 世 亦 也 睽
 圖 一 馬 須 報 舊

の范睢か曰く願くは君か爲る大車駟馬を主人翁は借來らんと云ふは須賈の夫は悦び其事を託しけるより范睢歸りて翌朝大車駟馬を送り來りて須賈は借與へ僕御者となりて君を相府へ送り奉り張君は紹介せんとて御して秦の相府へ入りよけり府中の人々之を望み見て見識る人々の大驚き皆避匿けるより須賈の心よ之を怪む程もあらせす相舍の門前よ至りける臆て須賈は曰けるは少し我を待るへし君か爲る先入て此旨相君は通達せんと車を下り門内へこり入りよけり須賈の門外は待と半晌許して更は范睢の報せなければれ殊は訝り怪みつゝ守門は向ひて向は門内へ入たりし范叔と言ふ者なるか未だ出來ず如何なる事よや問たしと言へ其邊は逍遙せし門下の客と覺しき者か咲ひて曰けるは相府中よ范叔と云ふ者かし須賈か曰く否郷者よ我の車を御して來り相門へ入りたる人かりと問返せしり思ぬ問事かなあれり吾秦國の宰相たる張君よこりあるをれと言れて須賈の仰天し自ら賣るゝとを知り乃ち肉袒膝行て門下の人よ因て罪を謝しよけり是よ於て范睢帷帳を盛る粗ひ左右よ近臣數十人を従へて之を見ければ須賈頓首して死罪々々と言て曰く買意さき君か能く自ら青雲の上よ致さんとい買敢て復天下の書を讀す敢て復天下の事よ與からず買湯鏝よ入るの罪あり請ふ胡貉の地よ屏かん死生とも唯君の心よ任せ奉つらんと謝するは范睢汝が罪幾いかに有る曰く買の髪を擢とも買の罪を贖ふよ未だ足すと思ひ居れり范睢か曰く汝か罪三ツ有るのみ昔者楚の昭王の時よ申包胥楚の爲る吳軍を卻けたり楚

王之を封するは荆の五十戸を以てせり包胥辭して受す丘墓の荆は寄るか爲るなり今唯か先人の丘墓も亦魏に在り公前よ睢を以て齊國よ外心ありとなして宰相魏齊は思さま言成たり公乃罪一なり魏齊の我を廁の中よ辱めし時よ當て公止さる二なり更々醉て我よ溺せり公其何り忍るや罪三ツ然れとも公の死する無とを得る所以の者よ緇袍戀々として故人の意あるを以ての故よ公を釋すとて乃ち謝して罷よけり入て之を昭王は言し罷て須賈を歸しけり須賈辭謝として范睢の家よ至りければ范睢大は供具を命し盡く諸侯の使を請ひ招き與よ堂上よ坐して食欲甚た設けて須賈を堂下よ坐せしめ莖豆を其前よ置き兩人の黥徒は須賈を夾ましめ馬の莖豆を食ふか如く口を以て之を食ひしめ猶數て曰けるは我か爲る魏王よ告よ急よ魏齊か頭を持來れ然なき時の大梁の都を屠るへしと言送り須賈は鼠の逃るか如く魏國へ歸て魏齊は告しかり魏齊は恐て趙の國へ亡走り平原君か所よ匿れけり范睢か、る威勢よて秦國の宰相たると既は數年よ及ひしか或日己を魏の國より車よ載て伴ひ來りし王稽入り來り寒暄終りて後范睢は向ひ相君試よ我か説所を聞玉へ事知る可からざる者三ツあり奈何ともすへからざる者も亦三ツあり宮車一日晏駕し玉ふは是事の知るへからざる者の一ツあり君卒然として館舍を捐て死し玉ふも是事の知る可らざる者の二ツあり臣をして卒然として溝壑に填て死せしむるも是事の知る可らざる者の三ツあり宮車一日晏駕して秦王薨し玉ひなは君臣は恨玉ふとも奈何ともすへき無らん君卒然として館舍を

捐て黄泉へ到り玉ひかり君臣は恨玉ふとも亦奈何ともすへきと無らん臣は卒然として溝壑に填
 て死に至しめり君臣は恨玉ふとも雖も亦奈何ともすへきなからんと言ひければ范雎聞て大は懼
 りぬ容よて餘話よ移て王稽の歸りけるか范雎直に朝廷へ出王よ告げるに王稽の忠よ非れに能臣
 を函谷關より内るとなし大王の賢聖よ非れに能臣を貴くすると莫し今臣の官の宰相よ至り爵の
 列侯よ至りしよ王稽の官の尙謁者よ止りたり其臣を秦國へ内たる意よ非るならん因て王稽の
 官を遷して玉のりたしと言えければ昭王王稽を召出し拜して河東の太守と爲し三年間年貢を許
 し夫を王稽よ賜のりけり又鄭安平よ任しければ昭王之を將軍となしよけり范雎是よ於て家の財
 物を散し盡く嘗て困厄を救れし者よ報謝しける一飯を惠れたる徳よも必ず償ひ睚眦られたる怨
 をも必ず返報さしよけり范雎秦よ相たると二年よして昭王の四十二年東の方韓の少曲高平を伐
 て之を拔く昭王范雎の仇ある魏齊か趙の平原君の所よ在りと聞く范雎か爲よ必ず其仇を報ひん
 と欲し乃ち詳て好書を爲り平原君よ遺て曰く寡人君の高義を聞と久し願くは君よ布衣の友と爲
 らん君幸よ寡人の國よ來れ寡人願くは君よ十日の酒宴を爲さん平原君秦を畏れ且又以爲よ此
 尤も然るへしとて遂に秦の國へ來り昭王よ見ゆ昭王平原君と酒を飲むと數日の後平原君よ言け
 るに昔周の文王呂尙を得て以て太公と爲せり齊の桓公管夷吾を得て以て仲父と爲せり今范君も
 亦寡人の叔父あり范君の仇君の家よ在り願くは人を歸して其頭を取來らしめよ然されに吾君を關

けり出さす平原君か曰く貴くして友と爲る者の賤きか爲なり富て交りと爲す者の貧きか爲めな
 り夫魏齊の勝の友なり在るも固より出さるなり今又臣の所よ在らず昭王乃ち趙王よ書を遺て
 曰く王の弟秦よ在り范君の仇魏齊平原君の家よ在り王人よ疾魏齊の頭を持せ來しめよ然すに吾
 軍を擧て趙の國を伐ち且へ王の弟平原君を我國へ留め置て關より出して歸さじとの文書よ趙王
 大よ恐れ乃ち卒を發して魏齊を捕へんと平原君の家を圍むと急ありければ魏齊の夜よ紛れ逃
 て趙の相虞卿の家よ至り此一事を度けるよ虞卿も終に趙王の説可からざるを推察し乃ち其相の
 印を解捨て魏齊と諸共よ逃て間行なしければ諸侯を念よ以て急よ抵るへき者あり乃ち復大梁
 よ走り信陵君よ因て以て楚國へ走ると念ひ信陵君の家よ至りける信陵君之を聞て秦を畏れ猶豫
 して未だ見るとを背せずして曰く抑々虞卿の何如なる人よて有けるやと問へに此時侯嬴の其
 傍よ在けるが對て曰く人固より未だ知易からず人を知るとも亦未だ易からぬ者りかし夫虞卿の
 人よ爲りの世人の都て知る如く履を躡み笠を擔ひ一たひ趙王よ見白壁一雙黄金百鎰を賜り再
 見へて拜せられて上卿と爲り三たひ見へて卒に宰相の印を受け万戸侯よ封せらる此時又當りて
 天下争ひて虞卿の賢なることを知たり夫魏齊窮困して虞卿よ託す虞卿敢て爵祿の尊を重せず宰
 相の印綬を解捨て万戸侯を捐て間行し士の困窮を急よして公子よ歸し來れり然るを公子の命よ
 虞卿の何如ある人あるやと最心得ぬ事よこり人固より知り易からず人を知るも亦未だ易らぬ者

ありと臣か言すは是ありと説れて信陵君大に慙ち車に駕して郊野へ出て之を迎んと爲けるは魏
 齊の又信陵君の初め之を見るを難んすると聞怒て自ら到り趙王之を聞き卒に其頸を取り
 て秦の國へ送り送り秦の昭王乃ち平原君を出して趙へ歸しぬ昭王の四十三年秦韓の汾涇を攻て
 之を抜き因て河上の廣武を城く後五年昭王應侯の謀を用て反間を縱て趙を賣る趙其故を以て馬
 服君趙奢の子の括を命して廉頗を代て大將たらしむ秦大に趙を長平の地を破り遂に邯鄲の都を
 圍みけり已にして武安君白起と不和ありしより昭王は言て之を殺し鄭安平は任し將として趙を
 撃しむ鄭安平趙軍の爲に困み急する所を爲り兵二万人を率て趙へ降りければ應侯藺を席よし
 て死罪を請ひけり秦の法人は任して任する者善からざる時の各々其罪を以て之を罪するの法を
 れは應侯の罪は三族を收むるに當れり昭王應侯の意を傷らんとを恐れ乃ち命令を國中に下し敢
 て鄭安平の事を言ふ者有らば其罪を以て之を罪せんとて反て相國應侯は食物を加賜り日よ益々
 厚く遇らば其意は適ひ順はれける後二歳王稽河東の守と爲り諸侯と内通せしを以て法よ坐して
 誅せられけり應侯日よ益々憚りす一日昭王朝廷に臨みて歎息しけれは應侯進て曰く臣聞く主憂
 れは臣辱めらるる主辱らるるは臣死すと今大王朝中にて憂ひ玉ふ臣敢て其罪を請ふ昭王の曰く吾
 聞く楚の鉄劍利して倡優の拙しと夫鉄劍利ときは士勇なり倡優拙き時の思慮遠し夫遠き思慮と
 以て勇士を御す吾楚の秦を圖とを恐る、あり夫物素より具へされり以て卒あるは應すへからず

今武安君既に死して鄭安平は畔く内よの良將なくして外よの敵國多し吾是の故に憂るとて應侯
 を激勵せんと欲せしかは應侯悞て出す所を知らず蔡澤之を聞て往て秦へ入りよけり
 蔡澤は燕人あり游學して諸侯を干せしと小國大國とも甚た衆かりしか遇せられず唐舉と云ふ相
 者よ從て觀相を乞て曰く吾聞先生李兌を觀相して百日の内よの國を持し政を秉んと曰はれ
 しよし誠よ之有るとよや曰く其事有たり曰く臣の如き者何如なる者や唐舉執ち蔡澤を視て
 笑て曰く先生曷の鼻巨ある肩離顔よして鬚眉よ盛り膝彎曲れり吾聞く聖人の相せずと殆ど先
 生の如き者か蔡澤唐舉か戯る、とを知り乃ち曰く富貴は吾自ら有する所なり吾か知らざる所の
 者の壽なり修短いか願くは聞とを得ん唐舉か曰く先生の壽は今より以往に四十三歳からん蔡
 澤笑て謝して去り其御者よ謂て曰く吾梁を持ち肥たる肉を刺齒馬を躍し疾驅せ黄金の印を懐き
 索の綬を要し結ひ人主の前よ揖讓し肉を食ひて富貴なると四十三歳からん足なんと去て趙の國
 に之て逐れ韓魏乃二國よ入りて釜鬲を途中よ奪れて大に困みたりけるか秦の國よて應侯か鄭安
 平王警よ任しけるは兩人とも重き罪を負ひ應侯心の内大に慙ると聞くより蔡澤乃ち西の方秦の
 國よ入り昭王よ見んとなしけるか先應侯と感し怒らしめんと思ひ人よ宣言しけるは燕の客よて
 蔡澤と云ふ者此國へ入り來りしか其人は天下の雄俊弘辨の智士あり彼一回秦王よ見り秦王必ず
 君を困めて君の位を奪はん應侯之を聞て五帝三代の事百家の説吾既よ之を知れり衆口の辨吾皆

之を擢く是悪う能吾と困めて我位を奪んやとて人よ命して蔡澤を召しめけれの蔡澤來り直よ入
 て應侯を揖するより應侯固より快らす之を見るよ及へば又甚た倨て已を尊のさるよより心大
 不平を抱き因て之を讓て曰く子嘗て宣言しけるの我よ代て秦國の宰相と爲らんと欲すと寧と
 か、る言を云ひたるか對へて曰く然り應侯か曰く請ふ其説を聞かん蔡澤か曰く吁君何う見ると
 の晚きや夫四時の次序功を成す者の去る夫人生れて百体堅強手足便利耳目聰明よして心聖智
 なるの豈士の願よ非ずや應侯の曰く然り蔡澤か曰く仁を質とし義を乗り道を行ひ徳を施し志を
 天下よ得て天下懷樂敬愛して之を尊ひ之を慕ひ皆以て君王と爲すとを願ふの豈よ辨智の期りよ
 あらずや應侯の曰く然り蔡澤又曰く富貴顯榮よして万物を成理し各々其所を得せしめ性命壽長
 よして其天年を終て夭傷せず天下其統を繼ぎ其業を守り之を窮り無きよ傳へ名も實も共よ純粹
 と限りなく恩澤千里よ流れ世々之を稱して絶るとなく天地と終始するの豈道徳ある身の符よし
 て聖人の所謂吉祥善事と云者か應侯の曰く然り蔡澤の曰夫秦の商君楚の吳起越の大夫種の如き
 の其卒然として願ふへきか應侯蔡澤の已を困めて以て説んと欲するを知り復謬て曰く何すれ
 り不可あらん夫商君の孝公よ事ふるの身を極て二慮なく公を盡して私を願す刀鋸を設けて以
 て奸邪を禁し賞罰を信よして以て治を致し腹心を披て情素を示す怨咎を蒙りて舊友を欺き魏の
 公子卬を奪て秦の社稷を安し百姓を利す卒よ秦の爲よ將を禽よし敵を破り地を攘と千里よ至れ

り又吳起の悼王よ事ふるの私をして公を害するを得ず讒者をして忠臣を蔽とを得さらしめ言
 苟くも合とを取らず行ひ苟くも容ることを取す危きか爲よ行ひを易す義を行て難みを辟す然し
 て主を覇よし國を強くするか爲よ禍凶を辟せさりき大夫種の越王よ事ふるの主困辱らる、
 と雖ども忠を悉して解らす主絶亡と雖も能を盡して離れす功を成して矜らす貴富よして驕怠ら
 す此三子の如き者の固より義の至りあり忠の節なり是故よ君子の義を以て難し死し死を視ると
 歸るか如し生て辱しめらる、の死して榮よ如す士の固より身を殺して以て名を成すとあり唯義
 の在る所の死すと雖も恨るとなし何爲り不可と爲んや蔡澤か曰く主君聖よして臣下の賢あるの
 天下の盛なる福ひなり主君明良よ臣下正直あるの國の福なり父慈よ子孝よ夫信よ妻貞あるの家
 の福あり故よ比干の忠あれも殷を存すると能はず子胥の智あれも吳を完すると能ず申生の
 孝なれとも晉國乱る是皆忠臣孝子ありて國家滅ひ乱る、者の何りや明君賢父以て之を聽と無れ
 いなり故よ天下其君父を以て僂辱なりとして其臣子を憐む今商君吳起大夫種の人臣たるの是な
 り其君非なり故よ世人三子の功を致して徳せられすと稱す豈世よ遇すまて死することを慕はんや
 夫死を待て而して後忠を立て名を成す可んは是微子の仁とするよ足す孔子の聖とするよ足す管
 仲の大とするよ足す夫人の功を立てると豈功成身全きとを期せさらんや身と名と俱よ全き者の上
 かり名の法とす可して身死する者の其次あり名の僂辱よ在て身全き者の下あり君如何と
 か思る

こと辨論風を生ずる蔡澤か言ふ應侯も遂に善と稱しける蔡澤少しく間を得て因て曰く夫の商
 君吳起大夫種の其人の臣となり忠を盡し功を致すと願ふ可し闕天か文王よ事へ周公か成王を
 輔るの豈亦聖と言ふへきならずや君臣を以て之を論する時の商君吳起大夫種の願ふへきとの闕
 天周公と孰與か宜しとするや應侯か曰く商君吳起大夫種の闕天周公の二人よ及のさるるなり蔡
 澤が曰く然る時の君の主君の慈仁よして忠に任し舊故よ悖厚其賢智よして道を知るの人と膠漆
 の如く親み義功臣よ倍かさるるの秦の孝公楚の悼王越王よ孰與や應侯の曰く未だ如何と云ふと
 を知らず蔡澤か曰く今主君の忠臣を親むと秦の孝公楚の悼王越王よ過す君の智能を設け主の爲
 又危きを安し政を修め乱を治め兵を強くし患を批け難を折き地を廣め穀を殖し國を富し家を
 足し主を強くし社稷を尊ひ宗廟を顯し天下敢て其主を欺き犯すと莫く主君の威海内よ益ひ震ひ
 功萬里の外よ彰れ聲名光り輝き千世よ傳はるる君商君吳起大夫種よ孰與と思はる、や應侯か曰く
 然す今主君の忠臣を親み舊故を忘れさるるの孝公悼王勾踐よ若すして君の功績愛信親幸せらる、
 の又商君吳起大夫種よ若及のす然かして君の祿と位との貴く盛よして私家の富三子よりも過た
 りさるる身を退かさるるの君の患の三子より甚たしからんとを恐る竊よ君の爲よ之を危む語よ曰
 く日中する時の移り月滿る時の虧く物盛なる時の衰ふとは天地の常數あり進退盈縮時と變化す
 るの聖人の常道なり故よ國道有時の仕へ國道なき時の隱る聖人の曰飛龍天よ在り大人を見るよ

利し不義よして富且貴の我よ於て浮る雲の如し今君の怨みの己よ嘗ることを得て君の恩をも亦報
 るを得たり意欲至り盡せり而るよ變化するの計なきの竊よ君の爲よ取らさるるなり翠鶴犀象
 の類の其勢よ處と死よ遠からさるるの無し死する所以の者の餌よ惑へたり蘇秦智伯の智の唇を
 辟け死よ遠さかるよ足さるるよ非るなり而るよ死する所以の者の利を貧る事止さるるよ惑へたり
 り是を以て聖人禮を制し欲を節し民よ取る事度あり民を使ふ時あり民を用る事止りあり故よ志
 溢れす行ひ驕す常よ道と俱よして失す故よ天下承て絶す昔者齊の桓公九たひ諸侯を合一たひ
 天下を匡す葵丘乃會よ驕り矜るの志ありて畔ける者九ヶ國よ及へり吳王夫差の兵力天下よ敵
 かく勇強諸侯を輕んし齊晋二國を凌しかの故よ遂よ其身を殺し國を亡ひたり夏育太史儼の二人
 の叱し呼ぶ聲三軍を駭かせしも然れとも身庸夫よ死したり此皆至盛よ乘して道理よ返らす卑退
 よ居り儉約よ處さるの患なり夫商君秦の孝公の爲よ法令を明かよ姦の本を禁し尊爵の必ず賞
 し有罪の必ず罰し權衡を平かし度量を正しく輕重を調へ阡陌を决裂て以て生民の生業を靜して
 其風俗を一致よす民よ耕農を勤めて土地を便利よせり一室よ二事あく田を力て蓄積戰陣の事
 を留せり是を以て兵動て地廣兵休て國富り故よ秦天下よ敵なし威を諸侯よ立て秦國の業を成し
 功已よ成就しぬ而るよ遂よ車裂の刑を被れり楚國の地の方數千里戟を持の兵士百萬あり白起數
 萬の師を率て一戰して鄢郢の地を擧げて以て夷陵を燒き再戰して南の方蜀漢を并せ又韓魏の

二國を越て強き趙國を攻靡け北の方馬服を坑よし四十余万の衆を屠り誅して之を長平の下に盡
 し流るゝ血の川を成し沸聲の雷の如し逐よ趙の都邯鄲と圍み秦は帝業を有たしめたり楚と趙と
 の天下の強國よして秦の仇敵なりしも是よりの後楚趙皆懼れ服して敢て秦を攻ざる者ハ白起の
 勢なり身の服する所の者七十餘城も及び功已も成就しぬ而るも劍を賜りて杜郵の地も死したり
 吳起の楚の悼王の爲よ法を立て大臣の威重を畢滅無能を罷め無用を廢し不急の官を損し私門の
 請を塞き楚國の俗を一致よし游客の民を禁し耕戦の士を精くし南の方楊越の地を収れ北の方陳
 蔡の二國を并せ横の計を破り従の約を散し馳説の士も其口を開く所亦からしめ用黨と禁し百姓
 を勵し楚國の政を定む兵天下も震ひ威諸侯を服す功已も成就しぬ而るも卒も技解々も爲りて殺
 されたり大夫種ハ越王の爲も深く謀り遠く計り會稽の危急を免れしめ亡るを存し辱も因て榮を
 爲し草を壅て邑も入り地を辟き穀を殖へ四方の士を卒ひ上下の力を専らよし勾踐の賢を輔け夫
 差の讎を報ひ卒も勁き吳の國を禽よし越を翦たるしめたり功已も彰れて信あり句踐終も負きて
 之を殺せり此四子の功成るも去す禍此も至ぬり此所謂信て誦むとを知らず往て返るとを知らざ
 る故なり范蠡之を知り超然として世を辟け長く陶朱公たり君獨り夫の博奕する者を觀すや或ハ
 大も投んと欲し或ハ功を分たんと欲す此皆君の明も知る所なり今君秦も相として計席を下らす
 謀廊席を出ず坐して天下の諸侯を制す利ハ三川も施ひ以て宜陽も實て羊腸の險きを決きて太

欠

MISSING

を禮して以て賢者を招くと聞樂毅是よ於て魏の昭王の爲よ燕よ使せしよ燕王客の禮を以て待ひ
ければ樂毅辭讓しけりされとも其賢を好むの實あるとを知り遂よ質を委て臣と爲りけり燕の昭
王亞卿の位を授け、る是時よ當りて齊の潛王強盛よして南の楚の宰相唐昧を重丘の地よ敗り西
の三晋を觀津の地よ摧き遂よ三晋と秦を擊ち趙を助て中山を滅し宋を破て地を廣る事千餘里秦
の昭王と重を争ひて帝号を唱へ已よして復之を歸す諸侯皆秦よ背きて齊よ服せんとす潛王自ら
矜りしかり百姓堪す成よけり是よ於て燕の昭王齊を伐の事を群臣を集て會議しけるよ樂毅對て
曰く齊の霸國の餘れる功業あり地弘大よして人衆多あり未だ獨攻易からす王必ず之を伐んと欲
せし趙及び楚魏よ與するよ如いなし是よ於て樂毅よ命して趙の惠文王よ約せしめ別よ楚魏の二
國を連和し趙をして秦よ囁むるよ齊を伐の利を以てせしよ諸侯皆齊の潛王の驕暴を害ありとし
皆争ひて合從して燕と齊を伐んとす樂毅還て報せしかり燕の昭王悉く兵を起し樂毅を以て上將
軍と爲しめ趙の惠文王相國の印を以て樂毅よ授け、り樂毅是よ於て并て趙楚韓魏燕の兵を護し
て齊を伐ち之を濟西の地よ破るよより諸侯の兵の皆罷め歸りて燕の軍樂毅獨追て臨淄の都へ至
りけり齊の潛王の濟西よ敗走する纒よ宮の城を保しけるのみ樂毅獨り留りて齊國を徇へ齊皆城
守しけるよ樂毅の攻て臨淄よ入り盡く齊の寶財物祭器を取りて之と燕へ輸り致しければ燕の昭
王大よ悦ひ親ら濟上の地よ至りて軍兵を勞ひ恩賞を行ひ士卒を饗應をし樂毅を昌國よ封して号

して昌國君と爲しよけり是よ於て燕の昭王齊の鹵獲を収て歸り樂毅よ命して復兵を以て齊城の下らさる者を平けまむ樂毅留りて齊を徇ると五歳齊の七十餘城を下して皆郡縣と爲して以て燕よ屬せしめけり獨り莒の城と即墨の城のみ未だ服せず燕の昭王の死するよ會し子立之を燕の惠王と爲す惠王太子たりし所より嘗て樂毅よ快からず位よ即よ及て齊の田單之を開き乃ち反間と燕よ縦て曰せける齊の城の下らさる者ハ兩城のみ然よ早く拔さる所以の者ハ聞くよ樂毅ハ燕の新王と隙あり兵を連ねて且く齊よ留り南面して齊王たらんと欲すれハあり齊の患ふる所ハ唯他の將の來るとを恐る、なりと是よ於て燕の惠王固より已よ樂毅を疑かふ齊の反間を聞よ及て騎却をして代て將たらしめて樂毅を召す樂毅惠王の已を善せずして之を代らしむるを知り誅戮せられん事を畏れ遂よ西の方趙へ降りけり趙よ於て樂毅を觀津の地よ封して号して望諸君と曰ひ樂毅を尊寵して以て燕齊の二國を警しめ動かしける齊の田單後騎劫と戦ひ果して詐りを設けて燕軍を誑き遂よ騎劫を即墨の下よ破りて轉戦して燕の兵を逐ひ北の方河上よ至り尽く復齊の城を得て齊の襄王を莒より迎へて臨淄の都へ入れよけり燕の惠王ハ後よ騎劫を樂毅よ代せまを以て軍を破り將と亡ひ且齊を失ひしを悔ひ又樂毅の趙よ降りしよを怨み又趙の樂毅を用ひて燕の此回の弊よ乗りて燕を伐んとを恐れ乃ち人を以て樂毅を讓且謝せしめて曰く先王國よ舉て將軍よ委ぬ將軍燕の爲よ齊を破り先王の讐を報す天下震ひ動さるとかち寡人豈敢て一日とし

て將軍の功を忘んや先王群臣を弄て寡人新よ位よ即よ會し左右の臣寡人を誤らせ騎却をして將軍よ代しむ將軍久しく外よ暴露れたる勞苦を思ひ將軍を召して且く休息せしめ事を計らんと爲しを將軍過り聽て以て寡人と隙あり遂よ燕と捐て趙よ歸せり將軍自計を爲すハ則ち可あり而れとも亦何を以て先王の將軍を遇れたる所以の意よ報るや樂毅之を聞て書を以て燕の惠王よ報し遺りて曰く臣不佞王の命を奉け承て以て左右の心よ順ふと能す先王の明を傷り足下の義を害する有らんとを恐る故よ遁れ逃て趙よ走りぬ今足下人を以て之を攻るよ罪を以てせよ、守節の者先王の臣を畜ひ幸する所以の理を察せず又臣の先王よ事ふる所以の心を白故よ敢て書を以て對ふ臣聞く賢聖の君ハ祿を以て親よ私せず其功多き者ハ之を處く故よ能を察して官を授くる者ハ功を成の君なり行を論し士なり臣竊よ先王の舉を見るよ世主より高の心有事を知る故よ節せらる、事を得たり先王過り舉て之を賓客の中よ厠へ之を群臣、らす以て亞卿よ位せしめらる臣竊よ自ら己か不才を知らず自、なかるへしと故よ命令を受けて辭退せず先王臣よ命して曰く我を遣らす齊を以て事と爲して其仇を復さんと欲すと夫齊ハ政事を遺し置たり兵甲を練り戦攻よ習へり王若之を伐ん

通俗史記列傳

を圖るの趙と結ぶよ如の莫し且又淮北宋の地の楚魏の欲
を攻むの齊の大を破るへしと先王以て然りとあし符節を
命して兵を起して齊を撃つ天の道と先王の靈とを以て河北
く濟上の軍命を受けて齊を撃ち大に齊人を敗り輕卒銳兵長く
り僅に身を以て免れたり珠玉財寶車甲珍器悉く収て燕の國へ
宮は陳ね故の燕鼎も磨室は反れり國都補丘の植は齊の汶水の
先王よ及ぶ者の有らざるあり先王以て志は慊る事爲し故に地を
する事を得せしむ臣竊よ自ら知す自以爲よ命を承け教を奉て幸よ罪な
受けて辭せさりき臣聞く賢聖の君の功立て廢せず故よ春秋よ著る蚤知の士
後世よ稱せらる先王の怨よ報ひ恥を雪るか如の万乘の強國を夷け八百歳の富積を
るの日よ至て餘教未た衰へず政を執り事よ任するの臣法令を修め庶孽を慎み施て崩壞よ及ぶ皆
以て後世よ教へし臣聞く善作する者の必しも善成す始を善する者の必しも終を善せずと昔者伍
子胥の說闔閭よ聽れて吳王迹を遠くして郢よ至れり夫差是とせざるあり之よ賜夷を賜りて之を
江水よ浮へたり吳王先論の以て功を立てさ事を悟らす故よ子胥を沈て悔す子胥蚤く主の量と同
しくせざる事を見ず是を以て江水よ入て化せざるよ至りき夫身を免れ功を立て以て先王の迹を

明かよするの臣の上計なり毀辱の誹謗よ離て先王の名を墮すの臣の大に恐る所あり測れざるの
罪よ臨み幸よ以て利と爲すの義の敢て出さる所あり臣聞く古の君子交絶て惡聲を出さず忠臣國
を去るの其名を潔くせず臣不佞ありといへとも數々教を君子よ奉く侍御者の左右の說を親み疎
遠の行ひを察せざる事を恐る故よ敢て書を献して以聞す唯君王の意を留めん事を希ふ是よ於て
燕王復樂毅の子樂間を以て昌國君と爲しけるよより樂毅往來して復燕よ通す燕趙以て客卿と爲
しけり樂毅趙よ卒しぬ樂間燕よ居事二十餘年燕王喜其宰相栗腹の計を用て趙を攻んと欲し昌國
君樂間よ問けれの樂間曰く趙の四戰の國なり其民兵よ習へり之を伐の不可なり燕王聽す遂よ
趙を伐つ趙廉頗よ命して之れを撃しめ大に栗腹の軍を鄣の地よ破り栗腹樂乗を禽よせり樂乗
の樂間の宗あり是よ於て樂間趙よ奔行たり趙遂よ燕を圍む燕重ねて地を割て趙と和講せり趙乃
ち解て去りける燕王樂間を用ひさる事を恨み乃ち樂間よ書を遣て曰く紂の時箕子用ひられさる
も犯し諫めて怠らず以て其聽を冀ふ商容達せず身祇辱められ以て其變する事を冀かふ民の志
内よ入らず獄囚自出るよ至りて然る後二人皆退き隠れけり故よ殷紂樂暴の累を負て二子忠聖
の名を失ひす何とされの其憂患の盡たれのかり今寡人愚なりと雖も紂の暴の若くからず燕の民
乱たりと雖も殷の民の甚しきか若くならず一家よ怒争ふの語ある時の相盡して鄰里よ告さら
んや二ツの者の寡人君か爲よ取さるありと樂間樂乗燕の其計を聽用ひさる事を怨み二人卒よ趙

よ留まる趙樂乘を封して武襄君と爲す其明年樂乘。廉頗趙の爲よ燕を圍む燕禮を重くして以て和陸を乞ひしかの兵を解ける後五歳趙の孝成王卒す襄王樂乘を以て廉頗よ代らしむ廉頗。樂乘を攻む樂乘敗走す廉頗亡て魏よ入る其後十六年よして秦趙を滅す其後二十餘年漢の高祖趙よ過き樂毅の子孫有りやと問れけるよ對て曰く樂叔と云者あり是樂毅か後世なりと高祖之を樂郷よ封し号して華成君と曰ふ華成君の樂毅の孫なり而して樂氏の族樂瑕公樂臣公あり趙且よ秦よ滅さる、時亡て齊の高密よ之く樂臣公善黃帝老子の言を修め學ひて齊よ顯れ聞え賢師と稱せられける

太史公か曰く始め齊の蒯通及ひ主父偃樂毅か燕王よ報する書を讀て未だ嘗て書を廢して泣すんあらざるなり樂臣黃帝老子を學ふ其本師を号して河上丈人と曰ふ其出る所を知らず河上丈人安期生よ教へ安期生毛翁公よ教へ毛翁公樂瑕公よ教へ樂瑕公樂臣公に教へ樂臣公益公よ教へ蓋公齊の高密膠西よ教ゆ曹相國の師たり

廉頗藺相如列傳第二十一

廉頗の趙の國の良將あり趙の惠文王十六年廉頗趙の大將たり齊を伐ち大よ之を破り晉陽を取る因て拜して上卿と爲す勇氣を以て諸侯よ聞へたり藺相如の趙の人なり趙の宦者の令繆賢の舍人たり趙の惠文王の時楚國の和氏の璧を得たり秦の

昭王よ之と聞て人を以て趙王よ書を遣らしめて曰く願くは十五城を以て和氏の璧と交易せんと趙王大將軍廉頗諸の大臣と謀る秦よ予んと欲すれは秦の城恐くは得へからず徒よ欺むかれん予んと勿らんと欲すれは即ち秦の兵の攻來らん事を思ひ計未だ定らす人の秦よ報せ使へき者を求るよ其任よ當る者を得ず宦者の令繆賢の曰く臣の舍人藺相如使とするよ任たる才畧ありと薦めければ趙王の曰く汝何を以て之を知るや對て曰く臣嘗て罪有し時竊よ計て燕の國へ亡走んと覺悟せしよ舍人相如臣を止めて君何を以て燕王を知るやと問ければ臣語りけるは嘗て君王よ扈從して燕王よ境上よ會合せし時燕王臣か手を握て願くは朋友の交を結いんと曰ければ此を以て燕王を知る事を得たり然れは燕國へ至りなり身を寓するよ足ぬへしと曰ければ相如か臣よ曰けるはりのり大なる失策なり夫趙の強くして燕の弱し而よ君趙王よ幸せらる故よ燕王君よ結いんと欲するのみ今君趙を亡て燕よ走るとも燕よて趙を畏されば其勢必す君を留めしせし君を東て趙へ歸り來りあん君肉袒よあり斧質よ伏して罪を請ふよ如さらんと言れて臣も初めて悟り其計よ從ひけるよ大王も亦幸よ赦し玉へり臣竊よ以爲よ其人勇士よして智謀あり此使よ相當ならんと陳ければ王聽て相如を召して見らる、よ温順よして威風あり尤能辨の人なれは趙王藺相如よ問て曰く秦王十五城を以て寡人の璧よ易んと請ふよ予ふへきや否や相如か曰く秦の強くして趙の弱し許さぬ事の成かたらん王の曰く秦吾か璧を取て我よ城を予へすんは奈何せん

や相如か曰く秦城を以て璧を求て趙許さ、る時の曲る事趙は在り趙璧を予て秦城を與へざる時
 の曲れる事秦は在り此二つの策を均くするは寧ろ許して秦は曲るを負しめん王の曰く誰か使す
 へき者や相如か曰く王必ず人なしとせの臣願くは璧を奉て往き城趙は入て後璧を秦は與へん城
 入らざる時の臣璧を完して趙は歸り來ん趙王是は於て遂に相如を遣り璧を奉して西秦は入らし
 む秦國は趙王和氏の璧を献すると聞き王の章臺は坐を構へ相如を見ければ相如の璧を奉て秦
 王は奏む秦王大は喜び傳へて以て美人及び左右乃近臣は示しければ左右の近臣皆萬歳と呼り
 ける相如秦王の十五城を償ふは意なき事を察し乃ち前て曰く璧は瑕あり一見よての解かたし指
 て王は示し奉らん王因て璧を相如は渡しければ相如因て璧を持って卻き立て柱は倚り怒る髪上り
 指て冠を衝き秦王は謂て曰く大王璧を得んと欲し人をして書を發して趙王は至らしむ趙王悉く
 群臣を召して議しけるは皆曰く秦貪りて其強きを負み空言を以て璧を求む償ふ城は恐くは得へ
 からすと議して秦は璧を與ふる事を欲せざりしは臣の以爲は布衣匹夫の交すら尙相欺むかす
 況て大國の王たるをや且一璧の故と以て強秦の驢ひは逆ふは不可ありと是は於て趙王乃ち齋戒
 すること五日はして使臣を以つて璧を奉け書を庭に送らしめたりいかんとあれば大國の威光を
 おごりかよして敬しみを修めたりしなり今臣至りしは大王臣を列觀し見て正殿は於てせず禮節
 はあはた倨りて無禮あり璧を得て之れを美人は傳へ以つて弄臣は戯むる臣大王の趙王は城邑を

償ふは意なきを知る故は臣復璧を取返せり大王必らず臣は迫り急よせんと欲せの臣の願は今
 璧と俱は此柱は碎なると其璧を持ち柱を睨み以て柱は撃付んとする形勢觀る者毛骨凜々たり秦
 王も其璧を破らん事を恐れしかの乃ち辭謝し固く相如は請ひて後有司を召て地圖を按し指し示
 えて此より以往十五都城は趙は與へんと約しけるされとも相如は少も璧を身より離さずこの秦
 王の特詐伴を以て趙は城を予る爲して實は得へからすと思ひければ乃ち秦王は謂て曰く和氏の
 璧は天下の共は傳へて寶とする所あり趙王秦を恐れて奉獻するは璧を送る時は當て齋戒する事
 五日今大王も亦宜しく齋戒する事五日はして九賓を朝廷に設け玉へ臣乃ち敢て璧を上らん秦王
 之を度るは終は強て奪ふへからすと終は許して齋する事五日相如を廣成の傳舎は舍す相如度く
 秦王齋すれども決して約は負き城を償はずと乃ち其從者は褌を衣せ徑道より亡て璧を趙は歸さ
 しむ秦王齋する事五日の後乃ち九賓の禮を廷に設け趙の使者藺相如を引く相如至り秦王は謂て
 曰く秦は繆公より以來二十餘君未だ嘗て約束を堅明せし君有らず臣誠は王は欺むかれて趙は負
 く事を恐る故は人は璧を持して歸り問は趙は至らしめたり且秦は強くして趙は弱し大王一介の
 使を遣て趙は至らせなれ趙は立は璧を奉して來ん今秦の強きを以て先十五都を割て趙は予へ
 趙豈敢て璧を留て罪を大王は得る事あらんや臣大王を欺くの罪誅は當する事を知る臣請ふ湯鑊
 は就ん唯大王群臣と熟と計て之を議し玉へ秦王群臣と相視て嘻き怒ける左右或は相如を引去ん

と欲す秦王因て曰く今相如を殺すとも終に璧を得る事能はざるなり而うへ秦趙の驩心を絶り用
 なし如し因て厚く之を遇ひ趙は歸らしめんよ趙王豈一ツの璧の故を以て秦を欺むかんやと卒
 よ廷に於て相如を見禮を畢て之を歸す相如既に歸る趙王以爲く賢大夫にして使するも諸侯は辱
 しめられすと相如を拜して上大夫と爲す秦も亦城を以て趙は予へす趙も亦終に璧を秦と與へす
 其後秦趙を伐て石城を拔く明年復趙を攻めて二万人を殺す秦王使者を以て趙王と好を爲し西河
 の外澗池に會せんと欲すと言送りけれの趙王は秦を畏れ行事母らんと欲す廉頗蘭相如計て曰く
 王行さる時の趙の弱くして且怯き事を示すなりと趙王遂に行く相如扈從す廉頗送りて境に至り
 王と訣て曰く王行玉へ度は道里及び會遇の禮畢て還り玉ふの三十日は過さるへし三十日よして
 返らされの則ち太子を立て王となして秦の趙を望む心を絶せなん王之を許して遂に秦王と澗池
 に會しける秦王酒を飲み酣なる時趙王は向ひ竊に聞く趙王音を好むと請ふ琴を奏せよと望け
 れの趙王已む事を得ず爲よ一たひ琴を鼓けるよ秦の御史進て書して曰く某の年月日秦王趙王と
 會して酒を飲む趙王をして瑟を鼓しむと蘭相如前て曰く趙王竊に聞秦王善く秦聲を爲すと請ら
 くの盆飴を秦王よ奉て以て相娛樂せん秦王怒て許さず是に於て相如前て飴を進め因て跪きて秦
 王よ請ふ秦王飴を擊肯せず相如か曰く五歩の内相如請ふ頸の血を以て大王よ濺くとを得ん左右
 相如を及せんと欲す相如目を張して之を叱しけれの左右の者共皆披靡きて近く者なし秦王憐

へす與さめ顔よて之か爲よ一たひ飴を擊けり相如顧て趙の御史を召す御史書して曰く某の年
 月日秦王趙王の爲よ飴を撃つ秦の群臣の曰く請ふ趙の十五城を以て秦王の壽を爲よ蘭相如も亦
 曰く請ふ秦の咸陽の都を以て趙王の壽を爲よ秦王酒を覓るまで終に勝を趙に加る事能す趙も亦
 盛に兵備を爲して秦を待つ秦敢て動ず既に罷て國に歸る相如か功大あるを以て拜して上卿と爲
 し位廉頗の右にあり廉頗か曰く我趙の將と爲りて城を攻め野戰するの大功あり而も蘭相如徒に
 口舌を以て勞とあして位我上居る且相如の素賤人なり吾之か下たるよ忍ひすと宣言して曰く
 我相如を見の必ず之を辱を與へん相如聞て與に會し肯せず朝する時こと常に病と稱して廉頗
 と列を争ふ事を欲せず已にして相如出で廉頗を望み見て大に愕き車を引て避匿れけり是に於て
 相如か舍人相與に諫て曰く臣等親戚を去て君に事する所以の者の徒君の高義を慕ふか故なり今君
 廉頗と列を同ふす廉君惡言を宣て君畏て之に匿れ恐悞殊に甚し且庸人すら尙之を恥つ況て將相
 よ於ておや臣等不肖なり請ふ辭し去らん蘭相如固く之を止めて曰く公の廉將軍を視るよ秦王よ
 孰與と思ふや皆曰く若さるあり相如か曰く夫秦王の威と以てすら相如廷にして之を叱し其群臣
 を辱しむ相如驚かりと雖も獨り廉將軍を畏れんや顧て吾之を念ふよ強秦の敢て兵を趙に加へ
 ざる所以の者の徒吾兩人の在るを以てなり今兩虎共よ鬥ふ其勢ひ俱に生ず吾かく廉將軍を讓る
 所以の者の國家の急を先よして私の讐を後よするを以てあり舍人之を聞て大に服し其大量に感

しけるか何人か廉頗も此言を告たりけん聞と均しく大も慙ち肉袒となり鞭も爲すへき荆を背も負ひ賓客も因て藺相如か門も至り罪を謝して曰く鄙賤人將軍寛ふする事の此も至ることを知らずと頻も謝して止されの相如の其過を改むるの速かあるも深く服し卒も相與も刎頸の友と成り生死を同ふせんと約しけり是歳廉頗東の方齊を攻て其一軍を破り居ると二年廉頗復齊の幾の地を伐ちて之を拔る後二年廉頗魏の防陵安陽を攻て之を拔る後四年藺相如大將となり齊を攻て平邑の地まで伐入りて罷りけり其明年趙奢秦の軍を闕與乃下も破りたり

趙奢の趙の田部の吏なり租税と收るも平原君の家出すとを肯ず趙奢法を以て之を治め平原君の家的事を用る者九人を殺せり平原君怒て將も奢を殺さんとす奢因て説て曰く君趙も於て貴公子あり今君の家を縦もして公も奉せざる時の法の削れん法削る、時の國弱し國弱ければ諸侯兵を加へん諸侯兵を加へん是趙無きあり君惡んり此富を有ち玉のんや君の貴きを以て公も奉すると法の如くする時の上下平かあり上下平かある時の國強し國強き時の趙固し趙固くして君貴戚と尊る貴戚かれの豈天下も輕からんや平原君以て賢と爲して之を王も薦めけり王之を用ひて國賦を治めしむ國賦太た平かも民富て府庫實けり此時秦韓を伐て闕與も軍す王廉頗を召て問て曰く救ふへきや不や對へて曰く道遠くして險く且狭きを以て救ひかたし王又樂乘を召て問けるよ對へ廉頗の言の如し又召て趙奢も問ふ奢對へて曰く其道遠く險くして狭し之を警るも兩鼠の

穴の中も門もか如し將勇ある者勝なん王乃ち趙奢を大將として之を救しむ邯鄲の都を出ると三十里もして軍中も命令を下して曰く軍事を以て諫る者あらん死せんと秦の軍勢の武安の西も軍たり秦の軍太鼓を打ち諫を作りて兵を勸けするも大軍なれは武安の民家の瓦盡く振ひ動きしかの軍中の候一人ありて急も武安を救ひ玉へと言ければ趙奢立地も之を斬り壁を堅くして留むる事二十八日行す復益、壘を増す秦の間諜來り入りけるを趙奢の善待らひ食物を與へて之と遣歸しければ間諜の不測も命を助かり返りて秦の大將も報しければ秦の將大も喜て曰く夫國を去ると三十里もして軍を行す乃て壘を増せり闕與の趙の地も非れありと更も之を意も留めず趙奢己も秦の間諜を遣り歸し甲を卷包みて之も趨く二日一夜もして至る善射る者も闕與を去ると五十里も去て軍せしむ軍壘成たり秦人之を聞て大も愕き甲も悉して至る軍士の許歴と云者軍事を以て諫めんとを請ければ趙奢か曰く之を内も計すありとの詞も許歴秦人の不意も我か軍至れり此其來るの氣盛あらん將軍必ず兵を分たす厚く其陣を集て以て之を待て然すも必ず敗かんと言ふも趙奢命を受んと答へたり其時許歴請ふ鉄質の誅も就ん趙奢か曰後の命令を背て將も戦のんとす許歴復諫めんと請ふて曰く先北山の上も據る者の勝後れて至る者の敗れん趙奢許諾す即も一万人を發して之も趨かしむ秦の兵後れて至り山を争ひて上る事を得ず趙奢兵を縦て之を撃ち大も秦の軍を破る秦の軍解て走る遂も闕與の圍を解て歸る趙の惠文王奢も号を賜ひ馬服君と爲

す許歴を以て國尉とす趙奢是も於て廉頗蘭相如と位を同ふす後四年趙の惠文王卒す子の孝成王
 立つ七年よして秦趙の兵と長平の地も於て相距きたり時よ趙奢の己も死しぬ而して蘭相如の病
 篤し趙廉頗も命して大將として秦を攻しむ秦數々趙の軍を敗る趙の軍壁を固くして戦はず秦數
 々戦ひを挑む廉頗肯す趙王秦の反間を信す秦の間諜言て曰く秦の恐む所の獨馬服君趙奢の子趙
 括の將たることを畏る耳と趙王因て括を以て大將として廉頗も代しむ蘭相如か曰く王名を以て括
 を使ふ柱も膠して瑟を鼓か如きのみ括徒も能其父の書傳を讀とも機變も合とを知らざるなり用
 ひ玉ふへからす趙王聽用す遂も之を大將とせり趙括少き時より兵法を學て能兵の事を論し自以
 ふに天下能當る者無しと嘗て其父奢と兵事を言ふ奢も難すると能す然れとも善と謂す括の母之
 を疑ひ趙奢も其故を問しかり奢か曰く兵の死地なり而るを括易く之を言り趙をして括を將たら
 しめされい即ち己ん若必ず之を將とせし趙の軍を破らん者の必ず括ならん趙括か將となりて將
 も行んとするも及ひて括か母上書して王も言して曰く括は大将たらしむへからすと王の曰く何
 の以りや對て曰始め妾其父も事ふ時も大将たり身飯飲を奉て食を進る所の者十を以て數るも及
 ひとり友とする所の者百を以て數るも及ひたり大王及び宗室賜る所の賞物の盡く以て軍吏士
 大夫も分與へたり命を受けて軍も出るの日の家の事問ふ事なかりき今括一旦將と爲り東向して
 朝せしむるも軍吏敢て仰きて之と視る者あし士を親まざる者と云ふへし王の賜ふ所の金帛の類

の歸て之を家も藏む而して日も便利の田宅の買へき者を視て之を買たり是恩なき者と云ふへし
 王以て其父も比て何如と思ひ玉ふや父子心を異するも如此し王遣と勿れ王の曰く母よ之を置
 け吾己も決したり括か母因て曰く王終も之を遣り即稱いさる如とあらん妾隨ひ坐らると無きを
 得んや趙王之を許諾せり趙括既も廉頗も代りて悉く約束を更め軍吏を易置けり秦の將白起之を
 聞奇兵を縱伴て敗走して其糧道を絶其軍を分斷て二ツと爲しけれい士卒心一致せず四十餘日
 よして軍兵糧も餓もけり趙括銳卒を出して自ら搏戦ひけるも秦の軍射手を排て趙括を射殺しけ
 れの悉く敗れ數十萬の衆遂も秦も降りけるも秦の悉く之を阮もして殺えけり趙の前後亡ふ所凡
 り四十五萬も及びけり明年秦の兵遂も趙の邯鄲の國都を圍み一歲餘も及び幾と脱するも得さ
 りしか楚魏二國并も諸侯の來り救ふも頼て纔に邯鄲の圍を解とを得たり趙王も亦趙括の母か先
 言明かあるを以て之を誅するもいなさ、りき邯鄲の圍解るより五年よして燕栗腹の謀を用ひ以
 爲く趙の壯者の長平の戦ひも盡其孤の未だ壯年ならずと兵を擧て趙を撃つ趙廉頗を以て大將と
 して大も燕軍を鄆の地も破り粟腹を殺し遂も燕を圍みしかり燕五城を割て和を請しかり乃ち之
 を聽しけり趙尉文の邑を以て廉頗を封して信平君と爲し假の相國と爲しよける廉頗の長平の大
 將を免して歸るも勢を失ふの時故の客盡く去り復用ひられ大將と爲るも及びて客又復至れり廉
 頗か曰く客退け客の曰く吁君何り見るとの晩きうや夫天下の市道を以て交る者なり君勢ひ有

る時の我君も從ひ君勢ひ無き時へ去る此固より其理なり何の怨みか有らんやとの言よ服し廉頗復元の如く客を待ひけり後六年趙廉頗も命して魏の繁陽を伐しめて之を抜けり趙の孝成王卒す子の悼襄王立つ樂乘を以て廉頗も代らしむ廉頗怒て樂乘を攻む樂乘逃走けるも廉頗も遂も魏の國へ出奔し大梁の都も至りける其明年趙乃ち李牧を以て大將として燕を攻て武遂方城の地を拔る廉頗梁も居と久しけれとも魏も於て信用すると能はず趙數々秦の兵も困むを以て趙王復廉頗を得るを思ひ廉頗も亦復趙も用ひられんと思ひけるも趙王使臣を遣して廉頗尚用ゆへきや否を視せしむ廉頗の仇郭開と云者多く使者も金と與て之を毀しむ趙の使者既も廉頗を視る廉頗之か爲も一飯も一斗の米と肉十斤とを食ひ甲を被馬も上り以て尚用る時の大將と爲るも堪たる勇壯を示せしかの使者も其剛強あるも呆れ儲も豪傑の老ても猶如此しと感しける預て郭開も頼れしとされの使者還て趙王も報して曰く廉將軍尚善飯を喫せり然れとも臣と坐する内頃くの間なれども三たひまで遺矢も立れしなり趙王以爲是老衰せり大將と爲とも功有かたしとて遂も召用ひず楚廉頗の魏も在りと聞て陰も人も命して之を迎しむ廉頗一たひ楚の大將と爲りて功あり曰く我の趙人を用ん事を思ふなりと卒も壽春の地もて卒しぬ

李牧へ趙の北邊の良將あり常も代の鴈門も居て匈奴夷も備へ便宜を以て官吏を置き市中の租税の皆輸て幕府へ算入なし士卒の費用も供し日も數牛を殺して士を饗し射騎を習し烽火を謹み聞

諜を多くし厚く戰士を遇ひけり預て約を爲して曰く匈奴即入て盜賊を爲す時の急も入て収保へし敢と捕虜などする者の斬んと匈奴入る毎も謹みて烽火を傳へ入て収保を事として敢て戦はず是の如くする事數歳もして亦土地金穀を亡失する事なしざるを匈奴の夷等の李牧の怯夫なりと侮り趙の邊將も亦同しく李牧の怯なりと咲ひけれの趙王李牧を讓けるも李牧更も命を奉す故の如くも爲せしかの趙王怒て之を召し他人も命して代て大將となしけるも歳餘もして匈奴來る毎も出て戦ひ出て戦へん數も勝利を失ひ失亡多くして邊地田作牧畜する事を得ず是も於て趙王復李牧を請けるも牧門と杜て出す固く疾と稱して命を奉す趙王復強て起して兵も將たらしめんとす牧其時王必ず臣を用んとあらん臣前の如くもして咎あくんの敢て命を奉んさらすの命を拜しかたしといふも王の之を許しぬ李牧の北邊へ行とひとしく故の約の如くせしかの匈奴數歳得る所なし終も復以て怯として侮りけり邊地の士卒の日も賞賜を得て合戦なきも倦果て皆奮ひ立て一戦せんを願ひける是も於て乃ち選たる車千三百乘選たる馬千四百金の賞を與ふへき兵士五萬人殺者十万人を得て悉く勸けして戦を習し大も畜牧を縱て人民野も滿けるも匈奴少しく内地も入れの伴り北て勝すとし數千人を匈奴も委て逃奔る匈奴の酋長單于之を聞大も衆兵を卒て内地へ十分も打入けるも李牧多く奇陳を爲し左右の翼を張出して之を撃ち大も破りて匈奴の十餘萬騎を殺し樓蘭の夷を滅し東湖の夷を破り林胡の夷を降せしかの匈奴の酋長單

手は遠く逃走りぬ其後十餘歳匈奴敢て趙の邊城に近つかざりし趙の悼襄王元年廉頗既亡て魏
よ入る趙李牧を命して燕を攻しめ武遂方城を拔る居と二年龐煖燕の軍を破り劇辛を殺す後七年
秦趙を破り大將扈輒を武遂城に殺し首を斬と十萬趙乃李牧を以て大將軍と爲し秦の軍を宣安よ
撃ち大よ秦の軍を破り其將桓騎を走す李牧を封して武安君となす居と三年秦番吾を攻む李牧撃
て秦の軍を破り南韓魏を距く趙王遷七年秦王翦よ命して趙を攻しむ趙李牧と司馬尙よ之を禦か
しむ秦多く趙王の寵臣郭開よ金を與へ反間を爲し李牧司馬尙謀反すと云いしめければ趙王乃ち
趙葱及び齊の將顔聚を以て李牧を代しむ李牧命を受す趙人を以て微よ李牧を捕へ得て之を斬し
む司馬尙を廢す後三月王翦因て急よ趙を撃ち大よ破り趙葱を殺し趙王遷及び其將顔聚を虜よし
て遂よ趙を滅せり

太史公か曰く死を知れぬ必ず勇あり死するとの難よ非す死よ處するとの難し蘭相如壁を引て柱
を睨み及び秦王の左右を叱するよ方て勢誅よ過す然に士或の怯懦よ去て敢て發せず相如一たひ
其勇氣を奮ひて威敵國よ信よ退きて頗よ讓る名太山よりも重し其智と勇とよ處すると兼たりと
謂へし

田單列傳第二十二

田單の齊の諸々の田氏の疏屬あり潛王の時單臨菑の市の椽たり未た人よ知れず燕樂毅よ齊を破

らしむ齊の潛王出奔す已よして菑の城と傳たり燕の師長驅して齊を平て田單安平の地よ走け
るよ其宗人よ盡く其車の軸の末を斷て鉄籠を傳しめけり已よして燕の軍安平を攻て城壞れ齊人
走て塗を爭ひ軸折車敗るよを以て燕よ虜よせられけるよ唯田單の宗人の鉄籠の軸なるを以て無
事よ脱るよとを得て東の方即墨の城を保へたり燕既よ悉く齊の城を降し唯獨り菑と即墨とのみ
下らず燕の軍齊王莒よ在りと聞兵を并て之を攻む淖齒既よ潛王を莒よ殺し因て堅く守て燕の軍
を距き數年下らず燕兵を引て東の方即墨を圍む即墨の大夫出て與よ戦ひ敗れ死す城中相與よ田
單を推舉て曰く安平の戦よ田單の宗人鉄籠の軸を以て全とを得たり是兵よ習る者ありとて立て
以て將軍となし即墨の城を守て燕の軍を距きける頃ありて燕國よて昭王卒し惠王立たり燕を
攻むる大將樂毅と隙有りて聞田單大よ悦び乃ち反間を燕よ縱ち宣言て曰く齊王既よ死し城の拔
さる者二ツのみ樂毅誅を畏て敢て歸らず齊を伐を以て名義として實の兵を連て南面して齊よ王
たらんと欲す齊人未た附す故よ且く緩く即墨を攻て以て其事の就とを待つ齊人の悞るよ所の者
の唯他の大將の來て即墨の殘れんとを恐ると燕王聞て然ありと思ひ驕劫を命して大將とをさし
樂毅よ代しめよけり樂毅の因て趙の國へ歸しよけり燕人の士卒急て陣中一致せず田單の乃城
中の人の食する每よ必ず其先祖を庭よ祭せける故飛鳥之を餌るか爲よ城中よ翔り舞ひて下り食
しける燕人之を怪みけり田單因て宣言して曰く神明來り下りて我よ教へたりとて乃ち城中の人

よ令して曰く當り神人ありて我か師となるへしと一卒あり曰く臣以て師と爲るへきか因て反り走る田單乃ち起て引還り東郷して坐して之を師とし事ける故卒大に驚きて曰く臣君を欺むく誠は無能なれに許し玉へと謝しければ田單か曰く子言ふ事勿れ我爲よ任せよとて因て師として事へ約束を出す毎に必ず神師と稱し乃ち宣言し曰く吾唯燕軍よて得たる所の齊の卒を削りて之を陣列の前よ置き我と戦ひ、即墨の敗れん事を懼ると燕人之を聞其言の如く生虜の齊の卒を削りて前行へ置きければ城中の人之と見て怒り堪はず皆々心を一致よして堅く城を守り唯得られん事を恐れける田單又反間を縱て曰く吾燕人の吾城外の冢墓を掘先人を僇しめん事を懼る是り寒心すへき事ありや燕の軍復讐墓を掘り死人を焼ければ即墨の人城上より望み見て皆涕泣し出て戦ひんと欲し忿怒前より十倍せり田單士卒の用ゆへきを知り乃ち身板と鍬とを操て士卒と功を分て城の工作を爲し妻妾の行伍の間よ編盡く飲食を散して士を饗し甲卒を皆伏せしめ老弱女子よ城よ乗しめ使を遣て降參を燕よ約す燕の軍皆萬歳と呼りける田單又民の金を収め千鎰を得たり即墨の富豪を以て燕の將よ遣しめて曰く即墨即降るとも願くは吾か族家の妻妾を虜掠むるとなく安堵せしめよと燕の大將大に喜て之を許し此より燕の軍益々懈けり田單乃ち城中を収て千餘牛を得たり絳き繒の衣を爲り畫くは五彩の龍文を以てし兵刃を牛の角よ束ね結ひて脂を瀝き葦を尾よ束ね其端を燒き城よ數十の穴を鑿り夜中其穴より牛を縦ち壯士五千入其後よ隨ひた

り牛の尾熱きよ堪かねて怒て燕の軍よ突入れければ寐をひれたる燕の軍勢大に驚き上を下へと混雜す牛の尾よ有る炬火の光明炫耀けるより燕の軍兵之を視るよ皆龍文され何物たるを辨すると能す加之す觸る所の者の傷を負者死する者數限なく狼狽廻る其所へ五千人の壯士の枚を銜みて潜り寄り一同に撞き打入り城中よても其圖を計り太鼓を打ち譟を揚げ老弱の皆銅器を擊叩き其聲勢を援けければ其聲天地を動しけるより燕の軍兵争か之よ堪ゆへき皆一同に敗走せり齊人遂に其大將騎劫を夷け殺しければ燕軍愈々擾乱して奔走をこりなしよけり齊軍亡を追ひ北を逐ひ過る所の城邑の皆燕よ畔きて田單よ歸しければ齊の兵の日よ益々多くして勝よ乘よ燕の日よ敗亡て卒よ河上よ追至て齊の七十餘城皆復齊と爲る乃ち襄王を莒より迎て臨菑よ入て政を聽く襄王田單を封して号して安平君と曰ふ

太史公か曰く兵の正を以て合ひ奇を以て勝之を善する者の奇を出す奇と正と還て相生す環の端なきか如し夫始に處女の如く敵人戸を聞て備を爲す後は脱兎の如く敵も距くよ及のすと云へり其田單の謂か初め悼齒の涓王を殺すや莒人涓王の子法章を求しよ所在を知らず僅よ之を太史繆の家よ得たり人の爲よ園よ水灌て居たりしよ繆の女憐みて善之を遇ひけり後法章私よ情を以て女よ告けり女遂に與よ通して有ける莒人共よ法章を立て齊王と爲し莒を以て燕を距くよ及ひて太史氏の女遂に后と爲れり所謂賢明と稱せられたる君王后是あり燕の初て齊よ入る時畫邑の人

田單の火牛の計
燕の大軍を
敗る



王蠋の賢あるを聞き軍中よ令して曰く壽邑の邊を環して三十里兵卒とも入る事勿れと王蠋の故を以て斯爲しけり己よして人を以て蠋よ謂せけるの齊人多く子の義を高しとす吾子を以て將と爲し子を万家よ封せんと蠋固く謝りけり燕人の曰く子若聽受さる時の吾三軍と引て壽の邑を屠ん王蠋か曰く忠臣の二君よ事へす貞女の二夫を更す齊王吾か諫を聽す故よ退きて野よ耕せり國既よ破れ亡ふるも吾存する事能す今又之を劫すよ兵を以てして君の將とならぬ是樂を助けて暴を爲さり其生て義なからん與の固より烹らるゝよ如すどて遂よ其頭を樹の枝よ經り脰を絶て死しよけり齊の亡走たる太夫之を聞て曰く王蠋の布衣の身ありさるも義北面して燕よ事す況て位よ在りて祿を食む者をやどて相聚て莒よ如き諸子を求て立て襄王と爲せり

魯仲連 鄒陽 列傳 第二十三

魯仲連の齊國の人あり奇偉倜儻畫策を好み仕官して職務よ任ずるを肯ず好て高節を持て趙よ游へり趙の孝成王の時よして秦王大將白起よ命きて趙の長平の軍を破らしむると前後四十餘萬よ及び秦遂よ東の方邯鄲の都を圍みけれの趙王大よ恐れける諸侯の救の兵卒も敢て秦軍を擊者有とちし魏の安釐王將軍晉鄙よ命して趙を救せけれ共秦を畏て蕩陰よ止りて進す魏王客將軍新垣衍よ命して竊よ邯鄲よ入らしめ平原君よ因て趙王よ謂て曰く秦の急よ趙を圍とを爲す所の者よ前よ齊の潛王よ強を争ひて帝と爲り己よして復帝を歸す今齊の潛王已よ益々弱し方今唯秦

のみ天下よ雄たり此軍必ず邯鄲を貪り取らんとよの非ずして其意復帝と爲んとを欲するなりされば趙誠使を發し秦の昭王を尊ひて帝と爲しちの秦必ず喜ひて兵を罷て去りぬへし平原君猶預して未だ決する所あらず此時魯仲連適趙よ游ひ秦の趙を圍むよ會魏の趙をして秦を尊て帝と爲しめんと欲するとを聞平原君よ見て曰く事將よ如何せんとするや平原君か曰く勝や何う敢て事を言ん前よ四十萬の衆兵を外よ亡ひ今又内邯鄲を圍れて去ると能す魏王客將軍新垣衍を使として趙をして秦を帝とせしむ今其人是よ在り勝や何う敢て事を言ん魯仲連か曰く吾始め君を以て天下の賢公子と爲しよ吾乃ち今よして然る後君の天下の賢公子よ非るとを知るや梁の客新垣衍と云ふ者安よか存在る吾請らくの君の爲よ責て之を歸しなん平原君か曰く勝請ふ紹介して此人を先生よ見しめん平原君遂よ新垣衍を見て曰く東國よ魯仲連先生と云ふ者あり今其人此處へ來れり勝請ふ紹介を爲して之を將軍と交らしめん新垣衍か曰く吾聞く魯仲連先生の齊國の高士なり衍の如き人の臣あり使の事よ職掌あり吾魯仲連先生を見る事を願す平原君か曰く吾既よ己よ之を泄せり將軍見さることを得ず新垣衍是非なく許諾あしよけり魯連新垣衍を見て一言を發せず新垣衍か曰く吾此圍れたる城中の人を視るよ皆平原君よ求め用ひらるゝ事を願ふ者なり今吾先生の玉貌を視るよ平原君よ求め用ひらるゝことを願ふ者よの非ず曷爲る久まく此圍れたる城の中よ在りて去さるや魯仲連か曰く世の中よて飽焦と云ふ人を從頌せぬを以て早く死せりと

爲る者の非なり衆人知されの則ち一身の爲ます彼秦の首を獲るを以て第一の功とする禮義を尊
 いさるの國あり權詐を以て其士を使ひ虜の如く其民を使へり彼秦國肆然天下を帝と爲り過り
 て政を天下に爲す時の連の東海を踏て死する有るのみ吾秦の民と爲るとい忍かたし將軍を見る
 とを爲す所の者の此趙の國を助んと欲するあり新垣衍か曰く先生之を助の將よ奈何と化するや
 魯連か曰く吾將よ梁及び燕よ之を助しめんと思ふあり齊と楚の二國の固より助るの決せり新垣
 衍か曰く燕の吾請ふ先生の説は従いん若乃ち梁と云ふ時の吾の梁人なり先生惡う能梁よ之を助
 しめんとするや魯連か曰く足下の梁國よて未だ秦の帝と稱するの大害あるとと略さる故のみ若
 秦の帝と稱する害を略せしむる時の必ず趙を助るならん新垣衍か曰く秦か帝と稱するの害何如
 先生明かよ説出せ魯連か曰く昔者齊の威王嘗て仁義を爲せり因て天下の諸侯を率て周の天子よ
 朝覲せり周の貧くして且勢微へ諸侯朝する者なくして齊獨り之を朝し居と歳餘周の威烈王崩
 せられしよ齊の威王後て往けれの周怒て齊よ赴て曰く天崩れ地坼新天子席を下り苦よ寐玉へり
 東藩の臣因齊と云ふ者後れて至れり斬んと齊の威王勃然として怒て曰く叱。嗟而の母の婢な
 りと罵られ周の遂よ天下の咲ものと爲りたり故よ生る時の周よ朝し死する時の之を叱す誠よ其
 求めの厭足ぬよ忍かたけれのなり彼天子すら固より然り其怪むよ足る事無し新垣衍か曰く先生
 獨夫僕を見ずや十人よして一人の主よ従ふ者の寧ろ力勝すして智若さらんや之を畏れのあり魯

仲連か曰く嗚呼梁の秦よ比る時の僕と同しきか新垣衍か曰く然り魯仲連か曰く吾將よ秦王をし
 て梁王を烹又醢よあさしめん新垣衍快然として悦こいすして曰く噫嘻太甚しきか先生の言や
 先生又惡んや秦王をして梁王を烹且醢よせしめんや魯仲連か曰く固より易きのみ吾將よ之を言
 ん昔者九侯鄂侯文王の殷の紂の三公なりき九侯子ありて好し之を紂よ獻せしよ紂以て惡しと爲
 して九侯を醢よす鄂侯之を争ふと強く之を辨すると疾しかりしかり又鄂侯を脯よせり文王之
 を聞て喟然として歎息せしかり之を姜里の庫の中へ拘たる事百日之よ死せしめんと欲す曷う今
 秦王と俱よ王と稱して卒よ脯醢の地よ就とを爲んや齊の潛王將よ魯よ之んとす夷維子爲よ策を
 執て從へり魯人よ謂て曰く子將よ何を以て吾君を待らんとするや魯人の曰く吾將よ十の太宰
 の饌を以て子の君齊王を待らんと思ふなり夷維子の曰く子安う禮を取て吾か君を來すや彼吾か
 君の天子なり天子巡狩する時の諸侯の舍を辟け筵席を納れ衽を攝け机を抱き膳具を堂下よ視天
 子已よ食し玉ひて後乃ち退きて朝政を聽くとかく待れて然るへしと魯人之を聞て城門の籥を投
 し内へ納しめさりき潛王魯よ入る事を得す將よ薛の國へ之んとし途を鄒よ假る是時よ當りて鄒
 の君死せり潛王入て吊いんと欲す夷維子鄒の孤よ謂て曰く天子弔ふ時の主人たる君の必將よ殯
 の棺よ倍きて北面を南方よ設けて然る後天子南面して吊ふの禮なりと鄒の群臣の曰く必此の若
 くせの吾れ將よ劔よ伏して死せんとす固よ敢て鄒よ入す鄒魯の臣生ての事養ふとを得す死して

の賄糧を得ざるも然れ共且天子の禮を鄒魯も行いんと欲すれは鄒魯の君臣納、事を果さ、りし今秦の万乗の國なり梁も亦万乗の國あり俱は萬乗の國は據て各々王と稱する乃名あり其一戰して勝を略して従ひて之を帝とせんと欲すこれ三晋の大臣の鄒魯の僕妾もたも如ざるなり且秦已と無くして帝たらひ且は諸侯の大臣を變易せんとすへま彼秦其不肖とする所を奪て其賢とする所は予へ其憎所と奪ひて其愛する所は與へんとす彼又其子女讒妾を諸侯の妃嬪と爲し梁の宮は處しめんとすへしされは梁王安んり晏然として己を得んや將軍又何を以て故の寵を得んやかくても秦を帝とするもやと雄辨高論聞人耳を敲てけり是は於て新垣衍起て再拜して謝て曰く始しめ先生を以て庸人と爲し吾今日先生の天下の士爲ることを知るあり吾請ふ出て敢て復秦を帝とするを言す秦の將之を聞て爲は軍を却くと五十里及及びけり適々魏の公子無忌晋鄒が軍を奪て以て趙を救ひ秦の軍を撃は會し秦の軍遂は引去けり是は於て平原君魯連を封せんと欲す魯連辭讓す使者三たび及及しかとも終は受肯せず平原君乃ち置酒し酒酣なる時起て前て千金を以て魯連を爲す魯連笑て曰く所謂天下の士を貴ふ者の人の爲は患を排ひ難を釋紛亂を解て取とちけれはあり即取ると有る者の商賈の事なり連は爲は忍ひざるありと遂は平原君は辭えて去り終身復見す其後二十餘年よして燕の將攻て齊の聊城を下す聊城の人或人之を燕は讒言しける燕の將誅を懼れて因て聊城を保ち守て敢て歸らず齊の田單聊城を攻と一年餘士卒多く死して

聊城下らず魯連乃ち書を爲り之を矢は約て以て城中は射込燕の將は遣る書は曰く吾之を聞く智者の時よ倍きて利を弄す勇士の死を怯て名を滅さす忠臣の身を先よして君を後よせず今公一朝の忿を行ひ燕王の臣あきを顧ざるの忠よ非るなり身を殺し聊城を亡して威齊國は信ざるの勇よ非るあり功敗れ名滅は後世よ稱せらるゝと無きの智よ非るなり三ツ者の世主も臣とせず説士も載せず故は智者の再ひ計らす勇士の死を怯れす今死生榮辱貴賤尊卑此時再ひ至らす願くは公詳かよ計て俗と同くする事勿れ且楚齊の南陽を攻め魏平陸と攻て齊南面の心あき以爲南陽を亡ふの害の小よして濟北を得るの利は大ありと故は計を定て審かよ之を處す今秦人兵を下す魏敢て東面せず衛秦の勢ひ成らひ楚國の形危し齊南陽を棄て右壤を斷ち濟北を定るの計て猶且之を爲すなり且夫齊の必ず聊城は決するの公再ひ計る事勿れ今楚魏交々齊は退られて燕の救至らず全齊の兵を以て天下の規あく聊城と共は期年の敵は據時の臣公の得る事能ざる事を見るなり且燕の國大は乱れ君臣計を失ひ上下迷ひ惑へり粟腹十万の衆を以て五たひ外は折け萬乘を以て趙は圍れ壞削れ主困し且天下の僂笑とあり國散て禍多く民心を歸する所なし今公又敵聊の民を以て全齊の兵を距く是墨翟の宋を守て楚を却けたると同じ力と云ふへきあり人を食ひ骨を炊き兵士外は反するの心あきわ孫臏の兵ども云ふへきあり材能天下は見れたり然れとも公の爲は計る者の兵車甲士を全くして以て燕は報するなり如す兵車甲士を全くして燕は歸らひ燕王必ず喜

ん身全くして國又歸らぬ士民父母を見るか如く交游臂を擡て世上に議論せし功業明かますへし上の孤主を輔けて以て群臣を制し下の百姓を養ひて以て説士を資く國を矯し俗を更め功名立つへきなり若此意あくの亦燕を捐て世を弄東齊を遊ん平地を裂き封を定め陶衛も比し世々孤と稱し齊と久ま存するの又一計あり此兩計ある者の名を顯し實を厚くするなり願くは公詳よ計て審かよ一處せよ且吾之と聞くは節も規る者の榮名を成すと能す小恥を惡む者の大功を立ると能す昔者管夷吾桓公を射て其鉤も中るの寡ふあり公子糾を遣て死すると能さるの怯きなり東縛控指を繫られたるの辱あり此三つの行ひの世主も臣とせしして郷里も通せず郷も管子も幽囚し出す身死して齊も反らざらしめ則亦名の辱人賤行たることを免れず賊獲すら且之と名を同じくする事を羞つ況て世俗をや故も管子身縲紲の中も在る事を恥ちすして天下の治まらざるを恥ち公子糾も死せざるを恥すして威の諸侯も信さることを恥つ故も三つの行ひの過を兼て五覇の首たり名天下も高くえて光鄰國を燭す曾子魯の大將たり三たひ戦ひて三たひ北地を亡ふと五百里も至れり郷も曹子も計も反顧るとかく踵と還さすして刎て死せしめ則亦名の敗軍の禽將たることを免れず曹子三たひ北たるの耻を棄て退きて魯君と計る桓公天下を朝せしめ諸侯を會す曹子一劍の任を以て桓公の心を壇坫の上も枝へ顔色變せず辭氣悖らす三歳の失ふ所一朝もして之を復せり天下震ひ動き諸侯驚き駭きて威吳越の夷も加へたり此二士の若き者も廉を成小

節を行ふと能はざるよの非るなり以爲よ身を殺し軀を亡し世を絶ち後を滅し功名の立ざるの智も非ざるあり故も感し忿るの怨を去、終身の名を立、慚の節を棄て累世の功を定む是を以て業の三王と流を争ひて名も天壤と相弊るあり願くは公一を擇て之を行へと燕の將魯連の書を見て泣と三日猶預して自決する事能す燕も歸らんと欲すれは已も隙あり齊も降らんと欲すれは齊人を殺し虜りし者甚た衆し已も降て後辱しめられんとを恐れ喟然として歎して曰く人の我を刃するよりの寧り自ら刃せんよのどて乃ち自殺せり聊城乱る田單遂も聊城を屠る歸りて魯連を齊王も言て之を爵せんと欲せしかの魯連逃て海上も隠る曰く吾富貴もして人も屈せんよりの寧り貪賤もして世を輕んじ志を肆もせん

鄒陽の齊人あり梁も游ひ故の吳人莊忌夫子淮陰の枚生の徒や交り上書して羊勝公孫詭の間も介らる勝等鄒陽を嫉て之を梁の孝王も惡くせり孝王怒て之を更も下し將も之を殺さんと欲しける鄒陽客游して讒を以て禽れ死して累を負んとを恐れ乃ち獄中より上書して曰く臣聞く思ひ報せられざる事なく信の疑ひれすと臣常も以爲然りと徒も虚語耳昔者荆軻の燕の太子丹の戦を慕て誠心天を感し白虹見れて日を貫けとも太子尙之を畏れたり衛先生秦の爲も長平の軍事を畫り精神天も徹して太白星昴宿に蝕せしかとも昭王尙之を疑ひたり夫精誠天地を變すれとも信の心燕丹昭王兩人の君を喻さす豈哀からずや今臣忠を盡し誠を竭し議論を畢玄已を知れんとを願へと

も左右の臣明かからず卒は吏の訊を従け世人の疑ふ所となれり時荆軻と衛先生とを復起しむるも而も燕と秦と悟らざるなり願くは大王孰と之を察し玉へ昔卞和寶の玉を献せしと楚王之を別たり李斯忠を竭せしも胡亥極刑を行ひたり是を以て殷の箕子の狂と伴り楚の接輿の世を辟たるの此患は遭とを恐れたるかり願くは大王孰と卞和李斯の意を察して楚王胡亥の聽を後よし臣を箕子接輿と笑せ玉ふと無かれ臣聞く殷の比干の心を剖て死し吳の子胥の尸を鸕夷に入て捐られたりと臣始めの信せさりき乃ち今の然ると有とを知れり願くは大王孰と察して憐を加へ玉へ諺は曰く白頭までも新なる交りの如く蓋を傾くる語も故き親みの如しと何とあれの相知ると相知らざるとよよるあり故は樊於期の秦の國を逃て燕の國へ之き荆軻は首を藉て以て燕丹の秦王を刺事奉たり王奢の齊の國を去りて魏の國へ行き城は臨みて自ら到りて以て齊の兵を却けて魏を全くせり夫王奢と樊於期と齊秦は新として燕魏は故きより非ざるなり二國を去て兩君は死する所以の其君の行ひ己か志は合て其義を慕ふと窮りなければなり是を以て蘇秦の天下は信せられさりしも燕の國へは尾生の如きの信ありたり白圭戰て六城を亡ひしも魏の爲よ中山の國を取たり何とあれの誠は以て相知と有のなし蘇秦燕は相たり燕の人之を王は惡さまと言ければ王の劍を按て大は怒り却て蘇秦は食のしむるは馱駝の珍膳を以てせり白圭中山は顯る中山の人之を魏の文侯は惡さまと言ければ文侯怒て其人は投付るは夜光の璧を以てせり何とあれの燕

王魏王の兩主蘇秦白圭は二臣心を剖き肝を拆きて相信すれり豈浮たる辭は移らんや故は女たる者の貌の美惡と無く後宮に入りては必ず妬れ士たる者の賢不肖となく朝廷に入りては必ず嫉まる昔者司馬喜の宋の國にて鬻脚たれども卒は中山は幸相とされり范雎の魏の國は曾を摺れ齒を折かれしも卒は應侯の爵を得たり此二人の者の皆必ず然るの計畫を信し朋黨の私を捐て孤獨の位を挾み持り故は自ら嫉妬の人を免る、事能はず是を以て申徒狄の自ら河水を身を沈め徐衍の石を負て海に入りたり世は容されども義は於て苟も比周を朝廷は取て以て主上の心に移さず故は百里奚の食を路乞たりしも秦の繆公之は委るは政を以てし寧戚の牛を車下は飯たりしも齊の桓公之は任するは國を以てせり此二人の者豈宦を朝は假り譽を左右は假て然る後繆公桓公の二主始めて之を用ひんや心は感し行ひは合ひ膠漆よりも親し昆弟も離す事能はず豈衆の人の口は惑されんや故は偏聽の姦を生じ獨任の乱を成す昔者魯の國は季孫の説を聽て孔子と逐ち宋の國は子罕の計と信して墨翟を囚ふ夫孔子墨子の辨を以てすら自ら讒諛は免る、と能はず魯宋の二國之は爲は危し何となれり口衆くして金を鑠を毀り積て骨を銷せりあり是を以て秦の戎人由余を用ひて中國は覇たり齊の越人蒙を用ひて威宣を強くせり此二國の豈俗は拘り世は牽れ阿偏たる辭は繋れんや公は聽並ひ觀て名を後世は垂たり故は意合時胡と越の遠き國も昆弟と爲る由余越人蒙は是あり意合ざる時の骨肉の親き者も出逐て收めず丹朱象管叔蔡叔。是なり今人

主誠能齊秦の義を用ひ宋魯の聽を後よする時の五伯を稱するより足す三王も爲易きなり是を以て聖王の之を覺寤奸臣子の心を捐て賊臣田常の賢を説くす周の武王の般の忠臣比干の後を封じ紂の殺す所の孕婦の墓を修めたり故に功業復天下に就たり何とされの善を欲すると願足りさせされのなり夫晋の文公の其讎勃鞞を親みて諸侯に強弱と爲り齊の桓公の其仇を用て一たび天下を匡せり何とされの則慈仁愍愍として誠心よ加へ虚き辞を以て借る可かるるなり夫秦もて商鞅の法を用て東の方韓魏の二國を弱め兵力天下に強かりしに至て卒に之を車裂せり越もて大夫種の謀を用ひ勁き吳國を禽り中國に覇たりしも卒に其身を誅したり是を以て孫叔敖の三たび宰相を去て悔す於陵の子仲の三公を辞退して人の爲に園に水灌けり今人主誠能驕傲の心を去り報すへきの意を懷き心腹を披き情素を見し肝膽を墮り徳厚を施し終に之と究達し士も愛むこと無き時の夏桀の狗も堯の如き仁者を吠しむへく盜蹠の客も許由の如き清者を刺しむへし況して万乗の權も因て聖王の賢ある者をや然る時の荆軻の燕丹の爲に七族を湛め要離は吳王の爲に妻子を燒たるも豈道に足んや臣聞く明月の珠夜光の璧ありとも闇夜を以て人よ道路に投付あり人劍を按て相眇さる者あり何とされの因事ありして前に至る故あり蟠木根抵の輪困離詭たるも万乗の器と爲る者の之れ乃ち左右先之か容る事を以てすれのあり故に因事無くして前に至る時の隋侯の珠夜光の璧を出すも雖も猶怨を結ひて徳とせられず故に人ありて先談す

る時の枯木朽株を以て功を樹て忘れず今夫天下の布衣究居の士身貧賤も在て堯舜の術を包ね伊尹管仲の辨を挾み龍逢比干の意を懷き忠を當世の君に盡さんと欲すと雖も而れとも素より根抵の容るゝ事あり精思を竭し忠信を開き人主の國を治る事を輔けんと欲すと雖も人主必ず劍を按相眇の跡あらん是布衣も枯木朽株の資たる事を得さらしむるなり是を以て聖王世を制し俗を御するに獨り陶鈞の上と化して卑乱の語を牽れず衆多の口を奪れず故に秦の皇帝中庶子蒙嘉の言を任して以て荆軻の説を信して比首窃を發せり周の文王涇渭に獵し呂尙を載て歸て以て天下に王たり故に秦左右を信して殺れ周烏集を用ひて王たり何とされの其能く攀拘の語を越域外の議を馳獨り昭々曠なる道を覲るを以てなり今人主諂諛の辞を沈み帷裳の制を牽れ羈れざるの士をして牛驥と阜を同ふせしむ此鮑魚か世を忿て富貴の樂を留らざる所以あり臣聞く盛飾もて朝廷へ入る者の利を以て義を汗ざす名号を砥勵者の欲を以て行ひを傷ず故に縣勝母と号けて曾子入らず邑朝歌と号して墨子車を廻せり今天下の寥廓の士をして威重の權を攝へ位勢の貴も主と去故に回面汗行して以諂諛の人を事へて左右の親み近かんとを求めしむ然るときに士たる者の伏て堀穴巖々の中は死せん耳安て忠信を盡して闕下は趨く者あらんや書梁の孝王も奏す孝王人よ命して之を出さしめ卒に上客とて爲しめけり

太史公曰く魯連其指意大義も合すと雖も然とも余其布衣の位も在て焉然として志を肆よし

諸侯は誦ます當世は諛説て卿相の權を折を多なりとす鄒陽辭不遜ありと雖も然れとも其物を比へ類を連る者悲むは足る者あり亦抗直撓すと謂へし吾是を以て之を列傳に附せり

屈原賈生列傳第二十四

屈原の名は平楚の同姓なり楚の懷王の左徒の官たり博聞にして強志なり治乱の道理は明かき辭令の文章は嫺り入る時の王と國事を圖り議して以て號令を出し出る時の賓客は接し遇ひて諸侯は應對せり王甚た之を任しける上官大夫之と列を同じ寵を争ひて心中は其才能を害とせしは懷王屈原を命して憲令を造爲しむ屈平草藁を屬して未だ定まらず上官大夫見て之を奪て己か功となさんと欲す屈平與へす因て之を讒言しけるは王屈平は憲令と爲らしむるとい衆人知ざる者ありし一令出る毎に平其功を伐て曰く我は非ずして能かざる憲令を爲るとい成りかたしと王聞て怒て屈平を疏しけり屈平王の聽の聰かす讒諂の明を蔽ひ邪曲の公を害し方正の容られざると疾むや故は憂愁幽思て離騷を作れり離騷は猶憂は離ると云ふと同義なり夫天の人の始めあり父母の人の本なり人究る時の本は反る故は勞苦倦極て未だ嘗て天を呼すんはあらず屈平道を正しくし行ひを直くして忠を竭し智を盡して以て其君を事へけるは讒人之を問たるは究れりと謂へし信よして疑はれ忠よして謗らる能怨むるとあからんや屈子の離騷を作れるは蓋し怨みより生ずるなり詩の國風の色を好て淫せず小雅の怨み誹て乱れず離騷の若き者い之を兼たり

と謂へし上は帝譽を稱し下の齊桓を道ひ中の湯武を述て以て世の事を刺り道德の廣崇治乱の條貫を明かよして舉く見さるるの靡し其文約よして其辭微し其志潔して其行ひ廉あり其文を稱すると小よして其捐極て大ひなり類と擧と擧して義を見るとき遠し其志潔故は其物を稱すると芳し其行ひ廉なる故は死して容られずして自ら疎る渾汗泥の中は濯ひ濁穢は蟬蛻て以て塵埃の外は浮ひ遊へり世の滋垢は獲す觸然として泥よして滓からざる者なり此志を推し日月と光を争ふと雖も可なり屈平己は細けらる其後秦齊を伐んと欲す齊楚と從親す秦の惠王之を患ひ張儀をして詳りて秦を去りて幣を厚くし質を委ねて楚は事へしむ曰く秦甚た齊を憎む齊楚從親せり楚誠能齊は絶ち秦願の商於の地六百里を献せん楚の懷王貪りて張儀を信して遂に齊は交を絶ち使を以て秦は如かせ地を受んとせしは張儀之を詐りて曰く儀王と六里を約せり六百里と云ふとを聞す楚の使怒て去り歸て懷王は告けるより懷王怒て大に師を興して秦を伐つ秦兵を發して之を撃ち大に楚の師を丹淅は破り首を斬ると八萬楚の大將屈匄を虜り遂に漢中の地を取けれは懷王愈々忿怒は堪はず悉く國中の兵を發して以て深く入て秦を撃ち藍田の地は戰ひける魏の國もて之を聞より大に兵を起して楚を襲ひ鄧の地まで攻入けるより楚の兵悞れて秦より歸りて齊竟は怒て楚を救す楚國之か爲よ大に困みけり明年秦漢中の地を割て楚は與へて以て和す楚王の曰く地を得るとを願はず願くは張儀を得て甘心せん張儀聞て乃ち曰く一の張儀を以て漢中の地は

當つ臣請ふ往て楚よ如ん楚よ如て幣を事を用ゆる者臣斬尙よ厚くして諛の辯を懷王の寵姫鄭袖
 よ設けけれの懷王竟よ鄭袖よ聽し復釋して張儀を去らしむ是時屈平既よ疏せられて復位よ在ら
 す齊よ使して顧反て懷王を諫めて曰く何故よ張儀を殺さる懷王悔て張儀を追掛させけるよ
 及のさりき其後諸侯共よ楚を撃て大よ之を破り其將唐昧を殺す時よ秦の昭王楚と婚姻し懷王と
 會せんと欲す懷王行んと欲せしよ屈平か曰く秦の虎狼の國よして信すへからす行と無よ如す懷
 王の稚子、蘭王よ行とを勸めて奈何り秦の歡を絶んやと曰ける故懷王卒よ行て武關よ入る秦兵
 を伏て其後を絶ち因て懷王を留て以て地を割とを求む懷王怒て聽用す亡て趙よ走りけるよ趙の
 國よて内さりしかの是非あく復もや秦へ之きて竟よ秦よ死して歸して楚國よ葬りけり長子頃襄
 王立其弟子蘭を以て令尹の官と爲し政を秉せけるよ楚人既よ子蘭を咎むるよ懷王を勸て秦の國
 へ入れて反らさるるとを以てするや屈平既よ之を嫉む放流ると雖も楚國を睠顧て心を懷王よ
 繫け反さんと欲するとを忘す君の一たひ悟り俗の一たひ改むるとを冀ひ幸ふあり其君を存し國
 を興して之を反覆んと欲するの一篇の中三たひ志を致しぬ然れとも終よ奈何ともすへきなし故
 小以て反すへからす卒よ此を以て懷王の終悟らさるるとを見るあり人の君たる者の愚となく智と
 賢不肖となく忠臣を求めて自ら爲よし賢者を舉ひて自ら佐るとを欲せさるのさし然れとも國を
 亡し家を破るもの相隨屬て聖君の世を累ねて見れるさ者の其所謂忠と謂所の者の不忠よして所

謂賢と謂ふ者の不賢なれなり懷王忠臣の分を知らさるを以て故よ内い鄭袖よ惑ひ外の張儀よ
 欺かれ屈平を疏して上官大夫令尹子蘭を信用し兵挫け地削れ其六郡を亡ひ身の客となりて秦よ
 死し天下の笑と爲る此人を知らさるの禍なり易よ曰く井泄して食れす我心の惻を爲せり以て汲
 へし王明かれの並よ其福を受と云へり王の明かならさるの豈福するよ足んや令尹子蘭之を聞て
 大よ怒り卒よ上官大夫をして屈原を頃襄王よ短らしむ頃襄王怒て之を江南の地よ迂し置けり屈
 原江の濱よ至り髪を被り行々澤の畔よ吟へり顔色憔悴形容枯槁たり漁父見て之よ問て曰く子
 三閭大夫よ非すや何故ありて此地よ至れる屈原か曰く世舉て混濁て我のみ獨清し衆人皆醉て我
 獨醒たり是を以て放ち逐れたり漁父か曰く夫聖人と云ふ者の物よ凝滯らすして能世と推移る
 者なり世舉て混濁あり何故其流よ隨ひて其波を揚げさるや衆人皆醉なり何り其糟と舖て其醜を
 曝らさるや何の故よ瑾を懷き瑜を握て自ら放たれしむるとをするや屈原か曰く吾之を聞く新よ
 沐者よ必ず冠を彈き新よ浴する者の必ず衣を振ふと人又誰か能身の察きを以て物の汝き者を
 受んや寧常流よ赴て江魚の腹中よ葬られんのみ又安う能皓の白を以て世の蝸蟻たるを蒙
 んやと乃ち懷沙の賦を作り是よ於て石を懷き遂よ汨羅の水よ投して以て死せり屈原既よ死する
 の後楚よ宋玉唐勒景差の徒者あり皆辭を好て賦を以て稱せられたり然れとも皆屈原の從容辭令
 を祖とせり終よ敢て直諫するとあし其後楚國日よ削り弱められ數十年よして竟よ秦よ滅された

り屈原汨羅に沈たりしより後百余年にして漢代に賈生と云ふ者あり長沙王の太傅の官と爲り屈原か投せし湘水を過ぎ書を投して屈原を弔へり
 賈生名の諱洛陽の人なり年十八能詩を誦し書を屬するを以て郡中へ聞えたり吳廷尉と云ふ人河南の太守と爲り其秀才あることを聞き召して門下へ置いて甚た愛幸せしか漢の孝文皇帝初て立河南の守吳公治平天下第一たり故李斯と邑を同くして常て學事すと聞き乃ち徵て廷尉の官とせしむ
 吳廷尉乃ち言しける臣の門下へ賈生と云者あり年少しと雖ども頗る諸子百家の書を通せり是
 於て文帝召して博士の官と爲しけり此時賈生の年二十餘最も年少かり詔令議等の下る毎に諸
 々の老先生言と能はず賈生盡く之か對を爲す人々各々其意の出さんと欲する所の如くなり
 しかは是に於て諸々の老先生も乃ち能く及ふと能すと爲すあり孝文帝之を説ひ等を超迂て一歲
 の中へ太中大夫に至りし賈生以爲く漢の代興りてより孝文皇帝に至るまで二十餘年天下和
 給ひたり此時當りて固より當りて正朔を改め衣服の色を易へ制度を法め官名を定め禮樂を興す
 へしと乃ち悉く其事の儀法を草具し色の黃を尙ひ數の五を用ひ官名を爲り悉く秦の法を更む孝
 文皇帝初て位に即て謙讓ありて未だ違あらずとせしも諸々の律令更め定る所及ひ列侯を悉く國
 又就しむるとの其說皆賈生の發議なりとす是に於て天子議して以爲く賈生の公卿乃位に任たり
 と大臣周勃灌嬰東陽侯馮敬の屬盡く之を害とし乃ち賈生を短りて洛陽の人年少く初學にして

専ら權柄を擅しして諸事を紛乱すと曰ひけるより是に於て天子も後亦之と疏して其議を用ひ
 す乃ち賈生を以て長沙王の太傅の官と爲しける賈生既に辭して行ふ長沙の地卑濕なり自ら以爲
 壽長きとを得ず又適られて去るを以て意自得せず湘水を渡るも及ひて賦を爲りて屈原を弔へ
 り其辭曰く共て嘉惠承て罪を長沙に俟つ側へ聞けり屈原自汨羅に沈りと造て湘流に託て敬
 みて先生を弔ふ世の極罔に遭て乃ち其身を隕せり嗚呼哀ひか時之不祥な逢へり鸞鳳伏し竄
 れて鳩鳥翺り翔へり關雞の尊ひ顯れて讒諛の志を得たり賢聖の逆も曳て方正の倒も植り世伯夷
 を貪れりと謂て盜跖を廉しと謂り莫邪を頓しとして鉛刀を銛とせり干嗟嚶々たり先生の故なき
 と周の鼎を幹し棄て康ある瓠を室とし罷たる牛も騰駕て蹇たる驢を驂せり驥の良馬の兩
 耳を垂て擗車も服たり章甫の冠を履も薦く漸く久しかるへからず嗟苦む光生獨此谷も離ると訊
 て曰く己るかな國其我を知と莫きと獨堙鬱として其誰まか語らん鳳凰漂々て其高遺けり
 夫固より自縮て遠く去れり九淵を襲たるの神龍沕として深く潜て以て自ら珍とせり夫豈蟄と蛭
 蟻も從んや貴ふ所の聖人の神德濁る世を遠て自ら藏る騏驎を係羈とを得へからしめり豈夫犬羊
 も異と云んや般として紛々として其此尤め離れり亦夫子の辜なり九州を膺て君を相けんも何
 り必ず此都を懷んや鳳凰千仞の上も翔り德の輝を覽て之も下る細德の險微あるを見て翻を搖え
 増て逝て之を去る彼尋常の汗漬も豈能く舟を呑の魚を容んや江湖も横るの鱣鱠固も將も蛟蟻も

制せられんとす賈生長沙王の大傅と爲り三年にして賜あり飛て賈生か舎に入り坐隅と止まる楚人賜を命して服と云ふ賈生既と適を以て長沙に居る長沙の卑濕なり自ら以て爲く壽長きとを得ずと之を傷悼み乃ち賦を爲りて以て自廣めける後一年餘にして賈生召れて見ゆ孝文帝方と釐を受け宣室に坐す上鬼神の事と感するも因て鬼神の本を問ふ賈生因て具は然る所以の狀を道けるも夜半に至りて文帝其説所と感服し思す座席を前て聞けり賈生説了て罷退きて後文帝の曰く吾久しく賈生を見ず自ら以て爲く之は過たりと今及さるあり居と頃くして賈生を拜して梁の懷王の太傅の官となせり梁の懷王の文帝の少子なり寵愛ありて讀書を好む人なる故賈生をして之は傳たらしめけるあり文帝復淮南厲王の子四人を封して皆列侯と爲しければ賈生諫て以て爲く患の興ると此より起らんと言しける賈生數々上疏して諸侯或の數郡を連るとの古の制はあらず稍之を削るへしと奏聞せければ文帝聽かず居と數年懷王騎て馬より墮て死せり子孫なし賈生自ら傳と爲りて無狀なるを傷み哭泣すると一歳餘にして亦死しけり賈生の死する時年三十三孝文帝帝崩して孝武皇帝立ふ及て賈生の孫二人を擧て郡の太守に至らしむ而して賈嘉最も學を好む其家を世とせり余と書を通て交あり孝昭皇帝の時と至て列して九卿の官とされり

太史公曰く余離騷の天問招魂哀郢を讀て其志を思ひ長沙に適き屈原か自沈む所の淵を視て未だ嘗て涕を垂て其人と爲りを想ひ見ずんありあらざるあり賈生の之を吊するを見よ及て又屈原

原彼其材を以て諸侯に游り、何の國もか容られざらん而を自ら是の若くから令るとを怪む服烏の賦を讀み死生を同ふし去就を輕ぜり又爽然として自失せり

呂不韋列傳第二十五

呂不韋の陽翟の大賈人なり四方に往來して賤き時と販ひ貴き時と賣り千金の家を累ねけり秦の昭王の四十年と太子死し其四十二年と其次子安國君を以て太子と爲せり安國君子二十四人ありき安國君甚た愛する所の姫あり立て正夫人と爲る号して華陽夫人と曰ふ華陽夫人子なし安國君の中男名の子楚子楚の母を夏姫といふ愛なし子楚秦の爲に趙と趙を攻む趙甚た子楚を禮し尊し尊し子楚の秦の諸々の庶孽の子とて諸侯の質子と成し事故車乘進用の饒ならざるより居處困みて意と得ず此時呂不韋趙の都の邯鄲に買ひせしか子楚を見て大に之を憐みて曰く是る奇貨なり居置時の後々多分の利益あるへしと言て乃ち往て子楚を見へ説て曰く吾能く子の一家一門を大よせん子楚笑て曰く且自ら君の門を大よして後よこり吾か門をも大よ爲へしと言ければ呂不韋か曰く然らず吾か門の子の門の大よなるを待て自然と大よあるありとの詞も子楚の心も謂所を知り乃引て與よ坐し密に謀り深く語り合けるも呂不韋か曰く秦王已も老玉ひぬ安國君太子たるを得玉へり竊に聞くも安國君よの華陽夫人を愛し幸ひせらる、よし幸ひ華陽夫人よ子なし能く適嗣を立定むる者の獨り華陽夫人の心よ在るのみ今子の兄弟二十餘人ありして

子い又其中程の位置も居て甚た幸せられず因て久しく諸侯の人質と爲り玉へり即大王薨じ安國君立て王と爲り玉は、子長子も與るとを得かたく諸の子の旦暮父君の前も在る者と太子たるとを争ふとすら幾ふと能さらん子如何と思ひ玉ふや子楚か曰く然あり之を爲の如何すへきや呂不韋か曰く子貧くして此國も客となり以て親も奉獻し及ひ賓客と交を結ふと有るも非ず尤も事を謀りかたし不韋貧といへとも千金と以て西の方秦も游ひ賁縁して安國君及ひ華陽夫人も事へ其機を計り子を立て適嗣の君とあし奉らんと此時子楚頓首して曰く必ず君の策の如くなるを得の請ふ後來の秦の國を平分して君と之を共よせんと大よ悦ひ呂不韋も此事を託みけり呂不韋乃ち五百金を以て子楚も獻して進用となし賓客も結ひ復五百金を以て奇物玩好を買て自ら奉て西の方秦國も游ひ賁縁を以て華陽夫人の姉を見るところを求め皆奇物玩好を華陽夫人も獻し因りて言けるい子楚の賢もして且智あり諸侯賓客も結ふと天下も遍し常も曰く楚の夫人を以て天と思へりとて日夜泣て父君と夫人の事のみを慕ひ玉へりと夫人大よ喜ひけり不韋因て其姉をして夫人も説しめて曰く吾之を聞く顔色を以て人も事ふる者の色衰へて恩愛弛ふ者なり今夫人太子も事て甚た寵愛あるも子なくおのせの此時を以て蚤く自ら諸々の公子の中の賢も且孝行ある者も結て舉立適として之を夫人の子とし玉ふへし夫在玉ふ時の重し尊れ夫百歳の後死し玉ふとも子とする者王とあり終る勢を失はず此所謂一言もして萬世の利なり繁華なる時を以て本を樹

玉のすんの即色衰へ愛弛ひて後の一語を開かんとおほすとも尙得へけんや今子楚賢もして自ら中男なれり其次序適の子となるを得ざることを知り其母の又幸せらるゝとかくして自ら夫人も附て居り夫人誠此時を以て引拔て以て適とせの夫人の竟世まで秦も寵ありなん此事計ひ玉のすやと勸も華陽夫人も大よ之を然とし太子の間を承て從容と言けるい子楚趙も賢たる者絶た賢なりと趙へ來往する者皆之と稱し譽もき因て涕泣して曰く妾幸ひも後宮も充るゝとを得しも不幸もして子あし願くの子楚を得て立て適嗣と爲して妾か身を託せん安國君之を許し夫人も玉符を刻し約して以て適嗣と爲す安國君及ひ夫人因て厚く子楚も餽遺て呂不韋も請ひて之を子楚も傳へしむ子楚之を以て名譽益も諸侯も盛なり呂不韋邯鄲中の諸の姫の中より絶た好くして善舞ふ者を取て與も居り身ると有るを知りけるか此時子楚不韋も從て宴飲し此美姫を見て之を説ひ因て起て壽を爲して此美姫を請けれり呂不韋の伴り怒て念も業已も家産を破りて子楚の爲さし以て此奇貨を釣得んと思ひし事ゆへ心も悦ひ遂も其姫を獻しける姫子楚も愛せられしも自ら身も有ることを匿し大期も及て子政を生む子政の乃ち秦の始皇帝あり子楚是も於て遂も姫を立て夫人となせり秦の昭王五十年も王堅も命して趙の邯鄲を圍むと急なりしゆへ趙の子楚を殺さんと欲せしかり子楚の呂不韋も謀り金六百斤を守者の吏も予へ脱し亡て秦の軍中へ赴き遂も以て歸ることを得たり趙もて子楚を捕逃し是非も欲せしも子楚の夫人の趙の國の

蒙家の女なりしかり匿るゝとを得て捕れさりき故を以て母子竟も活るとを得たり秦の昭王五十
 六年よして薨しぬ太子安國君立て王となる華陽夫人を王后とあし子楚を太子となせり趙も亦子
 楚の夫人及び子政を奉て秦よ歸し來りける秦王立て一年よして薨しぬ諡して孝文王となす太子
 々楚代て立是を莊襄王と爲す莊襄王養ひる、所の母華陽后を華陽太后となし其の母夏姬を尊ひ
 て夏太后となす莊襄王元年呂不韋を以て丞相となし封して文信侯とあす河南浴陽十萬戸を食し
 心莊襄王位よ即て三年よして薨しぬ太子政立て王となる時よ年十三呂不韋を尊て相國とあし号
 して仲父とあす秦王年少し太后時々竊よ私よ呂不韋よ通す不韋の家僮万人是の時よ當て魏よ信
 陵君あり楚よ春申君あり趙よ平原君あり齊よ孟嘗君あり皆士よ下り賓客を喜ひて以て相送よ傾
 け合けり呂不韋の強きを以て如さるゝとを羞ち亦士を招き致し厚く之を遇へり食客三千人の多
 きよ至りける此時諸侯辨士多し符卿の徒の如き書を著し天下よ布り呂不韋乃ち其客よ各々聞
 所を著さしめ集め論して以て八覽六論十二紀二十餘萬言を爲りて以て天地万物古今の事を備ふ
 号して呂氏春秋と曰ふ之を咸陽の市門よ布さ千金を其上よ懸て諸侯の游士質客を延き能一字を
 増損する者あらり千金を與へんと讎よけり始皇帝益々壯あり太后の淫乱止す呂不韋私通の事覺
 れて禍の已よ及んんと恐れ乃ち私よ大陰の人嫪毐と云ふ者を求め得て舍人となし時よ倡樂を
 縱て相の小さい車の輪を造て嫪毐をして其陰と以て之を關して行しめ太后よ之を聞せて以て太后

よ陥せんとしてけるよ太后聞て果して私よ嫪毐を得て歡樂せんと欲せしかり呂不韋得たりと乃
 ち嫪毐を進め人をして詐りて腐罪よて陰なきと告せせんと計り不韋太后よ曰ひけるハ事腐罪と
 詐らハ禁中よ給事する事を得へしと太后乃ち陰よ厚く腐罪を主とる更よ賜して詐りて之を論
 し其鬚眉を拔て宦者とあし遂よ太后よ侍るとを得せしめ太后私よ與よ通し絶た之を愛し身ると
 有り太后人の之を知んんと恐れ詐りて卜いせけるハ時を過るか爲宮を徙て雍の大鄭宮よ居て
 見聞を防きけり嫪毐常も從ひて賞賜甚も厚く百事皆嫪毐よ決しける嫪毐の家僮數千人諸客宦を
 求めて嫪毐の舍人と爲る者千餘人よ及ひけるとり始皇の七年よ莊襄王の母夏太后薨しぬ孝文王
 の后を華陽太后と曰ふ孝文王と壽陵よ會せ葬り夏太后の子莊襄王を芷陽よ葬る故よ夏太后獨別
 よ杜の東よ葬りける嘗て曰く東よハ吾子を望み西よハ吾夫を望ん後百年よして墓の旁よ當よ万
 家の邑あるへしと始皇九年嫪毐の事を告る者あり實ハ宦者よ非す常よ太后と私よ亂し子二人を
 生たりしか皆之を匿し太后と謀て曰く王即薨せわ子を以て後とあして秦王たらしめんと預て巧
 りと是よ於て秦王更よ下して治へけるよ具さよ情實を得たり事相國呂不韋よ連り及ひける九月
 嫪毐の三族を夷け殺し太后の生む所の二子を殺して遂よ太后を雍よ迂し諸々嫪毐の舍人の皆其
 家を没して之を蜀の地へ迂しけり秦王相國を誅せんと欲せしも其先王よ奉する功大ある上賓客
 辨士の游説する者衆きか爲よ法を致すよ忍す秦王十年十月相國呂不韋を免す齊人茅蕉秦王よ説

又及て秦王乃ち太后を雍より迎て感陽の都へ歸し復して文信侯を出して國は河南に就しむ歲餘
 よして諸侯の賓客使者道は相望み文信侯を請けれは秦王其變を爲んとを恐ひ乃ち文信侯は書を
 賜りて曰く君何の功か秦は在る秦君を河南に封して十万户は食しむ君何の親か秦は在て仲父と
 稱する其家屬と徒りて蜀の國は處れと呂不韋自ら度るは稍く侵れて誅せらんとを恐れ乃ち酖毒
 を飲て死す秦王怒を加る所の呂不韋嫪毐皆已に死す乃ち皆嫪毐の舍人の蜀に遷る者を復し歸し
 けり始皇十九年太后薨す諡して帝太后とす莊襄王と正陽に會せ葬る
 太史公か曰く不韋及び嫪毐封せられて長信侯と号す人の嫪毐の惡事を告るは及て毒之を聞く
 秦王左右を驗て未だ發せず雍に之て郊の祭とせしは毒禍の起るを恐れ乃ち徒黨と諾り太后の璽
 を矯り卒を發して斬年宮に謀反せり因て吏を發して毒と攻む毒敗れて亡走れり追て之を好時の
 地は斬て遂は其宗を滅せり而して呂不韋此より細らる孔子の所謂聞といふ者の其呂子の如き者
 乎

刺客列傳第二十六

曹沫は魯國の人なり勇力を以て魯の莊公は事ふ莊公力を好む曹沫魯の大將と爲り齊の國と戦ひ
 て三たび敗北しけれは魯の莊公懼て乃ち遂邑の地を齊へ獻して以て和睦を結ひ莊公猶復曹沫を
 以て大將と爲置けり齊の桓公は魯の和睦を許し柯の地は會して盟を爲しけるは桓公莊公と既

は壇上は盟ひ終て後曹沫は首を執て齊の桓公を搏伏て動さず桓公の左右及び軍士までも只あれ
 よと云のみよて主君を人質に捕りて敢て動く能はず桓公も大盤石に壓れし如く如何んども
 爲かたし因て問て曰く子何の望み欲する所ありてかく我を劫すや曹沫か曰く臣か斯君を侵すの
 別は説あるは非ず今齊は強くして魯國は弱し而るを君大國を以て幾回か魯國を侵し玉へり亦以
 て甚たしと謂ふへしは魯國都城壞れて即ち齊國の境を壓たり君思慮し玉ひて魯の侵地の總て歸
 し玉へ然すは臣か頸血を以て君に濺奉らん如何りやとは首の鉞を桓公の咽喉へ差付たるは桓
 公是非なく魯の侵地を歸す事を許しけれは曹沫忽ち首を投すて桓公を扶け起し壇を下りて北
 面して群臣の位は就き顔色變する容なく辭令も故の如くありける桓公劫されたるを怒て侵地を
 歸すの約束は倍かんとしけれは齊の相國管仲か曰く約束は倍くは甚た不可あり夫小利を貪りて
 以て自ら快しとし信實を諸侯に棄て天下の援を失ふは之を歸し予るは如すとは是は於て桓公
 遂は魯の浸地を割予へ曹沫三戰よて亡ひたる土地は尽く復魯國へ歸りけり其後百六十有七年は
 して吳の國は專諸の事あり
 專諸は吳國堂邑の人なり伍子胥の楚を亡て吳は如し時より專諸の能あるとを知りけるか伍子胥
 既は吳王僚は見へ楚國を伐の便利を説しは吳の公子光か曰く彼伍子胥は父兄皆楚に死されたり
 子胥か楚を伐んと曰ふ者自ら爲は私の讎を報んと欲するよて吳國の爲よするは非ず吳王遂

に楚を伐つ事を止り伍子胥公子光の吳王僚を殺んと欲する事を知り乃ち曰く彼公子光内難君を弑するの志あり未だ説外他國を伐の事を以てすへからずと乃ち專諸を公子光に進めて其心合ん事を計りけり公子光の父を吳王諸樊と曰ふ諸樊の弟三人有次を餘祭と曰ひ次を夷昧と曰ひ次を季札と曰ふ諸樊季札の賢ある事を知りて太子と立す次を以て三人の弟傳へ卒國を季子札と致さんと思慮しける因て諸樊死して餘祭傳へ餘祭死して夷昧傳へ夷昧死して當よ季子札傳へきよ季子札逃て立事を肯す吳人は非なく夷昧の子の僚を立て王と爲しける是今の吳王僚なり是於て公子光の曰く兄弟の次第よて順よ立者とあす時の叔父季子札當よ立へきい勿論あり必ず子傳へて立者と爲時光こり眞の適嗣よて當よ立へきい勿論ありざるを從弟の分際よて國を受るの順ありと故よ嘗て陰謀臣を養ひ置て立事を求めけるよ公子既よ專諸を得て大悦ひ善客禮を以て之を待ひけり九年よして楚の平王死しぬ春よ至て吳王僚楚の喪よ乘して之を伐んと欲し其二弟公子蓋餘燭庸を以て兵よ將として楚の潜と云地を圍しめ延陵よ封邑を受たる季子札を晋の國へ使として諸侯の變動を觀せしめけり偕も楚國征伐の兩大將の潜を圍て城の陷ぬよ楚國の大兵を發しつゝ潜の土地を捨置て吳軍の後の路々を絶斷たれり吳の兵の前よ敵城よ支られ後の楚軍よ歸路を失ひ吳國へ還る事を得ず進退維よ谷りて狼狽大方さらりき是於て公子光專諸よ謂て曰く此時の機會を失ひなけり臍を噬の後悔あらん求めさ

る時の獲事決して有へからず且光こり眞の王嗣よて此國の王たる事の固より論なし叔父季子の歸り來るも決して吾を廢しのせし因て子よ大事を委ぬるあり專諸か曰く王僚を殺すこり容易よ事の成就すへし母の老たり子の弱し二人の弟の兵よ將として楚を伐楚其後路を絶斷たれり歸るの尤も難るへし今よ方て吳國の形勢の外楚よ困みて國內空虚よ季子の如き骨鯁たる臣下の國の使よて歸り來るよ程あるへし是我を如何ともする事なきの必定なり公子光頓首して曰く光の身の子の身きり百事子の力よ頼なりと四月丙子の日を擇み公子光甲冑の武士を幾人か地を掘て室を爲したる窟室の中へ伏置て酒を具て王僚を酒宴よこりの招きけり王僚諸して公子光の家よ至るよ兵隊を陳せしむる事王宮より光の家まで透間あく立列ね光の家の門戸階陛より左右まで皆王僚の親戚の王僚を夾みて左右よ侍立し皆長き鼓を光していと嚴重よ警衛せしり容易よ手を下すへき所あし斯て酒己よ酣ある時よ及ひ公子光詳りて足疾ありとあして窟室の中よ入り專諸として匕首を魚の炙の中よ置て之を進めしめ既よ王の前よ至りて專諸魚を擧きて見れ出る匕首を取るより早く飛掛て王僚の胸元壓へて之を刺貴きぬ王僚立地よ死けるよ左右の者も亦專諸を鯨の如くあしよけり王の兵隊の王の殺さるゝを聞よりも皆一同よ擾亂しけれり公子光其伏置たる甲士を發し王僚の兵を攻て盡く之を滅し遂よ自立して王と爲る是を闔閭と爲す闔閭乃ち專諸の子を封して以て上卿よ位させけり其後七十餘年よして晋の國よて豫讓の事ありけり

豫讓の晋の國の人なり故に范中行氏より事て名を知らる、所を去て智伯より事けるも智伯の甚た之を尊寵しけり智伯が趙襄子を伐り及ひて趙襄子の韓魏と謀を合せて智伯を滅しけるか智伯の子孫までを滅し盡して其土地を已と韓魏と三つ分して之を領しけるか趙襄子の最智伯を怨み智伯の頭の鬮髀たるも漆ぬり飲器とあし賓客のある毎よ之を設けて其恨の深事を示しけり豫讓の山中へ遁れ逃て曰く嗟吁士の已を知る者の爲よ死し女の已を説ふ者の爲よ容くると今智伯の我を知れり我必ず爲よ讐を報ひ死して地下よ於て智伯を報せざらば則吾が魂魄の愧る事なしとて乃ち名姓を變して刑罪の人となり襄子の宮中よ入て厠の壁を塗つ、も竊よ匕首を挟みて襄子の來るを待付て之を刺殺さんと窺ひけり襄子厠よ如けるか頻も心動のしてけり厠を塗刑人を執て之を問けるも豫讓の懷中よ刀兵を持て居れり曰く智伯の爲よ仇を報ひんと欲せしも今の斯なる上は是非あし我こり智伯の遺臣豫讓ありと曰ふも驚き左右の人々之を誅せんとなしけり襄子か曰く彼の義ある人あり吾僅て之を避けんのみ且智伯亡て後なくして其臣爲よ仇を報ひんと欲す此天下の賢人なりとて卒よ釋して之を去しめけり居と頃くして豫讓の又一身よ漆ぬりて癩病の如く見せ炭を吞て啞の如く聲を傾し形狀を知るへからざるやうも易あして行々市よ乞食して有けるも妻さへ側を行過て我か夫との知らざりしかの豫讓の獨笑して心よ悦ひ今一たび試さんものと其友の家よ至り食物を乞けるも其友大よ怪みてしばし識めて有けるか汝の豫讓よ非す

やと曰れて豫讓の我是なり借も汝の如何して吾と識しと言けれの其友爲よ泣て曰く子の才智を以て質を委て襄子よ臣とし事へむの襄子必ず子を近幸せん其時子乃欲する仇を報する事願ふ易き事ならずやさるを何故斯まで身を殘ひ形を苦めて襄子よ報る事を求めんと欲するの亦難き事ならずや願くの思慮を易よと諫けれの豫讓の聞て子の忠告の極て理あり然れども既よ已よ質を委て人よ臣とし事て之を殺さん事を求むるは是二心を懷きて君よ事ふると云者あり且吾爲す所の事極て難事の我も預て合点せり然るを此する所以の者の將よ以て天下後世の人の臣下と爲て二心を懷て其君よ事る者を愧しめんと思ふか爲ありとる答へけり須く時を待けるも襄子當よ出るとを豫讓の聞知り時至りぬと襄子の當よ過へき路の橋の下よ身を潜して伏れて今や來ると待けるも馳て駟馬の乗車よ打乘て扈從從騎を多く從へ橋の下まで來りしよ馬の頻も驚きしかの襄子臣下よ命すらく此邊は豫讓の居るも疑ひあらしと云ふも從者の之を見付汝の豫讓よあるからんと捕へて襄子の面前へ引居たり是よ於て襄子豫讓を數て曰く子嘗て范中行氏より事しあらずや其時智伯盡く范中行氏を滅せしよ予之か爲よ讐を報せずして反て質を委て智伯の臣下と爲りたり智伯も亦死しぬ而るを子獨り何を以て之か爲よ仇を報せんとして我を窺ふとの深きよや説あらし言へ聞ん豫讓か曰く臣嘗て范中行氏より事へたりしよ范中行氏の皆衆人を以て我を遇ひたり故よ我衆人よて之よ報ひぬ智伯よ至りての一國無雙の國士を以て我れを遇へり我故よ國士



を以て之は報るかり襄子喟然として歎息して泣て曰く嗟呼豫子子の智伯の爲はするとい名も既
も成りぬ而して寡人の子を赦すも亦已も足り子其自ら計を爲せ寡人復子を釋さしとて兵を以て
之を圍せけれの豫讓か曰く臣聞く明主の人の美を掩ひ蔽す而して忠臣の名も死するの義あり前
も君已も臣を寛も赦し玉へり天下君の賢を稱せざるのなし今日の事ハ臣固より誅も伏しなん然
れども願くハ君の衣を請ふて之を撃ち以て讐も報ゆるの意を致しな死すと雖も恨みず敢て望
む所ハありらざるかり敢て腹心を布陳と是も於て襄子大も之を義ありとして使も衣を持せて豫
讓に與へさせけれの豫讓大も悦び劍を投て三たひ躍て之を撃て曰く吾以て地下智伯も報すへし
と遂も劍も伏して自殺せり死するの日趙國の志有る士ハ皆爲も涕泣しけると其後四十餘年よ
して軹の地も聶政の事あり

聶政ハ軹の深井里の人なり人を殺して仇を避け母姉と齊の國も如き牛羊を屠るを以て事と爲し
久くして濮陽の巖仲子韓の哀侯も事へしと韓の宰相俠累と云ふ者と卻あり巖仲子誅を恐れ亡去
て所々も游ハ人の俠果も報ゆへき豪傑を求て齊の國も至りぬ齊人ハ或人聶政ハ勇敢の士あり仇を
避て屠者の間も隠れたりと言けれハ巖仲子之を聞きうハ我望も應する人もやと門も至りて見る
とを請ふて數反ひも及ひ然る後も酒を具自ら聶政ハ母の前へ觴も進め酒酣ある時巖仲子黄金百
鎰を奉て前て聶政ハ母の壽を爲せしかハ聶政驚きて其厚もを怪しみ固く巖仲子も謝して受す巖

仲子固く進けれハ聶政謝して曰く臣幸も老母あり家貧くして他郷も客として游り以爲く狗屠も
て以て且夕甘脆物を得て親を養ふへしと親の供養今もして備もぬ敢て仲子の賜も當らす巖仲
子人も辟て因て聶政ハ爲も言て曰く臣仇ありて報ゆると能す因て諸侯も行游すると衆も其人
を得ず然るも此國も到りて窃も足下の義甚た高きとを聞けり故も百金を進る者ハ將も此金を用
ひて夫人の粗糲の費用と爲し以て足下の驢を交るとを得んと豈敢て求め望む事あらんや聶政ハ
曰く臣の志を降し身を辱め布井も居て屠する所以の者ハ徒も以て老母を養ふを幸ふのみ老母の
在ん限ハ身未だ敢て人も一命を許さるなり巖仲子固く金を讓與へしかとも聶政遂も受肯す然
れとも巖仲子卒も賓主の禮を備て去りもけり之を久して聶政の老母死しけり既も已も葬りの喪
服も除きて後聶政ハ曰く嗟乎政ハ乃ち市井の人もして刀を鼓して獸を屠る者なりさるを巖仲子
ハ諸侯の卿相を以て千里を遠しとせず車騎を枉て臣も交る臣の之を待所以ハ至て淺く鮮ありき
未だ大功の以て稱すへき者あらず而も巖仲子百金を奉て親の壽をなしたり我受すと雖も然れど
も是も徒も深く政を知る人も曰ふへし夫賢者感忿睡眊の意を以てして吾も如き究僻の人を親み
信して來れるを政獨嚙然として己も事を得んや且前日政を要せしも政徒く辞るも老母の首を以
てせり老母も今年を以て終たり政將も今より己を知る者の爲も用らるゝこり本望かれとて遂も
旅装ひして西の方濮陽の地も至り巖仲子も見て曰く前日君も許さる所以の者ハ徒老母の在る

故あり今不幸にして天年を以て終る仲子の仇を報ひんと欲する所の者誰あるや速に知らま
 玉へ請ふ事に従ふとを得て君を快しめん嚴仲子再拜して其義心を謝し具に告て曰く臣の仇
 とする者の韓の宰相俠累なり俠累は又韓の君の季父なれり家族盛にして多く居處の兵衛甚だ嚴
 よ設けあり臣は是まで幾回か人よ託して刺しめんと欲せしかども衆終に能就得る者なし今足下幸
 よして棄す請ふ其車騎壯士の足下の輔翼と爲る者を益さん聶政か曰く韓と衛と相去と中間甚た
 遠からず今一國の宰相を殺す其相の又國君の親族なり此其勢ひ多勢を以てすへからず多勢なれ
 り得失を生ずる事無き能す得失を生ずる時の語言泄易し語言泄する時は是韓國擧て仲子と信とな
 りさん豈殆からずやと遂に車騎人徒を謝りて乃ち辭乞して獨行し劍を杖きて韓の國へ至りけ
 り偕て韓の宰相俠累の斯る事と多しも知らず威儀嚴重相府の上を寛く坐し兵戟と持て側
 侍衛する者甚だ衆く數百人と見へよけり聶政突然として直に馳入り俠累を搏し之を刺殺し
 たりけるより左右兵衛の者すの乱暴と云ふ問もあらせす取圍て撃んとするを聶政更に近す大
 呼て斬て廻り左右前後に驅散せり殺傷する者數十人一府中の騷擾の鼎の沸か如くあり聶政間を
 得てければ因て自ら面を皮ひき眼を扶り自ら屠りて腸と引出し遂に息絶えけり韓よて聶政
 の何人よて如何ある事情のあるより斯る事に及ひしか更に其故由の解せされり其屍を取て市
 よ暴し購ひ問とも誰の子たる事を知る者なく其探偵は困惑し札を懸て購ひ求め能相俠累を殺せ

し者の姓名里居を告る者あらん千金を予んところ定めければとも幾日を過るも知る者なく空しく
 時日を送りけり爰に聶政の姉なりける榮と云ふ者人の言ける韓の宰相俠累を刺殺したる者あ
 りて賊を得ず國は於て其名姓を知らず其尸を市に暴し之を千金の賞を懸て求むとの事を聞て大
 よ驚き乃ち於邑ひて曰ける其是の吾弟よ非るか嗟乎嚴仲子能吾弟の精神を識得たり知己とこ
 ろ言へければ立地は旅装して韓國の都市へ如て其尸を權するよ紛ふかたなき聶政なれり屍よ
 伏して哭し泣と極めて哀かりけるか聽て守卒は打向ひ是り軹の深井里の所謂聶政と云者ありと
 市は行者及び諸の衆人皆曰く此人吾國の宰相俠公を暴虐せり故に王懸て其名姓を知ると千金
 よ購ひ婦人此事を聞さるか何故來て之と識とするや榮之は應て曰く其事は我已之を聞けり然
 れども政か汚辱を蒙り自ら身を市街の賤き地に棄たる者老母幸に恙なく妾か未だ嫁りせざり
 しか爲かりき老母既に天年を終て下世ぬ妾は己よ夫よ嫁したり嚴仲子の察して吾弟を困汚た
 る屠狗の中より採擧て交を結ひて恩澤殊に厚りき奈何すへけんや士は己を知る者の爲に死すと
 今乃ち妾か尙在るを以ての故に重て面を皮はき眼を決自刑して以て妾か従ひて其罪に坐せんと
 を恐れしなり妾如何り身を殺すの誅を恐れ憚かりて終に賢弟の豪傑の名譽を滅さんやとて大
 よ韓の都の市人を驚かし乃ち大に天を呼者三たひよまて於邑悲哀て政の尸の旁に死しけり
 晋楚齊衛の國々之を聞て皆曰ける獨政の能するの處は非す其姉よ及て亦列女と云ふへ

けれ卿又政又誠其姉は需忍の志あく骸を暴すの難を重からず必ず險を絶ると千里又して以て其名を弟と列ね姉弟俱は韓の市に僂せらるゝを知らしめ亦未だ必ず敢て身を以て嚴仲子に許さゝるならん嚴仲子も亦人を知り能く士を得ると云ふへし其後二百二十餘年又して秦は荆軻の事あり

荆軻は衛國の人あり其先祖は齊人又して衛に徙れり衛人之を慶卿と謂り而して燕に之を燕人之を荆卿と謂ふ荆卿讀書擊劍を好み術を以て衛の元君に説し衛の元君用ひす其後秦魏を伐ち東郡を置き衛の元君の支屬を野王の地に徙せり荆軻嘗て游て楡以を過て蓋聶と劍法を論せし蓋聶怒て之を目けり荆軻意とせずして出去りたり人或は言ふ復ひ荆卿を召へど蓋聶か曰く曩者吾與又劍を論せし又相稱のさる者あり吾之を目みたれは彼之を知りしからん試み往て見るへし宜しく去りしならん敢て此處に留らし使をして之か主人の家を往しめし蓋聶か曰く如く荆卿は己を駕して楡以の地を去りし使者還て報しければ蓋聶か曰く固より去りしからん吾曩者よ目て之と攝たりと荆軻邯鄲に游ひし魯勾踐荆軻と博を打ち道を争ふ魯勾踐怒て荆軻を叱ひけれども荆軻黙して逃去りて遂に復魯勾踐と會せさりき荆軻既燕の國に至り燕の狗屠人及び善筑を撃高漸離と云ふ者を愛し荆軻素酒を嗜みければ日又狗屠人及び高漸離と燕の市街に酒を飲て游ひ酒酣なる以往に高漸離筑を撃ち荆軻和て市中に歌ひ相樂み己として相送は泣旁よ

人無きか如し荆軻酒人と游と雖も然れども其人と爲り沈深て書を好み其游所の諸侯は盡く其賢豪長者と相結ふ其燕の國へ行く燕の處士田光先生も亦能之を待ひ其庸の人よあらざることを知りりよけり居と頃くありて燕の太子丹秦に質たりしか亡て燕に歸るよ會す燕の太子丹の故嘗て趙よ質とかりたりし時秦王政趙に往れたり其少なる時丹と驩ひ愛せしよ政立て秦王と爲るよ及て丹秦國よ質と爲れり秦王の太子丹を遇ふと禮義を善せず故に丹怨て燕へ亡歸り歸て爲る秦王よ報る人を求めしよ國小よして力能す其後秦は兵を山東よ出して以て齊楚三晋を伐ち稍く諸侯を蠶食し且よ燕を伐んとするよ燕の君臣皆禍の至るとを恐ければ太子丹之を憂ひ其傳鞠武よ如何せんと問けるよ鞠武か曰く秦の土地天下に遍く威力韓魏趙氏を脅せり北よ甘泉谷口の固めあり南よ涇渭の沃巴漢の饒を擅し隴蜀の山を右よし關穀の險を左よせり民衆くして士勵しく兵革餘あり意出る所ある時長城の南易水の北に未だ定る所有らざるあり奈何り陵辱るの怨を以て逆隣に批と欲するや丹か曰く然らば則何よ由て善らん鞠武か曰く此大事あり請ふ入て之を圖らんと居間程なく秦の大將樊於期罪を秦王よ得て亡て燕へ來りけるを太子受納て之を舍しけるよ鞠武諫て曰く不可あり夫秦の暴を以てして怒を燕に積り實に寒心へき事あるよ又況て樊將軍と合すをや是を肉を委て餓たる虎の蹊に當ると謂者よて禍必ず振ひかたし管仲晏子有りとても之か謀を爲す事能はざらん願くは太子疾々樊將軍を遣放ちて匈奴に入れて口を滅し請

らく西の方三晋^{しん}は約し南の方齊楚^つを連ね北の方單于^{せんう}は講ひ其後より圖るへけれ太子の曰太
 傅の計日を曠くし久きを彌り心悞然として恐く須臾の間ある事能はじ且此のみ非ず樊將軍
 天下の中は窮し困み身を丹に歸したり丹終は強秦に迫を以てして哀み憐む所の交を棄て之を匈
 奴に置し恐す是固より丹か命數卒るの時と覺悟せり願くは太傅更に之を思慮せよ鞠武か曰く夫
 危きとを行ひて安とを求めんと欲し禍を造て福を求めると計淺くして怨深し樊將軍一人の後交を
 連ね結て國家の大なる害を願す此れ怨を資て福を助くと謂者なり夫鴻毛を以て爐炭の上は燎の
 必ず容易は事あるへし且鵬鷲の如き秦を以て怨暴の怒を行ふ時燕の如き豈道は足んや當國
 は田先生と云者あり其人と爲り智深くして勇沈あり與に謀り玉の如何太子の曰く願くは太傅
 は因て交を田先生に得へきや鞠武か曰く敬みて諾しぬ出て田先生を見へて太子の國事を先生に
 圖る事を願ふと道り田光か曰く敬みて教を奉とて乃ち太子の宮に造りけれ太子逢迎へて却行
 りして導を爲し跪きて席上を蔽ひ田先生座定まる左右は人無し太子席を避て請て曰く燕秦兩な
 から立す先生の意を留むる事を願ふかり田光か曰く臣聞く騏驎盛壯なる時一日にして馳する
 と千里其衰老よ至ては驚馬之よ先たつ今太子は光か盛壯の時を聞て臣の精神の已は消亡る事
 を知り玉のす然と雖も光敢て以て國事を圖らざらんや臣か善する所は荆卿と曰ふ者あり使むへ
 し太子の曰く願くは先生は因て交を荆卿に結ふ事を得ん可ならんか田光か曰く敬て諾せりとて

即時は起て趨出けれ太子送て門に至り戒て曰く丹の報せし所先生の言ふ所の者國の大事を
 り願くは先生泄す事勿れ田光伏て笑て曰く諾せりと倭行て荆卿を見て曰く光か子と相善事
 は燕國の人、知らざる事なし今太子は光か盛壯の時を聞て吾か形の己は遠ざる事知らず幸
 よして吾も教へて曰れし燕と秦との兩かから立す願くは意を留めよと請れたり光竊し自ら外
 よせず足下の事を太子に言たり願くは足下太子の爲は其宮に過れ荆卿か曰く謹みて數を奉ん田光
 か曰く吾之を聞く長者たる者行ひを爲して人疑を抱しめすと今太子光に告げて曰く言ふ所の
 者國の大事なり願くは先生泄す事勿れと是太子光を疑ふなり夫行を爲して人に疑ひを抱かし
 むるは節俠は非るかりと自殺して以て荆卿を激せんと欲し乃ち曰く願くは足下急よ太子は過
 りて光の己は死し其言を泄さるるを明と言へとて因て遂は自ら刎ねて死せり荆軻遂は太子を見
 て田光か己は死すとて光の言を致しけれ太子再拜して跪つき膝行て涕を流し須くありて後
 言て曰く丹か田先生は言ふ事母れと誠むる所以の者以て大事の謀を成んと欲すれはなり今田
 先生死を以て言さるるを明せり豈丹の心からんや荆軻坐定る太子席を避て頓首して曰く田先生
 丹の不肖を知らず前よ至て敢て道所有を得せしむるは此天の燕を哀みて其孤を棄る所以あり
 今秦貪利の心ありて其欲足と有へからず天下の土地を盡し海内の君王を臣とするよ非れは其心
 麻たりとせず今秦己は韓王を虜にして盡く其地を納ぬ又兵を擧て南の方の楚を伐ち北の方の趙

臨み王翦數十方の衆を將として漳野の地を距て李信太原雲中に出趙秦を支ると能されぬ必ず
 入て臣とあらん入て臣となる時の禍ひ燕に至らん燕の小國にして弱く數々兵を困む今計は國勢
 秦に當るよ足す諸侯秦に服せし敢て合從すると有る事なし丹の私計愚よし以爲く誠天下の勇士
 を得て秦に使とし闕し重利を以てせし秦王貪れり其勢ひ必ず願ふ所を得んと誠秦王を劫かす事
 を得て悉く諸侯の侵地を反す事曹沫の齊の桓公との若くならしめぬ則ち大に善し則ち不可ある
 時の因て之を刺殺さん彼秦の大將兵權を外し擅りして國內に亂有りあり君臣相疑はん其間を
 以て諸侯合從する事を得し其秦を破る事必定なり此丹の上願にして命を委する所を知らず唯荆
 卿意を留めて聽れよ是時しし詞の塗絶しか久しくあてて荆卿の曰く此の一國の大事なり臣驚
 下として任使を任さるるを恐るありと辞するよ太子前て頓首えて固く讓ると母れと請ふて後許
 諾しけり是よ於て荆卿と尊りて上卿と爲し上舍し合し太子曰よ門下は造り太牢の饌具を以て之
 ん献し異物を具へ間よ車騎美女を進め荆卿の欲し思ふ所を恣にして以て其意は順ひ適ひけり之
 を久くして荆卿秦へ行意の有さる内よ秦の大將王翦趙を破り趙王を虜にして盡く其地を敗入兵
 を進て北の方地を略て南の方燕の國界まで至りけれぬ太子丹恐懼れ乃ち荆卿を請て曰く秦の兵
 且暮よ易水を渡りなれ長く足下よ侍せんと欲すと雖も豈得へけんや荆卿か曰く太子の言微とも
 臣此事を請んと願ひ居たり今秦國へ行とも信母れぬ決して秦の親まじ夫樊於期の秦王其首を

金千斤邑万家を購へり誠樊將軍の首と燕の督亢の地圖とを得て秦王よ奉獻せし秦王必ず悦ひて
 臣を見ん臣乃ち以て報すると有るとを得ん太子の曰く樊將軍究し困みて丹の家へ歸したり丹已
 の私を以て長者の意を傷るよ忍れぬ願くは足下更に別よ之と思慮せよ荆卿太子の樊將軍を殺
 すよ忍さるるを知るものから乃遂よ私よ樊於期を見て曰く秦の將軍を遇ふと尤深しと謂へし父
 母宗族皆戮没せらる今聞く將軍の首を金千斤邑万家を購ふと將よ之を奈何せんとするや於期天
 を仰て太息し涕を流して曰く於期毎よ之と念ひ常よ骨髓を痛しめたり願ふ計の出す所を知らさ
 る耳荆卿か曰く今一言以て燕國の患を解將軍の仇を報ゆへき者あり將軍何如とかするや於期乃
 ち前て曰く之を爲し如何ある計りや荆卿か曰く願くは將軍の首を得て以て秦王に獻せんさらん
 秦王必ず喜て臣を見ん臣其時左の手よ秦王の袖を把へ右の手よ其胸を搥ん然する時の將軍の
 仇報て燕國凌辱らるの愧除かん將軍豈意あるか樊於期偏袒よ成腕を搦て進て曰く是臣の日夜齒
 を切り心を腐すなり乃ち今教を聞事を得て悦び限あしとて遂よ自到けり太子之を聞て馳往て屍
 よ伏して哭する事極て哀し既よ已よ奈何ともすへからず乃ち遂よ樊於期の首を函よ盛て之を封
 し是よ於て太子豫め天下の利七首を求めけるよ趙人徐夫人と云者の七首を得て之を百金よ買取
 り工をして藥を以て之よ烽させ以て人を試し見るよ血縷の如く出ると其人立地よ死せざる者あ
 し乃ち装して荆卿を秦へ遣事よ定めけり燕國よ一個の勇士あり秦舞陽と曰ふ年十三よして人を

殺せし人々畏て敢て忤視る者なかりき此人を以て副使となしける荆軻待て與ふ俱よせんと欲する者あり其人遠く居て未だ來さるる治行已に整ひて須し猶豫て未だ發せざりしか太子之を運しとし其改め悔るか疑かひ乃ち復請て曰く日已盡ぬ 卿豈意あるか丹請ふ先秦舞陽を遣ふん荆軻怒て太子を叱て曰く何り太子の遣と急くとう往て反らざる者の秦舞陽豎子あり且一匕首を提て測られざるの強秦よ入る僕の留る所以の者の吾客を待て與ふ俱よせんとす今太子之を運しとせり請ふ辭決とんと遂に發す太子及び賓客其事を知る者の皆喪禮の如く白き衣冠よて送り行き易水の上よ至り既よ祖道して酒宴よ及び高漸離筑を撃ち荆軻和して歌ひ變徴の調子を奏しけれい士皆涙を垂て涕泣ぬ又前て歌て曰く風蕭々として易水寒し壯士一たひ去て復還らずと復更めて羽の調子を奏して忼慨せしかい士皆目を瞋し髮の毛盡く上て冠を捐ける是よ於て荆軻車よ就て去り終よ已に顧みず遂よ秦よ至り馳て千金の資幣物を持って厚く秦王の寵臣中庶子の官ある蒙嘉よ遣る嘉爲よ先秦王よ言て曰く燕王誠よ大王の威光よ振ひ怖れ敢て兵を擧て以て軍更よ逆す國を擧て國內の臣とあり諸侯の列よ比ひ貢職を給ると郡縣の如くよして先王の宗廟を奉守とを得んと願ひ恐懼して敢て自ら陳せず謹て樊於期の頭を斬及び燕の督亢の地圖を獻し函よて封したり燕王拜して庭庭よ送り使者を以て大王よ以聞あくるあり唯大王命する所のまよよせん秦王之を聞て大よ喜ひ乃ち朝服して九賓を設け燕の使者荆軻を咸陽宮よ見る荆軻樊於期の

頭の入たる山を奉け秦舞陽地圖の匣を奉け次第を以て進み出て陸よ至るよ秦舞陽顔色變して振へ恐れけれい秦の群臣之を怪みけり荆軻顧みて秦舞陽を笑て前て謝して曰く北番蠻夷の鄙人未だ嘗て天子の威嚴を見ず故に振懼たるあり願ひ大王少しく之よ假借て使を前よ畢とを得せしめよ秦王軻よ謂て曰く舞陽の持たる地圖を取來れ軻既よ圖を取て之を奏す秦王圖を發く圖窮て匕首見のれたり因て左の手よ秦王の袖を把て右の手よ匕首を持って之を搵す未だ身よ至らず秦王驚き自ら引て起上りけれい荆軻の把し所の秦王の袖絶たり秦王劔を抜んとするよ劔長くして室を放れず時よ惶恐よして劔の室堅し立地よ拔へからず荆軻秦王を逐けれい秦王柱を環て走り群臣皆愕き卒よ不意よ起り盡く度を失ひけり秦の法式よ群臣の殿上よ侍坐する者の尺寸の兵を持つとを得ず諸郎中の兵を執て皆殿下よ隙り居るも詔ありて之を召よ非れの殿上よ上るとを得す急なる時よ方て殿下の兵を召よ及いす故を以て荆軻乃ち秦王を逐て惶急なるも以て軻を擊とちし左右の近臣手を以て共よ之を搵よけり是時侍醫夏無且其奉する所の藥囊を以て軻刺よ提けたり秦王方よ柱と環て走る殆んど惶急よして爲す所を知らず左右乃ち曰く王劔を負て拔玉へと秦王劔を負て逐よ拔て荆軻を擊て其左の股を斷よけり荆軻廢す乃ち匕首を引て秦王よ搵ちけれとも中らすして銅の柱へ撃込たり秦王復軻を擊けるよ荆軻此時已よ八ヶ所の創を被り自ら事乃就さることを知り柱よ倚て笑ひ箕踞て罵りて曰く事の成さる所以の者の生之を劫し必ず約契を

得て以て太子を報せんと思へりなり茲於て左右既も前て軻を殺しける秦王怡ひさると良久しかりき已よして功を論し群臣を賞し及び坐も當する者各々差わりて夏無且よの黄金二百鎰を賜りて曰く無且我を愛して乃ち藥囊を以て荆軻を提けたりと稱られけり茲も於て秦王大に怒て益々兵を發して趙に詣らしめ王翦か軍を召して以て燕を伐たしむ十月にして薊城を抜く燕王喜太子丹等盡く其精兵を率て東の方遼東の地を保へたり秦の將軍李信追撃すると甚た急あり代王嘉燕王を遣て曰く秦の尤も燕を追と急ある所以の者の太子丹の故を以てなり今王誠丹を殺して之を秦王に獻せし秦王必ず兵を解て社稷幸も血食するを得ん其後李信丹を追ふ丹衍水の中も匿れけり燕王喜乃ち使を遣して太子丹を斬しめ之を秦王に獻せんと欲す秦復兵を進て之を攻む後五年秦卒に燕を滅して燕王喜を虜せり其明年秦天下を弁せ号を立て皇帝と爲る是も於て秦太子丹荆軻の客を逐けれの皆夫々へ亡散けり高漸離の名姓を變して人の爲も庸保して匿れて宋子の地も耕作しけり之を久くして耕作も苦みけるか一日其家の堂上の客筑を撃て聞て傍徨て去ると能す毎も言を出して曰く彼筑を撃も善所あり善らざる所ありと評しけれの從者此言を其主人も告て曰く彼庸保反て音を知りて窃も其是非を言りと家丈人召して前て筑を撃しむ一坐の人も善しと稱し酒を賜りけり而るも高漸離念ふも久しく隠れて畏約窮時なしと乃ち退て其装匣中の筑と善衣裳とを出し容貌を更めて前み出けれの舉座の客皆大に驚き下りて與も抗禮して以て

上客と爲し筑を撃て歌ひしむ客涕を流して去らざる者なし宋子の地もて相傳て之を客とせり秦の始皇も聞す秦の始皇召て見しも人の識者有て乃ち曰く彼の高漸離なりと秦の始皇其善筑を撃ても惜み重て之を赦し乃ち其目を瞶し筑を撃しむるも未だ嘗て善と稱せずんもあらず稍く益々之を近く高漸離鉛を以て筑の中も置き復進て始皇も近くとを得て之を朴けれも中ず是も於て遂も誅せらる始皇之も爲も身を終て諸侯の人を近けす魯句踐已も荆軻の秦王を刺を聞き私も曰く嗟乎惜ひか其刺劍の術を知らざるや甚し吾か人を知さると藝者も吾之を叱せし時の彼乃ち我を以て人も非すとあせしならん

太夫か曰く世言ふ荆軻其太子丹の命を稱するも天粟を雨らし馬角を生ずるなりと太た過たり又言ふ荆軻秦王を傷たりと皆非なり始め公孫季功。董生。夏無且と遊ひ具も其事を知り余か爲も之を道ること是の如し曹沫より荆軻も至まで五人此其義或も成り或も成す然れども其意を立るとの較然として其志を欺す名後世も垂たるも豈妄あらんや

李斯列傳第二十七

李斯の楚の上蔡の人なり年少き時郡の小吏と爲る吏舎の廁の中の鼠不潔を食ひ人犬も近き數々驚き恐るゝを見る斯倉も入る倉中の鼠積たる粟を食ひ大廡の下も居て人犬の愛を見ざるを觀る時も於て歎息して曰く人の賢不肖の譬も鼠の如し自ら處る所も在るのみ乃ち荀卿も從ひて帝王

の術を學び學已も成れり度も楚王の事も足す而して六國皆弱を爲し功を建へき者なし西の方
 秦も入らんと欲し荀卿も辭して曰く斯聞く時を得れり怠ると無れと今萬乘方も争ふの時よし
 て游客事を主とれり今秦王天下を吞帝と稱して治んと欲す此布衣馳驅て功名を建るの時よし
 游説者の秋と謂へし卑賤位も處て計爲さる者禽獸の肉を視て食ふとを知るのみと同じ事よ
 て人面よしして強行き者のみ故も詭の卑賤より大なるもの莫くして悲の窮困より甚きもの莫し久
 しく卑賤の位困苦の地も處て世を非て利を惡み自ら無爲も託て高しとする者士の情も非る
 なり故も斯將も西の方秦王も説んとすと秦も至しし莊襄王の卒するも會し李斯乃ち求て秦の宰
 相文信侯呂不韋の舍人とある不韋之を賢かりときて任して以て郎とせり李斯因て以て説とを得
 たり秦王も説て曰く胥人の其後を去ふなり大功を成す者の瑕釁も因て遂も之を忍て剪滅も在り
 昔者秦の穆公の覇たる終も東の方六國を并せざる者何りや諸侯尙衆く周室未だ衰へず故も五
 伯迭も興り更も周室を尊とふ秦の孝公より以來周の天子卑微へ諸侯相兼關東六國と爲れり秦の
 勝も乘て諸侯を役使と蓋し六世も及ひたり今諸侯秦に服すると譬も郡縣の如し夫秦の強きと大
 王の賢なるを以て其易きと竈の上を掃除するか如し以て諸侯を滅し帝業を成し天下一統を爲
 すも足り此万世の一時なり今怠りて急も就されり諸侯復強く相聚りて從を約しなり黃帝の賢有
 りといへども并ると能はざるなり秦王乃ち斯を拜して長史となし其計を聞き陰も謀士を遣り金

玉を齎し持しめて以て諸侯も游説せしめ諸侯の名士下すも賤を以てすへき者の厚く遣りて之も
 結ひ肯せざる者の利劍を以て之を暗殺し其君臣の計を離し其後秦王乃ち其良將も命して其後も
 隨ひて之を伐けり秦王斯を拜して客卿と爲しけり韓人鄭國來て秦を間し注溉渠を作らせ人工を
 費さしめ東伐せさらしめんとするも會し已もして事覺れたり秦の宗室大臣皆秦王も言て曰く諸
 侯の人來て秦も事ふる者大抵其本國の主の爲も秦も間者となりて游仕する耳請ふ一切も客臣
 と逐んと評議定り李斯も議せられて放逐の中もあり李斯乃ち上書して曰く臣聞く史客を逐とを
 議すと竊も以爲く過り昔者繆公士を求て西の由余を成も取り東の百里奚を宛も得蹇叔を宋も迎
 へ丕豹公孫支を晋も求む此五人の者の秦も産すして繆公之を用て國を并すと二十遂も西成も覇
 たり孝公商鞅の法を用ひ風を移し俗を易民以て殷盛國以て富強百姓用を樂み諸侯親服し楚魏の
 師を獲て地を擧ると千里今も至て治り強し惠王張儀の計を用ひ三川の地を抜き西の巴蜀を并せ
 北の上郡を收め南の漢中を取り九夷を包ね鄢郢を制し東の成阜の險も據り膏腴の地を割き遂も
 六國の從を散し之をして西面して秦も事へしむ功の施し今も到り昭王范雎を得て穰侯を廢して
 華陽を逐ひ公室を強くし私門を杜き諸侯を蠶食して帝業を成しむ此四君の者皆客の功を以てせ
 り此も由て之を觀れり客何り秦も負んや向も四君をして客を却けて内す土を疏して用ひさらし
 めり是國も富利の實なくして秦も強大の名無ら使るなり今陛下昆山の玉を致し隨和の寶あり明

月の珠を垂れ太阿の劍を服し緹離の馬を乗り翠鳳の旗を建て靈龜の鼓を樹つ此數寶の秦一をも生せず而して陛下之を説ふの何うや秦國の生ずる所と必として然る後可ある時は是夜光の璧の朝廷を飾す犀象の器の玩好と爲さず鄭衛の女の後室を充すして駿良駉騁の外廐を實す江南の金錫の用を爲さず西蜀の青丹の采を爲さず後室を飾り下陳を充て心意を娛め耳目を説ふす所以の者必ず出でて然る後可ありとする時は是宛珠の簪傳環の阿綰の衣錦繡の飾前を進ずして俗は隨ひて雅化し佳冶窈窕の趙女側立さるなり夫鬢を擊瓶を叩き箏を彈し牌を搏て歌呼鳴々として耳目を快する者の眞は秦の聲あり鄭衛桑間昭虞武衆の異國の樂なり今鬢を擊瓶を叩く事を棄て鄭衛を就き箏を彈事を退けて昭虞を取る是の如き者の何うや快意前より當り觀る適ふのみ今人を取るの則ち然らず可否を問す曲直を論せず秦は非る者の去て客たる者の逐ふと然る時は是重する所の者の色樂珠玉は在て輕んずる所の者の人民は在るなり此海内は跨り諸侯を制する所以の術より非るあり臣聞く地廣き者の粟多く國大なる者の人衆く兵強時の士勇なりと是を以て太山の土壤を讓す故に能其大を成せり河海の細流を擇む故に能其深きと爲就せり王の衆庶を却けず故に能其徳を明かす是を以て地四方と無く民異國とくなく四時美を充て鬼神福を致す此五帝三王の敵なき所以なり今乃ち黔首を棄て敵國の資とし賓客を却けて以て諸侯を業け天下の士は敢て西に向ひず足を裹て秦に入らざらしむるの此所謂寇兵を藉て盜糧を齎す者あり夫

物秦は産せずして寶とすへき者多く士秦は産せずして忠と願ふ者衆し今客を逐て以て敵國を資け民を損して以て讎を益し内自ら虚くして外怨を諸侯に樹つ國の危き事無らん事を求むるも得へからざるありと秦王乃ち逐容の令を除き李斯の官を復し卒に其計謀を用ひ官廷尉に至りけり二十餘年竟り天下を并せ主を尊て皇帝と爲し斯を以て丞相と爲す郡縣の城を夷け其兵刃を濼消し復用ひざることを示す秦は尺土の封侯なく子弟を立し王と爲し功臣を諸侯たらざらしむるの後又戦攻の患へ無からざるか故なり始皇三十四年咸陽宮に置酒ありし時博士僕射周青臣等始皇の威徳を頌稱しけるに齊人淳于越進て諫て曰く殷周の王たる千餘歳子弟功臣を封し自ら支輔とさせり今陛下海内を有ちて子弟匹夫たり卒に田常六卿の患有らば臣は輔弼を乞ふ何を以て相救はんや事古へを師とせずして能長久なる者の聞所は非るあり今青臣等面り諛ひて以て陛下れ過を重ぬ忠臣より非るなり始皇其議を丞相に下して議せしめけるに丞相李斯其説を譲りとして其辭を細け乃ち上書して曰く古者天下散乱して能相一ある者なし是を以て諸侯並ひ作る語皆古へを道て今を害し虚言を飾りて以て實を乱る人其私學する所を善として以て上の建てる法度を非る今陛下天下を并せ有ち白黒を辨して一尊の皇帝を定むるを私學をもて乃ち相與に法教の制と非る令下ると聞けり即ち各々其私學を以て之を議し入る時の心は非り出る時の巷に議し主を非て名を爲し趣を異にして以て高しと爲し群下の弟子を率て以て謗を造す此如と禁制せされん主

の術を學び學已も成れり度も楚王の事ふも足す而して六國皆弱を爲し功を建へき者なし西の方
 秦も入らんと欲し荀卿も辭して曰く斯聞く時を得れり怠ると無れと今萬乘方も争ふの時よし
 て游客事を主とれり今秦王天下を吞帝と稱して治んと欲す此布衣馳驅て功名を建るの時よし
 游説者の秋と謂へし卑賤位も處て計爲さる者禽獸の肉を視て食ふとを知るのみと同じ事よ
 て人面よしして強行き者のみ故も詭ひ卑賤より大なるもの莫くして悲の窮困より甚きもの莫し久
 しく卑賤の位困苦の地も處て世を非て利を惡み自ら無爲も託て高しとする者士の情よ非る
 なり故も斯將も西の方秦王も説んとすと秦も至ししと莊襄王の卒するも會し李斯乃ち求て秦の宰
 相文信侯呂不韋の舍人とある不韋之を賢かりとまて任して以て郎とせり李斯因て以て説とを得
 たり秦王も説て曰く胥人の其幾を去ふなり大功を成す者の瑕釐も因て遂も之を忍て剪滅も在り
 昔者秦の穆公の覇たる終も東の方六國を并せざる者何りや諸侯尙衆く周室未だ衰へず故も五
 伯迭も興り更も周室を尊とふ秦の孝公より以來周の天子卑微へ諸侯相兼關東六國と爲れり秦の
 勝も乘て諸侯を役使と蓋し六世も及ひたり今諸侯秦に服すると譬も郡縣の如し夫秦の強きと大
 王の賢なることを以て其易きと寵の上を掃除するか如し以て諸侯を滅し帝業を成し天下一統を爲
 すも足り此万世の一時なり今怠りて急も就されり諸侯復強く相聚りて從を約しなれり黃帝の賢有
 りといへとも并ると能はざるなり秦王乃ち斯を拜して長史となし其計を聞き陰も謀士を遣り金

玉を齎し持しめて以て諸侯も游説せしめ諸侯の名士下すも賤を以てすへき者厚く遣りて之も
 結ひ肯せざる者の利劍を以て之を暗殺し其君臣の計を離し其後秦王乃ち其良將も命して其後も
 隨ひて之を伐けり秦王斯を拜して客卿と爲しけり韓人鄭國來て秦を間し注溉渠を作らせ人工を
 費さしめ東伐せさらしめんとするも會し已もして事覺れたり秦の宗室大臣皆秦王も言て曰く諸
 侯の人來て秦も事ふる者大抵其本國の主の爲も秦も間者となりて游仕する耳請ふ一切も客臣
 と逐んと評議定り李斯も議せられて放逐の中もあり李斯乃ち上書して曰く臣聞く史客を逐とを
 議すと竊も以爲く過り昔者繆公士を求て西の由余を成も取り東の百里奚を宛も得蹇叔を宋も迎
 へ丕豹公孫支を晋も求む此五人の者の秦も産すして繆公之を用て國を并すと二十逐も西成も覇
 たり孝公商鞅の法を用ひ風を移し俗を易民以て殷盛國以て富強百姓用を樂み諸侯親服し楚魏の
 師も獲て地を擧ると千里今も至て治り強し惠王張儀の計を用ひ三川の地を抜き西の巴蜀を并せ
 北の上郡を收め南の漢中を取り九夷を包ね鄢郢を制し東の成阜の險も據り膏腴の地を割き遂も
 六國の從を散し之をして西面して秦も事へしむ功の施し今も到り昭王范雎を得て穰侯を廢して
 華陽を逐ひ公室を強くし私門を杜き諸侯を蠶食して帝業を成しむ此四君の者皆客の功を以てせ
 り此も由て之を觀れり客何り秦も負んや向も四君をして客を却けて内す土を疏して用ひさらし
 めり是國も富利の實なくして秦も強大の名無ら使るなり今陛下昆山の玉を致し隨和の寶あり明

月の珠を垂れ太阿の劔を服し織離の馬も乗り翠鳳の旗を建て靈龜の鼓を樹つ此數寶の秦一をも生せず而して陛下之を説ふ何りや秦國の生ずる所と必として然る後可ある時は是夜光の璧の朝廷に飾す犀象の器の玩好と爲さず鄭衛の女の後室も充ずして駿良駄騾の外廐も實す江南の金錫の用を爲さず西蜀の青丹の采を爲さず後室も飾り下陳も充て心意を娛め耳目を説ひす所以の者必ず出でて然る後可ありとする時は是宛珠の簪傳璣の阿綰の衣錦繡の飾前も進ずして俗も隨ひて雅化し佳冶窈窕の趙女側も立さるなり夫鬢を擊瓶を叩き箏を彈し鞞を擲て歌呼鳴々として耳目を快する者の眞も秦の聲あり鄭衛桑間昭虞武衆の異國の樂なり今鬢を擊瓶を叩く事を棄て鄭衛も就き箏を彈事を退けて昭虞を取る是の如き者の何りや快意前も當り觀も適ふのみ今人を取るの則ち然らず可否を問す曲直を論せず秦も非る者の去て客たる者の逐ふと然る時は是重する所の者の色樂珠玉も在て輕んずる所の者の人民も在るなり此海内も跨り諸侯を制する所の術も非るあり臣聞く地廣き者の粟多く國大なる者の人衆く兵強時の士勇なりと是を以て太山の土壤を讓す故も能其大を成せり河海の細流を擇ひす故も能其深きと爲就せり王の衆庶を却けす故も能其徳を明かす是を以て地四方と無く民異國とく四時美を充て鬼神福を致す此五帝三王の敵なき所以なり今乃ち黔首を棄て敵國の資とし賓客を却けて以て諸侯を業け天下の士も敢て西も向はず足を裹て秦も入らざらしむるの此所謂寇も兵を藉て盜も糧を齎す者あり夫

物秦も産せずして寶とすへき者多く士秦も産せずして忠と願ふ者衆し今客を逐て以て敵國を資け民を損して以て讎を益し内自ら虚くして外怨を諸侯も樹つ國の危き事無らん事を求むるも得へからざるありと秦王乃ち逐容の令を除き李斯の官を復し卒も其計謀を用ひ官廷尉も至りけり二十餘年竟も天下を并せ主を尊て皇帝と爲し斯を以て丞相と爲す郡縣の城を夷け其兵刃を濤消し復用ひさることを示す秦も尺土の封侯なく子弟を立し王と爲し功臣を諸侯たらざらしむるの後も戦攻の患へ無からざるか故なり始皇三十四年咸陽宮も置酒ありし時博士僕射周青臣等始皇の威徳を頌稱しけるも齊人淳于越進て諫て曰く殷周の王たる千餘歳子弟功臣を封し自ら支輔とさせり今陛下海内を有ちて子弟匹夫たり卒も田常六卿の患有らば臣も輔弼をし何を以て相救はんや事古へを師とせずして能長久なる者の聞所も非るあり今青臣等面り諛ひて以て陛下れ過を重ぬ忠臣も非るなり始皇其議を丞相も下して議せしめけるも丞相李斯其説を謬りとして其辞を細け乃ち上書して曰く古者天下散乱して能相一ある者あし是を以て諸侯並ひ作る語皆古へを道て今を害し虚言を飾て以て實を乱る人其私學する所を善として以て上の建立る法度を非る今陛下天下を并せ有ち白黒を辨して一尊の皇帝を定む而るを私學をもて乃ち相與も法教の制と非る令下ると聞けり即ち各々其私學を以て之を議し入る時の心も非り出る時の巷も議し主を非て名を爲し趣を異しして以て高しと爲し群下の弟子を率て以て謗を造す此如と禁制せされり主

君の威勢上は降り党與の權力下は成なん之を禁するこり便あり臣請らくの諸の文學詩書百家の語有る者の獨除て之を去ん命令到るの日より滿三十日よして去されの黜て城旦の刑は當ん去さる所の者の醫藥卜筮種樹の書のみ學のんと欲する事有る者の吏を以て師と爲さしめん始皇其議を可とし詩書百家の語を収め去、以て百姓を愚まし古を以て今を非る事無らしめ法度と明かよし律令を定むるの皆始皇を以て起す文書を同くし離宮別館を治め天下は周編せり明年又巡狩して外四夷を攘ふに李斯皆力あり李斯の長男李由三川の守となる諸男の皆秦の公主は尙となり女子は悉く秦の諸公子は嫁さける三川の守李由咸陽は告歸せしよ李斯家は置酒せしかり百官の長皆前て壽を爲し門廷の車騎千を以て數ふるに至れり李斯喟然として歎して曰く噫呼吾之を師の荀子は聞く曰く物太た盛なる事を禁すと夫斯の乃ち上祭の布衣よして閭巷の黔首あり上其驚下なる事を知り玉のす遂に擢、此よ至らせ玉へり今又當て人臣の位臣か上は居る者なし富貴の極と謂へし物盛なる時の衰ふと吾未た駕を脱して止まる所を知らざるなり始皇の三十七年十月よ出て會稽は游ひ海は並て北の方浪邪は抵る丞相李斯中車府の令趙高符璽令の事を兼行て皆從へり始皇二十餘人の子あり長子扶蘇數々直諫するを以て上兵を上郡は監せしめ蒙恬之か大將たり少子胡亥愛れて從んと請ふ之と許す餘子の從ふと有ると莫し其年七月始皇帝沙丘に至り病甚し趙高は命して書を爲りて公子扶蘇は賜しむ曰く兵を擧て蒙恬は屬し喪と咸陽は會して葬れ

と書己は封して未だ使者は授ず始皇崩しぬ書及び璽皆趙高の所は在り獨り子の胡亥丞相李斯趙高及び幸する所の宦者五六人始皇の崩するを知れり餘の群臣の皆知る者有るとなし李斯以爲く上外は在て崩し秦の太子なし故よ之を祕し始皇の屍を輜輦車中は居き百官事を奏し食と上ると故の如し宦者輒ち輜輦車中より諸々の奏聞の事を可しけり趙高因て扶蘇は賜ふ所の璽書を留めて公子胡亥は請て曰く上崩し玉ひしも詔の諸子を封王とするとなし而して獨り長子よ書を賜ふ長子至らぬ則ち立て皇帝と爲りて子の尺寸の地なし之を爲すと奈何胡亥は曰く固なり吾之を聞く明君の臣を知り明父の子を知ると父命を捐て諸子を封せず何の言へきとかあらん趙高は曰く然らず方今天下の權の子と高と及び丞相と在るのみ願くの子之を圖れ且夫人を臣とする人よ臣とせらるゝと人を制する人よ制らるゝと豈日を同ふして道へけんや胡亥は曰く兄を廢て弟を立てるは是不義あり父の詔を奉せずして死を畏るは是不孝なり能薄して材淺し強て人の功よ因るは是不能あり三の者の逆徳あり天下服せず身殆ど傾き危し社稷も血食せさらん高は曰く臣聞く陽武其主を殺して天下義を稱して不忠と爲さす衛君其父を殺して衛國其徳を戴く孔子之を著して不孝と爲す夫大行の小謹せず盛徳の辭讓せず郷曲各々宜き事有て百官功を同くせず故よ小を願て大を忘れの後必ず害あり狐疑猶豫すれの後必ず悔あり斷して敢行すれの鬼神も之を避く後成功あらん願くの子之を遂よ胡言喟然として歎して曰く今大行の事未だ發せず喪葬の

禮未だ終ず豈宜しく此事を以て丞相を于すへけんや趙高か曰く時あるか時あるか問謀るよ及の
 さらん糧を贏と馬を躍し唯時と後んとを恐る胡亥既よ高の言を然りとす高か曰く丞相と謀され
 の事の成と能のさるを恐る臣請ふ子の爲よ丞相と之を謀らん高乃ち丞相斯と謂て曰く上崩して
 長子よ書を賜ひ喪と咸陽の都よ會して嗣と爲れと書未だ行のす今上崩し未だ知る者有さるなり
 長子よ賜ふ所の書及ひ符璽皆胡亥の所よ在り太子を定るとい君侯と高との口よ在る耳事將よ何
 如せんとす李斯か曰く安んり亡國の言を得ん此人臣の當よ議すへき所よ非す高か曰く君侯自
 ら料よ才能蒙恬よ孰與ぞ功の高きと蒙恬よ孰與り遠きを謀りて失せざるの蒙恬よ孰與り天下よ
 怨無きの蒙恬よ孰與り長子の舊として之を信するとい蒙恬よ孰與り李斯か曰く此五ツの者よ皆
 蒙恬よ及のす而れとも君之を責るの何り深きや高か曰く高の固より内宮の厮役あり幸ひよ刀筆
 の文を以て進て秦の宮よ入るとを得て事を管ると二拾餘年未だ嘗て秦の免罷られたる丞相功臣
 の封爵二世よ及ふ者を見ず卒よ皆以て誅亡せり皇帝の貳拾餘子皆君の知る所長子の剛毅よして
 武勇信人よして舊士なり位よ即時の必ず蒙恬を用ひて丞相とあさん君侯終よ通侯の即を懷て郷
 里よ歸らざると明かり高詔を受けて胡亥を教へ習せ學のしむるよ法事を以てすると數年未だ嘗て
 過失を見ず慈仁ありて篤厚あり財を輕んして士を重し心よ辨ありて口よ訕れり禮を盡して士を
 敬す秦の諸子未だ此よ及ふ者あらず嗣となすよの尤も可かり君計て之を定よ李斯か曰く君其位

よ反れ斯の主の詔を奉て天の命を聽く何の慮りか定むへきや高か曰く安きも危くすへきなり
 危きも安くすへきなり安危定まらずん何を以て聖人を貴んや斯か曰く斯の上蔡の閭巷の布
 衣ありき上幸よ擢て、丞相と爲し封して通侯と爲し子孫までも皆尊き位重き祿を辱くする者の
 故將よ存亡安危を以て臣よ屬せんとするか爲かり豈負くへけんや夫忠臣の死を避て他の望を庶
 幾す孝子の勤め勞して危き地を踏す人臣各々其職を守るのみ君其復言と勿れ將よ斯よ罪を得せ
 しむるかり高か曰く蓋し聞く聖人の遷徙て常なく變化を見て時よ從ふ安り常法を得んや方今天
 下の權命の相亥よ懸れり高能く其志を得たり且夫外より中を制する之を感と謂ひ下より上を
 制する之を賊と謂ふ故よ秋霜降の草花落ち水搖動すれの万物作る此必然の效なり君何り見ると
 の晩きや斯か曰く吾聞く晉國太子を易て三世安からず齊の桓公兄弟位を争ひて身死して戮と
 爲れり紂の親戚を殺し諫者よ聽かず國丘墟と爲り遂に社稷を滅せり三ツ者天よ逆ひ宗廟血食せ
 す斯の其猶人あるや安り能く逆謀を爲んや高か曰く上下の心合同して長久あるへく中外の意
 一の如くよして事よ表裏なし君臣の計を聽かひ即ち長く封侯と有ち世、孤と稱し必ず喬松の壽
 孔墨の智あらん今此を釋て從すん禍子孫よ及ひ寒心を爲すよ足れり善者の禍よ因て福と爲す
 君何よか處んとするや斯乃ち天よ仰て歎して泪を垂れ太息して曰く嗟乎獨り乱世よ遭ふ既よ以
 て死すると能はす安よ命を託せんやとて乃ち趙高の言よ聽かけり高乃ち胡亥よ報して曰く臣請

ふ太子の明命を奉て以て丞相報す丞相斯敢て命を奉せさらんやと是に於て相與謀り詐りて始皇の詔を受ると爲して子の胡亥を立て太子と爲し更めて書を爲りて長子扶蘇に賜て曰く朕天下を巡り名山諸神を禱祠て以て壽命を延んとする今扶蘇將軍蒙恬と師數十万を將て以て邊を屯すると十有餘年進て前むと能す士卒多く耗り尺寸の功なし乃ち反て數々上書直言して我が爲る所を誹謗せり罷歸して太子と爲るを得ざるを以て日夜怨望すと扶蘇の子と爲りて不孝なり其劔を賜て自裁せしめよ將軍恬扶蘇と外に居り匡正と爲さず宜しく其謀を知るへし人の臣とありて不忠なり其死を賜ひ兵を以て裨將王離に屬せよ其書を封するよ皇帝の璽を以てし胡亥の容を遺書を奉して扶蘇に上郡の地を賜りける使者至て書を發す扶蘇泣て内舎に入り自殺せんと欲す蒙恬扶蘇を止て曰く陛下外に居り未だ太子を立す臣をして三十万の衆を國邊を守らしむ公子監たり此天下の重任なり今一人の使者來て即ち自殺す安う其詐を非ることを知らんや請ふ復請ん復請て後死するとも暮からず使者の數々自裁の事を趣しけり扶蘇の人と爲り仁なり蒙恬は謂て曰く父にして子に死を賜ふ尙安に復請ふへきとて即ち自殺しけり蒙恬死し肯す使者即ち吏に屬して陽周の地を捕置て還て此由を報しける胡亥李斯趙高之を聞て大に喜び咸陽の都に歸て喪を發し胡亥立て二世皇帝と爲り趙高を以て郎中令と爲し常中侍て事を用ゆ二世の燕居して乃ち高と召て與事謀る一日趙高に向ひて夫人生の世間を居るとの譬の猶六驥を馳て物

の決隙を過るか如し吾既已天下を臨めり耳目の好む所を悉し心志の樂む所を究て以て宗廟を安し万姓を樂しめ長く天下を有ちて吾か年壽を終んと欲す其道可なるへきか趙高か曰く此賢主の能行ふ所にして昏乱主の禁する所なり臣請ふ之を言ん敢て斧越の誅戮を避す願くは陛下少しく意を臣の言に留め玉へ夫沙丘にて先帝崩御の時の謀の諸公子及び大臣皆之を疑へり而へ諸公子の悉く陛下の兄よて大臣の又先帝の置所あり今陛下初て立ち玉ふ此其屬意快々として皆服せず恐くの變を爲しなん且蒙恬已に死するも蒙毅兵を將て外に在り臣戰々栗々て唯終ることを恐り且陛下安う此樂を爲とを得玉のんや二世の曰くさらん之を爲と奈何すへき趙高か曰く法を嚴くし刑を刻くし罪有る者の座誅よして収族よ至らしめ大臣を滅して骨肉を遠け貧き者の之を富し賤き者の之を貴くし盡く先帝の故き臣下を除き去り更めて陛下の親み信する所の者を置て之に近け玉へ此する時の陰德陛下に歸し害除けて姦謀塞り群臣潤澤を被り厚德を蒙らざる」と有と莫し陛下其時よこり枕を高くし志を肆よして寵樂し玉ふへし計此より出ると有へからず二世高の言を然として乃ち更めて法律を爲る是に於て群臣諸公子罪ある時の趙高よ下して之を鞠治させ大臣蒙毅等を殺し公子十二人を咸陽の市に於て僇死し十公主の杜の地に於て死し罪の及ふことを恐れ乃ち上書して曰く先帝恙なく在せし時臣入れの食を賜り出れり與よ乘れり御

府の衣臣之を賜ふとを得たり中既の室馬臣之を賜ふとを得たり臣當先帝よ從ひて死すべきよ能さるき是人の子と爲りて不孝あり人の臣と爲りて不忠なり不忠ある者の名の世よ立となし臣請ふ今從ひて死せん願ひ鄰山の下よ葬れんとをと書上る胡亥大に説び趙高を召て之を示して曰く此急なりと謂へきか趙高か曰く人臣當死を憂て暇あらざるべし何の度をか謀ることを得ん胡亥其書を可とし錢十方を賜ふて葬りける法令誅罰日よ益々刻深なり群臣人々自ら危み畔んと欲する者衆し又何房の宮を作り直馳道を治む賤歎愈々重く成徭已むとあし是よ於て楚の成の卒陳勝吳廣等乃ち乱を作し山東よ起り傑俊相立ち自ら起て侯王と爲りて秦よ叛く兵鴻門の地よ至て却きけり李斯之を憂ひ間を請ひて二世を諫んと欲せしよ二世許さす而して二世李斯よ責問て曰く吾私議ありて韓子よ聞所あるなり堯帝の天下を有の堂の高さ三尺采椽を斷す茅茨を剪す逆旅の宿と雖ども此より勤しからず冬日の鹿の裘夏日の葛の衣糲の食藜藿の羹土匭よて飯ひ土釜よて爨れり監門の養なりとも此より殺す禹王の龍門を鑿り大夏を通し九河を疏し九防を曲し泔水を決て之を海よ致して股よ吸あく脛よ毛あく手足胼胝して面目黎黒く遂よ外よ死し會稽よ葬りたり臣虜の勞も此より烈からず然る時の夫天下を有よ貴ふ所の者の豈形を苦め神を勞し身の逆旅の宿よ處し口よの監門の養を食ひ手よ臣虜の作を持んと欲するか此よ不肖人の勉る所あり賢者の務る所よの非るなり彼賢人の天下を有つて已よ適へるのみ此天下を有

つよ貴ふ所以なり夫所謂賢人といふ者の必ず能天下を安んじて万民を治む今一身すら且利すると能はず將惡よ能天下を治んや故よ吾志を肆よま欲を廣くし長く天下を享て害なきことを願ふなり之を爲んと奈何李斯の子李由三川の守たり群盜吳廣等西地を略して過去りしよ禁するとな能す章邯廣等か兵を破り逐ける故使者三川を覆案する者相屬りて李斯を誚讓しむ三公の位よ居て如何ぞ盜賊をして此の如くあらしむると李斯恐惶して爵祿を重し出す所を知らず乃ち二世の意よ阿り客らるゝとを求めんと欲し書を以て對て曰く夫賢主の必ず且よ能道を全くして督責の術を行ふ者なり之を督責する時の臣敢て能を竭して其主よ徇はずんいあらず此臣主の分定り上下の義明かある時の天下の賢不肖敢て力を盡し任を竭して以て其君よ徇いざるいあし是故よ主獨天下を制して制せらるゝ所なく能樂の極を窮む賢明の主たる者察せざる可んや故よ申子か曰く天下を有て恣睢ならざるい之を命て天下を以て桎梏と爲すと曰ふ者の他なし督責するとな能すして反て其身を以て天下の民よ勞す堯禹の若く然り故よ之を桎梏と謂ふなり夫申子韓子の明術を修めて督責の道を行ひ専天下を以て自ら適すると能す徒よ務めて形を苦しめ神と勞し身を以て百姓よ從ふ時の是黔首の役よして天下を畜ふ者よの非るなり何り貴ふよ足んや夫人を以て已よ從ふ時の已貴くして人賤し己を以て人よ徇ふ時の已賤くして人貴とし故よ人よ徇ふ者の賤くして人の徇ふ所の者の貴とし古より今よ及ふまで未だ然らざる者非ざるあり凡る古の賢を尊ふを

爲す所の者の其貴きか爲なり不肖を惡むを爲す所の者の其賤か爲なり堯禹身を以て天下に徇ふ者あり因て隨て之を尊ふ時の亦賢を尊ふ賢を爲す所の心を失ふ夫大に謬ると謂へし之を桎梏を爲すと謂も亦宜からずや督責すると能はざるの過なり故に韓子か曰く慈母は敗子あり嚴家は格處なしとい何りや則能罰の加ると必ずれはあり故に商君の法灰を道に棄る者を刑す夫灰を棄るの薄罪あり而を刑せらるゝの重罰なり彼唯明主の深く輕罪を督とを爲す夫罪輕さも且督すと深し而ると況て重罪あるをや故に民敢て犯ざるなり是故に韓子か曰く布帛尋常なるも庸人の釋す鑠金百鎰あるも盜跖搏さる者の庸人の心尋常の利を重すると深して盜跖の欲淺は非ず又盜跖の行を以て百鎰の重を輕と爲さるなり搏は必ず手は隨て刑せらるゝ時の盜跖も百鎰を搏すして罰必ず行はざる時の庸人も尋常を釋す是故に城の高きと五丈にして樓季も輕く犯さるゝなり泰山の高と百仞にして跛の羊其上は牧ふ夫樓季にして五丈の限を難しとし豈跛羊にして百仞の高を易しとせんや隋きと壘あると勢ひ異あれなり明主聖王能久しく尊き位は處り重き勢を取て獨天下の利を擅する所以の者の異ある道の有るゝの非ず能獨斷して督責を密かよし深罰を必ず故に天下敢て犯さるゝるあり今犯さるゝる所以を務めずして慈母の子を敗る所以を事とするの亦聖人の論を察せざるなり夫聖人の術を行ふと能はざればの舎て天下の役と爲るゝ何事りや哀まざる可んや且夫節儉仁義の人朝は立つ時の荒肆あるの樂輕み諫説論理の臣側は聞く時

の流漫ある志し誦く烈士節は死するの行ひ世に顯るゝ時の淫康あるの虞み廢す故に明主能此三ツ者を外よして獨主術を操て以て聽從ふの臣を制して其明かなる法を修む故に身尊くして勢ひ重きなり凡る賢主と云ふ者の必將は世に拂り俗を靡て其惡む所を廢して其欲する所を立んとす故に生る時の尊重の勢ひありて死する時の賢明の諡有るあり是を以て明君獨斷す故に權柄臣下は在ざるなり然る後能仁義の塗を滅し馳説の口を掩ひ烈士の行ひを困め聽を塞き明なるを揜ひ内獨視聽せり故に外傾くるゝ仁義烈士の行を以てして内奪ふは諫説忿争の辨を以すへからず故に能犖然として獨り恣睢の心を行ふて敢て逆ふと有ると莫し此の如くにして然る後能く申韓の術を明かよして商君の法を脩むと謂へし法脩り術明かよして天下乱る者の未た之を聞さるなり故に曰く王道の約て操易しと唯明主能之を行ふとを爲せり此の如くある時の督責の誠と謂ふ則ち臣は邪なし臣は邪なき時の天下安し天下安き時の主嚴尊かり主嚴尊ある時の督責必ず督責必ずする時の求る所得求る所得る時の國家富む國家富む時の君樂みて豊なり故に督責の術設る時の欲する所得さるとなし群臣百姓己か過を救ふは給なし何の變を之圖らんや此の如くある時の帝道備れり能君臣の術を明かよすと謂ふへし申到韓非復生すと雖とも加ると能はざるなりと書奏聞せしかば二世悦ひ是は於て督責を行ふと益々嚴く民は税すると深き者を明吏と爲せり二世の曰く此の如きの能督責すと謂へしと刑を被る者道は相半して死人日々市中に積むとを成す

人を殺すと衆き者を忠臣と爲しよき初め趙高郎中令と爲り殺す所及び私怨を報ること衆多かりしかば大臣の入朝して事を奏し之を毀るとを恐れ乃ち二世に説て曰く天子の貴き所以の者の但聲を聞のみよも群臣其面を見るときを得ると莫きを以て故に号して朕と曰ふ朕の物の未だ見えざるあり且陛下春秋に富せられしも未だ諸事は通ま玉はし今朝廷に坐し謹め擧るの事は就て當らざる有る時の短を群臣に見し神明の威を天下に示す所以に非ず且陛下深く禁中を拱き臣及び侍中の法に習ふ者と此の如くなる時の大臣等敢て疑ひしき事を奏聞せず天下の人民聖主と稱しあんに二世其計を用て乃ち朝廷に坐して大臣を見ず唯禁中を居り趙高常中を侍り事を用ゆ事皆趙高に決す高李斯か此事を議論すと聞て乃ち丞相に見へて曰く關東に群盜多し今上急を繇を發し阿房の宮を治め狗馬無用の物を聚め玉へり臣諫めんと欲すれども位賤しきか爲に黙居れり此眞に君侯の事なり君何故に諫めざるや李斯か曰く固なり吾之を言さんと欲すると久し今時上朝廷に坐せず深宮に居玉へり吾言ふ所の者あれとも傳るとを得へからず見えんと欲するも其間かし趙高か曰く君誠能諫めんとならん請ふ君の爲よ上の間なる時を候ひて君は語なんど是よ於て二世の方よ燕樂して婦女前よ居るを待て人をして丞相に告しむ上方に間よあひせり事を奏すへし丞相即ち宮門に至りて上謁を願ひけり此の如くすると三たひよ及ひければ二世怒て曰く吾常は間日多し丞相來らず吾方よ燕私する時よ丞相輒も來りて事を請ふ丞相豈と我を少しと

して輕んずるか且我を固めたるかと言ひければ趙高因て曰く此の如きに殆し沙丘の謀丞相與れり今陛下已よ立て帝となりて丞相の貴きに當り此其意土地を割裂て王となることを望むならん且陛下臣よ問されし臣敢て言はず丞相の長男なる李由三川の守たり然るに楚の盜陳勝等皆丞相の故郷傍縣の子なり故を以て楚國の盜賊の公に往來し三川を過るよ城を守るのよとして皆背せざりき高其文書の相往來するとを聞しか未だ其審かなる事實を得ず故よ未だ敢て以聞せず且丞相外よ居り權威陛下よりも重しと二世以て然となし丞相を案んと欲すれども其審あらざることを恐れ人よ命して三川の守の盜と通する状を案驗せしめける李斯之を聞て此事を辨せんとせしよ是時二世甘泉宮に在て方よ微抵優俳の觀始まりしか見ゆることを得ず因て上書して趙高の短とを言て曰く臣之を聞く臣其君よ疑ひしきに國を危くせざるとなく妾其夫よ疑ひしき時の家を危くせざるとかし今大臣の陛下に於て利を擅し害を擅しするとありて陛下と異なること無きハ此甚た不便なり昔者司城子罕宋よ相として身刑罰を行ひ威を以て之を行ふ期年よして遂に其君を劫せり田常簡公の臣とあり魯列國よ敵なく私家の當公家と均し惠を布き徳を施し下百姓を得上群臣と得陰に齊國を取り宰子を庭に殺し即ち簡公を朝し弑し遂に齊の國を有てり此天下の明よ知る所なり今高邪侯の老危反の行ひ有ると子罕か宋よ相たるか如きなり私家の富田氏の齊よ於るか如きなり田常子罕を逆道を兼行て陛下の威信を劫す其志の韓非か幹安を宰相爲るか

若し陛下圖り玉のすん臣其變を爲さんと恐なりと二世の曰く此何の言や高の故官者あり然れども安きか爲志を肆めせず危きことを以て心を易す行を潔し善を修めて自ら此に至ら使め忠と以て連とを得信を以て位を守る朕實之を賢とせり而を君之を疑ふの何や且朕少くして先人を失ひ識知する所なく民を治るを習すして君の又老たり天下と絶んとを恐る朕趙君は屬するは非れの當は誰人任すべきや且趙君の人を爲り精強力にして下人情を知り上能朕は適ふ君其疑ふと勿れと李斯か曰く然らず夫高の故賤人あり理を識事なく貪欲厭と無く利を求て止す勢を列て主は次き欲を求めて究無し臣故曰く殆しと二世已は前は趙高を信じ李斯の之を殺すことを恐れ乃ち私に趙高は此言を告く趙高か曰く丞相の患ふ所の者の獨り高のみ高已は死せし丞相田常の爲す所を爲んと欲するありと是は於て二世の曰く其李斯を以て郎中令は屬よと趙高李斯を案治す李斯拘執て束縛を受け囹圄の中は在り天を仰きて歎して曰く嗟乎悲ひかな不道の君何り計を爲す可んや昔者桀關龍逢を殺し紂王子比干を殺し吳王夫差伍子胥を殺せり此三臣の者豈不忠あらむや然ども死を免かれす身死して忠する所の者非なれはなり今吾智三子及のすして二世の無道桀紂夫差は過たり吾忠を以て死するの宜なり且二世の治豈亂れざらんや日者其兄弟を夷けて自立し忠臣を殺して賤人を貴ひ阿房の宮を作爲して天下は賦歛せり吾諫めざるは非す而も吾は聽ざるなり凡る古の聖王飲食節あり車器數あり宮室度あり命を出し事を

造すは費を加て民の利は益なき者の禁せり故に能長久よして治安あり今逆を毘弟は行ひて願す忠臣を侵殺して其殃を思ひす大は宮室を爲りて厚く天下は賦して其費を愛す三ツ者已は行れて天下聽す今反の者已は天下の半のを有り而るは心未だ寤らず趙高を以て佐と爲す吾必ず冠威陽の王都よ至て麋鹿の朝廷は游ふ事を見んとし言ひよけり是は於て二世乃ち趙高を以て丞相の獄を案て罪を治せしむ斯子由と謀反するの狀を責む皆宗族賓客を収捕けり趙高斯を治し榜掠と千餘よ及び痛は勝す自ら認る罪は服しけり死せざる所以の者自ら其辨よして功あり實は反心なきとを負み幸お上書して自ら陳ずることを得て二世の寤て之を赦すことを幸ひ李斯乃ち獄中より上書して曰く臣丞相と爲り民を治ると三十餘年秦の地の陝隘の時よ建ひ地千里兵數十万よ過す臣薄材を盡し謹みて法令を奉け陰は謀臣を行行之は金玉を資し諸侯は游說せしむ陰は甲兵を修め政教を飾へ門士を官よし功臣を尊ひ其爵祿を盛よす故は終よ以て韓を脅かし燕趙を破り齊楚を夷け卒は六國を兼ね其王を虜よして秦を立て天子と爲す罪一なり地廣からざるは非す又北の方胡貉を逐ひ南の方百越と定めて以て秦の強とを見せり罪二なり大臣を尊ひ其爵位を盛よして以て其親を固す罪三あり社稷を立て宗廟を脩めて以て主の賢あることを明よせり罪四なり尅讐を更め斗斛度量を平かよし文章を天下よ布き以て秦の名を樹つ罪五なり馳道を治め游觀を興して以て主の得意を見せり罪六なり刑罰を緩くし賦歛を薄くして以て衆の心を得ることを遂げ万民主を戴

き死して忘れず罪七なり斯の臣たる若き者の罪以て死するも足る事固より久玄上幸も其能力を盡して今も至る事を得たり願くは陛下之を察せよ書上る趙高史も命しし棄去て奏せさらしむ曰く囚人安り上書する事を得ん趙高其客十餘輩も詐て御史謁者侍中と爲し更も注て斯を覆案せしむ斯更も其實を以て對へしかの輒ち人をして復之を榜しむ後二世人も命して斯を驗しむ斯以て前の如し終も敢て更も言はず辭服して奏當を上る二世喜て曰く趙君微りせの幾と丞相も賣かれん二世も案せしむる所の三川の守至るも及て則ち項梁已も之を撃て殺しける使者來るも會丞相更も下れり趙高皆安も叛逆の辭を爲りけり二世二年七月斯五刑を具へ施して咸陽の市中も於て腰斬せられける斯獄を出て其中子と與も執れ願て中子も曰ひけるの吾若と復黃犬を牽て俱も上蔡の東門を出て狡兔を逐んと欲するも豈得へけんやと遂も父子相哭して三族を夷けられけり已も李斯死しけれの二世の趙高を拜して中丞相と爲し事大小となく輒ち高も決す高自ら權柄の重きとを知り鹿を獻して之を馬と曰けれの二世疑ひて左右の近臣も問けるの此乃ち鹿あり左右皆曰く馬あり二世驚きて自ら以て惑りと乃ち大卜の官を召て卦を立しむ大卜の曰く陛下春秋の郊祀宗廟鬼神も奉して齋戒不明ある故も此るとも至りしかり盛徳も依て齋戒を明かすべしと是も於て乃ち上林も入て齋戒して日も游ひて弋獵しけり來往する人の上林の中も入り玄を二世自ら射て之を殺しけれの趙高の己も女婿咸陽の令ある閻樂も教へ何人か知らされども人を賊

殺し上林も移したりと効奏させ趙高因て二世を諫めて曰く天子故かくして不辜人を賊ひ殺すの此れ上帝の禁あり鬼神享す天且も殃を降さんとす當も遠く宮を避て之を纏ふへしと二世乃ち出て望夷の宮も居り留ると三日趙高詐りて僞上も詔して士をして皆素服して兵を持って内も郷へし入て二世も告て曰く山東の群盜兵大も至ると二世觀も上て之を見て恐懼けり高即ち因て却かめて二世を自殺せしめ天子の璽を引て之を佩けれとも左右百官從ふ者なし聽て殿も上りけるも殿大も響ありて壞れ頽る、か如き者三たひも及ひしかの趙高も自ら天の已も天子の位を與へす燕臣の許さ、ることを知りて始皇の弟を召て之も璽を授けけり子嬰位も即て之を患ひ乃ち疾と稱して事を聽す官者韓談及び其子と謀りて高を殺さんとす高上謁して病を請ふ因りて召て入らしめ韓談をして之を刺殺さしめ其三族を夷けたり子嬰立て三月もして沛公の兵武關より入て咸陽の都も至る群臣百官皆畔きて敵を防ず子嬰妻子と自ら其頸も係も徂を以てして軹道を旁も降る沛公因て以て更も屬す項王至て之を斬る遂も天下を亡へり太史公か曰く李斯閻圍を以て諸侯と歴て入て秦も事も因て瑕釁を以て始皇を輔け率も帝業も成せり斯三公と爲れり尊ひ用ひらる、といふへし斯六藝の歸を知り政を明かして以て主上の餅たるを補とふを務めず爵祿の重を持ち阿順ひ苟合ひ嚴威酷刑し高か邪説を聽き適子を發し庶子を立つ諸侯已も畔て斯乃ち諫め争ひんと欲す亦末ならずや人皆以らく斯忠を極て五刑を被

りて死すと其本を察するも乃ち俗議と之異あり然されの斯の功且周召と列せんとす

張耳陳餘列傳第二十九

張耳の大梁の人なり其少き時魏の公子母忌か客と爲るも及へり張耳嘗て亡命して外黃の地も遊
ひし外黃の富人の女甚た美し庸奴も嫁り其夫の家を亡け去て父の客の所も抵て居るり父の客
索より張耳を知りて有けれの乃ち其女も謂て曰く必ず賢なる夫を求めんと欲し張耳も從へど女
聽せしかの乃ち卒も爲し決を請ひて之を張耳も嫁せしめたり張耳是時身を脱して遊ひ居しかの
女の家厚く張耳も奉終けり張耳此故を以て千里の客を招き致すとを得たり乃ち魏も仕て外黃の
令となり名此より益し賢と稱せらる

陳餘者亦大梁の人なり儒者の術を好み數し趙の國の苦經の他も遊ひけるか其地の富人公乘氏と
いふ者其女を以て之も妻し亦陳餘の庸人も非ざることを知りけり餘の年少く張耳も父とし事へ兩
人相共し刎頸の交を爲しけり秦の大梁を滅す時張耳外黃も家居せり漢の高祖布衣たりし時嘗て
數し張耳も從て遊ひ客たると數月の事ありき秦魏を滅し數歳もして已も此兩人の魏の名士なる
ことを聞て購ひ求め張耳を得たり千金陳餘を得たり五百金を與へんと令しければ張耳陳餘乃ち名
姓を變して共も陳も之き里の監門と爲りて以て自ら食ひ兩人相對して時の至るを待りけり里吏
嘗て過て陳餘を管とあり陳餘起て之を争いんとしけれの張耳其足を躡て管を取しむ里吏去りけ

れい張耳乃ち陳餘を引き桑下も之て之を數て曰く始め吾公と言し何如今少く辱られて一吏
も死せんと欲するや陳餘之を然りとして其短慮を戒めけり秦詔書を以て兩人を購ひ求む兩人の
知ぬ顔して門若を用て里中へ已等を購ひ求める命令を傳へけるこり笑止けれ時陳餘と曰ふ者斬
の地も起り陳も入るも至りて兵已も數万あり張耳陳餘の兩人陳陟も上謁す涉及び左右生平數、
張耳陳餘の賢ある事を聞て未だ嘗て見ざりし今見て即ち俱も大も喜ひけり陳中の豪傑父老乃
ち陳涉も説て曰く將軍身堅甲を破り銳兵を執り士卒を率て以て暴秦を誅して楚國の社稷を復
立し亡たるを存し絶たるを繼ぎ玉ふ功德宜しく王と爲るへし且夫天下の諸將も監み臨むの王た
らされの不可なり願く將軍立て楚王と爲り玉へ陳陟此を兩人も問けれの兩人對て曰く夫秦無
道を爲し人の國家を破り人の社稷を滅し人の後世を斷ち百姓の力を罷らし百姓の財を盡す將軍
目を瞋し膽を張り万死して一生を願ざるの計を出し天下の爲も殘賊を除かんとあり今始て陳も
至て之も王たれの天下も私を示すあり願く將軍王たる事母も急も兵を引て西人を遣て六國の
後を立よ自ら爲も黨を樹て秦の爲も敵を益なり敵多き時の力分るも與衆き時の兵強し如此くされ
の野も交兵なく縣も守城あし暴秦を誅し咸陽も據り以て諸侯を令せよ諸侯亡て立とを得の之を
服せん此の如くなる時の帝業成せん今獨り陳も王たらん天下の解て相從のさることを恐るなり陳
涉聽かず遂も立て王とされり陳餘乃ち復陳王も説て曰く大王梁楚を舉て西するの務て關も入る

在り未だ河北を収るゝ及のす臣嘗て趙を遊ひ其豪華及び地形を知れり願くは奇兵を請ふて北
 の方趙の地を略ん是は於て陳王故善する所の陳人武臣と曰ふ者を以て將軍とあし邵騷を護軍と
 爲し張耳陳餘を以て左右校尉と爲し士卒三千人を予て北趙の地を畧せしむ武臣が白馬の津より
 河水を渡り諸縣に至り其豪華は説て曰く秦亂政虐刑を爲して以て天下を殘賊ふ事數十年北より
 長城の域あり南より五嶺の成あり外内騷動し百姓罷敝れ人頭を數へて箕を以て米穀を斂て軍の
 費は供へたり財匱しく力竭き民生を聊す之より重るゝ苛き法峻刑を以て天下の父子を相安せ
 さらしむ陳王臂を奮て天下の爲は始を倡へ楚の地は王たり方二千里の間響の如く應し従はざる
 のあし家々自ら怒を爲し人々自ら門を爲し各々其怨は報ひ其讐を攻む縣の其令丞を殺し郡の其
 守尉を殺す今己は已大楚を張り陳は王たり吳廣周文の兩大將は卒百万を將て西の方秦を討しむ此
 時は於て封侯の業を成たる者の豪華は非るなり諸君試は相與之を計れ夫天下心を同じくして
 秦の苛政は苦む事久し天下の力は因て無道の君を攻め父兄の怨を報て地を割き士を有の業を成
 す此士の一時あり諸々の豪華皆其言を然ありとせし故乃ち行々兵を収て數万人を得たり武臣を
 号して武信君と爲す趙の十城を下せし餘は皆城守して下るとを肯せず乃ち兵を引て東北の方范
 陽を撃けり范陽の人酈通范陽の令は説て曰く竊は公の將は死せんとすることを聞けり故は吊す然
 れども公の通を得て生るを賀す范陽の令の曰く何を以て之を吊んといふや對て曰く秦の法重し

足下范陽の令たるは十年人の父を殺し人の子を孤よし人の足を斷人の首を懸よすると勝て數ふ
 へからす然とも慈父孝子敢て刃を公の腹中は傳事なき者の秦の法を畏る耳今天下大は亂れ秦の
 法施さす然る時の慈父孝子且は刃を公の腹中は刺みて以て其名を成んとす此臣の公を吊ふ所以
 あり今諸侯秦は畔き武信君の兵且は至らんとす而るを君堅く范陽を守れり少年皆争ふて君を殺
 して武信君は下らんやす君急は臣を遣り武信君は見えしめ禍を轉して福とすへきの今は在り
 范陽の令乃ち酈通を武信君は見しむ酈通乃ち武信君は謂て曰く足下必ず將は戰て勝然る後地を
 略し攻て得然る後城を下さんとす臣竊は以爲く過りと誠臣の計を聽なは攻すして城を降し戰は
 すして地を略し檄を傳へて千里定るへし可ならんや武信君か曰く何の謂うや酈通か曰く今范
 陽の令宜まゝ其士卒を整頓て以て守戰ふへき者なり其人怯して死を畏れ貪りて富貴を重す故は
 天下の人先て降參せんと欲すれども君か以て秦の置所の吏と爲して誅し殺すと前の十城の如
 くせんを畏ゝなり然るは今范陽の少年も亦方は其令を殺して自ら城を守て君を距んとす君何
 り臣は侯爵の印を齎して范陽の令を拜せざる范陽の令則城を以て君は下る時の少年も亦敢て其
 令を殺さす范陽の令をまて朱輪華轂の車は乗せ燕趙の郊は驅馳せしめ燕趙の郊よて之を見皆
 曰はん此范陽の令はして先ちて降參せし者ありと人々即ち喜ひて降來るは必定なりかくする時
 は燕趙の城々の戰ふと母くして降るへし此臣の所謂檄を傳て千里定る者なり武信君其計は従ひ

因て蒯通をして范陽の令を侯爵の印を賜せければ趙の地之を聞て戰ひすして城を以て下る者三十餘城及び直邯鄲の地に至りけり張耳陳餘の周章が軍秦を攻て關に入り戯至て敗れ却くと聞き及諸將陳主の爲地を徇へ多く讒毀を以て罪を得て誅せらるゝを聞き陳王の其謀を用ひず以て將と爲すして校尉と爲るを怨みて乃ち武臣と説て曰く陳王戯り起り陣に至て王たり必ず六國の後を立るよ非ず將軍今三千人を以て趙の數十城を下し獨り河北に介り居れり王たらされん以て之を填るとなし且陳王讒言を聽く還て報するとも恐く禍を脱れず又其兄弟を立るよ如すとせん不即ち趙王の子孫を立るん將軍時を失ふと勿れ時の間息をも容し武臣乃ち之を聽立て趙王と爲り陳餘を以て大將軍とし張耳を右丞相とし邵騷を左丞相とし人を遣て陳王を報せしむ陳王大に怒り盡く武臣等の家を族し兵を發して趙を撃んと欲す陳王の相國房君諫て曰く秦未だ亡すして武臣等の一族を誅するん此又一の秦と生ずるなり因て之を賀し急兵を引て西方秦を撃しむるよ如す陳王之を然りとし其計は從ひ武臣等の一家を宮中へ徙し繫しめ子故を封して成都と爲し陳王使者をして趙を賀せえ趣して兵を發して西の方秦を攻て關に入りしむ張耳陳餘武臣と説て曰く王の趙に王たるん楚の意は非ず特は計を以て王を賀せり楚已に秦を滅しちの必ず兵を趙に加へん願ひ王兵を西秦に入らえむるとなく北の方燕と代とを徇從へ南の方河内を収て以て自ら廣めよ趙卒の大河に據り北の燕代を有ちち楚秦は勝たりとも必ず趙を制

せず趙王以て然りとし因て兵を西せずして韓廣をして燕を略しめ李良をして常山を略しめ張騫をして上党を略しむ韓廣燕に至る燕人因て廣を立て燕王と爲す趙王乃ち張騫陳餘と北方の地を燕の界に略りけり趙王問出して燕の軍を得られけり燕の大將之と囚へ置き與に趙乃ち地の半を分て乃ち王を歸んと欲す使者往時の燕轍も之を殺して以て地を求む張耳陳餘之を患ふ廝養の卒あり其舍中へ謝て曰く吾公が爲に燕と説て趙王を載歸らん舍中皆笑て曰く使者往と十餘輩にして轍も死さる若何を以て能王を得ん廝養の卒乃ち燕の壁に走く燕の將之を見る卒燕の將は問て曰く臣此處へ來るん何を欲する爲なるかを知るや燕の將は曰く若趙王を得んと欲するのみ又豈も他説あらんや卒か曰く君張耳陳餘の如何する人ある事を知るや燕の將の曰く賢人あり曰く其志の何を欲するを知るや曰く其王を復ん事を欲する耳趙の養卒乃ち笑て曰く君また此兩人の欲する處を知らざるなり夫武臣張耳陳餘の馬筆を杖き趙の數十城を下せり此亦各々南面して王たらん事を欲す豈も人の卿相と爲りて終に已事を欲せんや夫臣となる主とあると豈か日を同して道へけんや願ふ其勢初て定て未だ敢て參分して王たらす且少長を以て先武臣を立て王と爲して以て趙の人心を持こらへたり今趙の地已に服しぬ此兩人も亦趙を分て王たらんと欲するも時未だ可ならざる耳今君反て趙王を囚ふ此兩人の者名に趙王を歸さん事を求めども其實は燕の之を殺す事を欲し此兩人趙を分て自立して王とあらん夫一の趙すら尙燕を易れり説て兩賢王を以

で左に提げ右に携へ相助けて王を殺す燕國の罪を責むる燕を滅す事の容易あるべし燕の將之を
 聞て誠より以て然りとなし乃ち趙王武臣を歸しければ養卒御者と爲りて歸りけり扱も李良の已よ
 常山を定て還て其旨を報しけれの趙王復李良を命して太原の地を略しめ后邑よまて至りけるよ
 秦の兵井陘の險阻を塞て未だ前進能はず秦の將詐りて二世の使人と稱し李良を遣り趙の君
 臣に相疑ひしめん爲よ封せずして遣けり其書よ曰く良嘗て我事て顯幸を得たり良誠能趙よ反
 きて秦の爲よせの其罪を赦して重く良を用ひんと良書を得て未だ信せず乃ち還て邯鄲よ之き益
 々兵を請けるよ兵未だ至らず道よ趙王の姉酒宴よ行て歸路百餘騎の兵隊を卒て來るよ逢り李良
 望み見て以て趙王と思ひ道の旁よ伏し謁しけるよ王の姉醉て其將なるを知らず騎士を以て李
 良よ謝せしめけるよ李良の素より身分の貴生れおれり起て後大よ其從官よ慙けるよ從官の中
 一人ありて曰く今天下皆秦よ畔き能者の先立の時あり口趙王素將軍の下よ出たり今女兒よして
 反て將軍の爲よ車より下らす請ふ追て之を殺さん李良已よ秦の書を得て固より趙よ反せんと欲
 して未だ決せず此怒よ因て人を遣て王の姉を道中よ追殺し乃ち遂よ其兵を將て邯鄲の都を襲ふ
 邯鄲知らず竟よ武臣邵騷を殺す趙人強耳陳餘の耳目と爲る者多し故を以て脱れ出るとを得たり
 其兵を収て數万人と得たり客あり張耳よ告て曰く兩君羈旅の身よして趙の國を附んと欲するも
 獨立しかたし趙の前代の子孫よ立て扶るよ義を以てせの功を就へしと乃ち趙歇を求め得て立て

趙王と爲し信都よ居しむ李良兵を進て陳餘を撃つ陳餘李良を敗る李良走て秦の大將章邯よ歸す
 章邯兵を引て邯鄲よ至り皆其民を河内よ移す其城郭を夷けける張耳趙王歇と走て鹿城よ入る王
 離之を圍む陳餘北の方常山の兵を収て數万人を得たり鉅鹿の北よ軍し章邯鉅鹿の南棘原よ軍す
 甬道を築て河よ隔ね王離よ餉を送りけれの王離の兵食多し急よ鉅鹿を攻む鉅鹿の城中食盡き兵
 少し張耳數人を以て陳餘を召て兵を前しむ陳餘自ら度よ兵少くして秦よ敵せずと敢て前す數月
 よして張耳大よ怒り陳餘を怨み張厭陳澤をして往て陳餘を讓しめて曰く始め吾公と刎頸の交を
 爲せり今王耳と旦暮且よ死せんとす而るよ公兵數万を擁て相救ひ肯せず安り其相爲よ死るよ在
 るべき荷も必ず信ならの胡故よ秦の軍よ趣きて俱よ死せざるされの且よ十の中よ一も相全
 き事あらんとす陳餘か曰く吾度よ前も終よ趙を救ふ事能はず徒しく盡く軍を亡のん且餘か俱よ
 死せざる所以の者の趙王張君の爲よ秦よ報ひんと欲す今必ず俱よ死するの肉を餓たる虎よ委す
 るか如し何の益かあらん張厭陳澤が曰く事已よ急をり要するよ俱よ死して信義を立てん安り後
 の慮を爲すよ暇あらんや陳餘か曰く吾死すること以爲く益あしと必ず公の言の如くならの
 五千人を使めんと乃ち張厭陳澤をして先秦の軍を嘗て撃しむ至れば皆没して一人も還る者あし
 是の時よ當て燕齊楚俱よ楚乃急ある事を聞て皆來り救ふ張敖も亦北の方代の兵を収て萬餘人を
 得て來り皆陳餘の旁よ壁を搆けれとも未だ敢て秦を撃す項羽の兵數々章邯の甬道を絶ける故王

離の軍勢食乏し項羽因て悉く兵を引て河水を渡り遂に章邯を破りけり。章邯兵を引て退きたり。諸侯の軍乃ち敢て鉅鹿を圍める。秦の軍を撃て遂に王離を虜にせり。涉間の自殺しぬ。率よく鉅鹿の城を存し全くせし。楚の項羽の力なり。是に於て趙王歇、張耳乃ち鉅鹿を出て諸侯に謝するとを得たり。張耳、陳餘と相見て張耳頗る相救いさるるを責讓及ひ張懸陳澤の如何せしやと所在を問ければ陳餘怒て曰く張懸陳澤必死を以て臣と責しかり。秦五千人を將として先嘗て秦の軍を撃しめしよ皆没して一人として還來る者なし。張耳信せず以爲之を殺せりと數々陳餘に其事を責問ければ陳餘怒て曰く意ざりき君の臣を怨むとかくも深からんどの豈臣を以て將の位を去るるを重する者と爲よとて乃ち大將の印授を脱解して張耳を推予へける。張耳も亦愕きて受す。其時陳餘、陳餘は如しかり客有りて張耳に説て曰く臣聞く天の與ふるを取されり。反て其咎を受くと今陳將軍君も印を與へて君受さるる天も反くあり。天も反く不祥あり。急よ之を取れと張耳乃ち其印を佩ひ其麾下を収さむ。陳餘遠て亦張耳の讓する事を望み遂に趨出ければ張耳遂に其兵を收めけり。陳餘獨麾下の善する所の數百人と河上の澤中よ之を漁獵して居りぬ。此より陳餘張耳遂に御あり。趙王歇、信都も居りぬ。張耳の項羽諸侯に從ひて秦を攻て關に入りけり。漢の高祖の元年二月項羽諸侯王を立つ張耳、雅此等の人と游ひしかり人多く之を爲よ言しよ固り項羽も亦素より數々張耳の賢を聞居て乃ち趙を分て張耳を立て常山王と爲して信都も治せしむ。信都を更て襄國と名けける。陳餘

の客多く項羽に説て曰く陳餘張耳の一体にして趙も功あり。項羽陳餘の關に入りよ從はざるを以て其南皮の地も在りと聞き即ち南皮の傍の三縣を以て之を封して趙王歇を徙して代よ王とせり。張耳國よ之く陳餘愈々益々怒て曰く張耳の餘と功等きありさるるを今張耳の王たり。餘の獨侯たり。此項羽不平の所爲なり。齊王田榮楚に畔くよ及て陳餘乃ち夏説を以て田榮に説せける。項羽天下の宰と爲りて不平あり。盡く諸將を善土地よ王として故の王を徙して惡き土地よ王とせり。今趙王乃ち代よ居る願くは王臣よ兵を假せ請ふ。吾封邑南皮を以て齊の扞蔽とあらん。田榮黨を趙よ樹て以て楚よ反んと欲し乃ち兵を遣して陳餘に從はしむ。陳餘因て三縣の兵を悉して常山王張耳を襲ひければ張耳敗走しぬ。念ふよ諸侯歸すへき者なし。曰く漢王我と舊故あれ共而なから項羽の又強く且我を立て王とせり。我楚よ之んと欲すと甘公の曰く漢王の關に入りよ五星東井よ聚れり。東井の秦の分野なり。先至りたれば漢必ず覇たらん。楚強よといへども後必ず漢よ屬せんと故よ耳の漢よ走行けり。漢王も亦還て三秦を定め方よ章邯を廢丘よ圍みし時張耳漢王よ謁えしかり。漢王厚く之を遇はれける。陳餘已よ張耳を取り皆復趙の地を收め趙王を代よ迎て復趙王と爲す。趙王陳餘を德ありとし立て以て代王と爲す。陳餘趙王の年弱く國初て定るか爲よ國よ之す留りて趙王を傳として夏説をして相國を以て代て代を守らしむ。漢の二年東の楚を撃つ使を以て趙よ告しむ。與よ俱よせんと欲す。陳餘か曰く漢張耳を殺さる乃ち從はんと寔に於て漢王人の張耳よ類たる者を求

て之を斬り其頭を持たせて陳餘は遣りける陳餘乃ち兵を遣て漢を助けしむ漢の彭城の西に敗る
 時又當り陳餘も亦復張耳の死せざるを覺り乃ち漢より背り漢の三年韓信已に魏の地を定め張
 耳と韓信とを遣て趙の井陘を擊破らしめ陳餘を泜水の上より斬り趙王歇を追て襄國に殺し漢張耳
 を立て趙王と爲せり漢の五年張耳薨しぬ陰して景王と爲す子乃敖嗣立て趙王と爲る高祖の長女
 魯元公主趙王敖の后と爲る漢の七年高祖平城より趙を過く趙王朝夕祖き輔蔽して自ら食を上る
 禮甚た卑し子婿の禮有り高祖箕踞て晉り甚た之を慢り易しける趙の宰相貫高趙午等六十餘よし
 て故の張耳の客あり生平氣を爲す乃ち怒て曰く吾王の辱王ありとて王に説て曰く夫天下の豪傑
 並ひ起りて能ある者先立り今王高祖も事ふると甚た恭しくして高祖禮を乞請ふ王の爲よ之を殺
 さん張敖其指を嚙み血を出して曰く君何り言の誤れるや且先人國を亡ひ高祖の力も因て國を復
 するとを得たり徳子孫も流る秋豪ありとも皆高祖の力なり願くは君復口より出すと無れ貫高趙
 午等十餘人皆相謂て曰く乃ち吾等の非あり吾王の長者よしして徳も倍かす且吾等義も於て辱めら
 れず高祖の我王を辱しむるを怨む故よ之を殺さんと欲す何り乃ち王を汚すとを爲んや大事成
 り王は歸せん大事敗るれり獨身坐られんのみと漢の八年上東垣より還て趙を過く貫高等人を柏
 人の地に壁して高祖を置搆て有りよけり上過て宿せんと欲す心動なしけれり問て曰く縣の名は
 何と云ふり曰柏人と号せり上驚きて曰く柏人と人よ迫るの義あり恐るへしとて宿せずして去

りよけり漢の九年貫高も怨ある人々其謀を知りて乃ち變を上りて之を告けれり是よ於て上
 并せて趙王貫高等と逮捕らる十餘人皆争ひて自ら到て死しよけり貫高獨り罵りて曰く誰か公
 をして之を成しめたる今趙王實よ其謀無くして并せて王を捕へらる公等皆死せり誰か王の謀
 反せざるを白す者あらん乃ち檻車よて膠鎖して京師へ送り致しけり已に王と長安よ至る張敖の
 罪を治らる上乃ち詔す趙の群臣賓客敢て王よ從ひし者の族せん貫高客の孟舒等十餘人と皆自
 髡削て三家の奴と爲て從ひ來り貫高至りて獄の庭よて吏よ對す曰く吾か屬之を爲せり王の實
 よ知らざるなり吏治へて榜笞と數千刺劓よて傷つけ身よ擊へきの間なきまでも終よ復一言も他
 言なし呂后數々張王魯元公主を以て妻とせし故よ斯る計の有へからすと言すよ上怒て曰く張敖
 よ天下を據しめり豈而の安のみを愛よんつとて聽さす延尉貫高の事と辭を以て聞しけれり上の
 曰く壯士なり誰か貫高よ懇き者かある私を以て之を問しめよ中大夫泄公の曰く臣の邑子よて素
 より親き者あり此貫高の因より趙國よて名義を立て侵れず然諾を爲す者なり上泄公よ命して節
 を持せて之を問しむ俛興よて昇出され前て仰き視て曰く君の泄公なりや泄公之を勞苦事生平の
 如く驩愛して與よ語り張王果して計謀有りや否やを問けるよ高か曰く人情寧ろ各々其父母妻子
 を愛せざる者あらんや今吾か三族皆論死せらる豈王を以て吾か親よ易んや願よ王實よ反せず獨
 吾等之を爲すが爲よ具よ本指の爲す所以の者王知らざる狀を道けれり是よ於て泄公入て具よ以

報しける上乃ち趙王を赦す上貫高の人と爲り能然諾を立るを賢として泄公を以て具之よ告させて曰く張王已も出たり因て貫高を赦さる貫高喜びて曰く吾王審と出たるか泄公の曰く然り泄公か曰く上足下を多ありとす故も足下を赦す貫高か曰く死せずして一身餘なき所以の者の張王の反せざるを白んとてあり今王已も出つ吾か責已も塞かる死すとも恨みす且人臣殺の名有りて何の面目ありて復上も事へんや縦ひ上我を殺さるとも我心も愧さらんやと乃ち仰きて腕を絶て遂も死せり此の時も當りて名天下も聞たり張敖已も出魯元公主の尙たる故を以て宣平侯と爲る是も於て上張王の諸客鉗奴を以て張王も從ひて關も入るを賢として諸侯の相又の郡の守と爲さる者亦し孝惠帝呂高后孝文帝孝景帝の時も及て張王の客の子孫皆二千石の官と爲ることを得たり張敖の高后の六年もして薨しぬ子の偃を魯の元王と爲す母の呂后の女あるを以て封して魯の元王と爲せり元王弱く兄弟少し及ひ張敖の他姫の子を封す壽を樂昌侯と爲し侈を信都侯と爲す高后崩し諸呂無道なり大臣之を誅して魯の元王及ひ樂昌侯信都侯を廢せり孝文帝位も即て復故の魯の元王偃を封して南宮侯と爲して張氏を續しむ

太史公か曰く張耳陳餘世も傳へて賢者と稱する所の者の其賓客副役も至るまでも天下の俊傑も非るの莫し居る所の國卿相を取さる者なし然るも張耳陳餘約も居る時相然信するも死を以てして豈顧問や國も據權を爭ふも及て卒も相滅亡せり何ぞ嚮者も相慕ひ用るの誠もして後も相倍くの戻るや豈利を以てするも非すや名譽高しと雖も賓客盛なりと雖も由る所の殆と太伯延陵の季子と異あり

魏豹彭越列傳第三十

魏豹の故の魏の諸公子なり其兄魏咎の故の魏の時封せられて寧陵君と爲る秦魏と滅し咎を遷して家人と爲す陳勝の起て王たる時咎往て之も從ひけり陳王魏人周市も命して魏の地を徇順のしめ魏の地已も下れり相與も周市を立て魏王と爲んと欲す周市の曰く天下昏亂して忠臣乃ち見る今天下共も秦も畔けり其義必ず魏王の後を立の乃ち可からん齊趙の二國各々車五十乘を送て周市を立て魏王と爲しむ市辞して受す魏咎を陳より迎ふと五反して陳王乃ち遣て魏咎を立て魏王と爲せり章邯已も陳王を破りて乃ち兵を進めて魏王を臨濟も撃けれの魏王乃ち周市をして出て救ひを齊楚も請しむ齊楚項它田巴を遣て兵も將として市も隨ひて魏を救ふ章邯遂も撃破りて周市等の軍と殺して臨濟を圍けれの魏咎其民の爲も降參を約定し約定まりて咎の自ら燒殺しぬ魏豹の亡走て楚も行けり楚の懷王魏豹も數千人を予へて復魏の地を徇へ順へしむ項羽已も秦を破て章邯を降し豹も又魏の二十餘城を下しけれの豹を立て魏王と爲しけり豹精兵を引て項羽も從ひて關も入ける漢の元年項羽諸侯を封して梁の地を有んと欲し乃ち魏王豹を河東も徒して平陽も都せしめ西魏王と爲す漢王還て三秦を定め臨晉を渡る魏王豹國を以て屬し遂も從ひて楚

を彭城に撃つ漢敗れ還り滎陽に至りし時豹國を歸て親の病を視んと請ひ國に至れり即ち河津を
 絶切て漢を畔きけり漢王魏豹の反するを聞も方東の方楚の項羽を憂へて未だ撃及ひがたし
 因て鄼生を謂て曰く頼を緩して往て魏豹を説て之を下しかり吾萬戸の地を以て若を封せんと鄼
 生豹を説し豹謝して曰く人生一世の間白駒の隙を過か如きのみ今漢王慢て人を侮る諸侯群臣
 を罵詈するを奴を罵か如きのみ上下の禮節有る非ず吾復見る忍びざるなり是は於て漢王韓
 信を遣て撃て豹を河東に虜として傳へて滎陽に至り豹の國を以て郡とせり漢王豹をして滎陽を
 守らしむ楚の項羽之を圍むと急を周苛復豹の反せんを恐れ遂に之を殺しけり
 彭越の昌邑の人なり字の仲常は鉅野澤中に漁し群盜を爲す陳勝項梁の起る時少年或は越を謂て
 曰く諸豪傑相立て秦を畔く仲以て來て亦之は效ふへし彭越は曰く兩龍方は門ふ且く之を待んと
 居と一歳餘にして澤間の少年相聚ると百餘人往て彭越を從て曰く請ふ仲我々の長とされと越謝
 して曰く臣諸君と與するを願ふ少年強て請て乃ち許す與り期す且日日出る會せよ期は後
 者ハ斬らん且日日出る十餘人後れたり後る者ハ日中に至りける越謝して曰く臣老たり諸君
 強て以て長とせり今期きて多く後れたり尽く誅すへからず最も後る者一人を誅せん校長は命し
 て之を斬しめん皆笑て曰く何り是に至らん請後々の敢て後すと越乃ち一人を引て之を斬しむ壇
 を設けて祭りて乃ち徒屬を令せしかの皆大に驚きて敢て越を仰き視る者あり乃ち行々地を略し

て諸侯の散卒を收て千餘人を得たり沛公の碭より北の方昌邑を撃つと彭越之と助く昌邑未だ下
 らず沛公兵を引て西す彭越も亦其衆を將て鉅野の中居り魏の散卒を収む項羽關に入り諸侯を
 王として還歸る時彭越の衆萬餘人屬する所あり漢の元年の秋齊王田榮項羽は畔く漢乃ち人を以
 て彭越を將軍の印と賜ひ濟陰より下りて以て楚を撃しむ楚蕭公角を命して兵を將として越を撃
 し越大に楚の軍を破りたり漢王二年の春魏王豹又た諸侯と東の方楚を撃ち彭越其兵三萬餘人
 を將て漢を外黃に歸しけれ漢王の曰く彭將軍魏の地を収れ十餘城を得て急に魏の後を立んと
 欲す今西魏王豹も亦魏王咎の從弟とて眞に魏の後ありとて乃ち彭越を拜して魏の相國と爲し擅
 り其兵を將て梁の地と略し定めしむ漢王の彭城を敗て解て西する時彭越皆復其下す所の城を亡
 ひぬ獨り其兵を將て北河上居る漢の三年彭越常は往來して漢の游兵と爲り楚を撃て其後の糧
 米を梁の地にて絶切た漢の四年の冬項王漢王と滎陽は相距く彭越攻て睢陽外黃の十七城を下
 せり項王之を聞て乃ち曹咎を命して成皋を守らしめ自ら東して彭越か下す所の城邑を收めけれ
 ば諸城皆復楚の爲とせり越已とを得す其兵を將て北の方穀城を走けり漢の五年の秋項王の南の
 方陽夏を走る時彭越復もや昌邑の旁に二十餘城を下し數十餘方斛を得て漢王の兵糧を給しけ
 り漢王敗走せし時使を以て彭越を召て力を并て楚を撃しむ彭越は曰く魏の地初め定りて尙楚を
 畏ると甚し未だ此地を去るへからず此時漢王楚を追て項羽は固陵に敗れしかの乃ち留侯張良は

謂て曰く諸侯の兵從のさる者多し之を爲と奈何せん張良の曰く齊王韓信の立て王たるの君王の
 意よあらす信よ於ても自堅く王たりと思ひす彭越本梁の地を定て功多し始め君王魏豹の故を
 以て彭越を拜して魏の相國とせり今魏豹死して後なし且越も亦王たらんと欲えて君王蛋く定め
 す今此兩國と約せり即ち楚も勝ん唯陽以北より穀城に至るまで皆以て彭相國を王とせん陳より
 以東海に至るまで齊王韓信も與へん韓信の家楚も在り此其意復故邑の地を得んと欲するの人情
 あり君王能此地を出し捐て二人の者も與ふるとを許しなれ二人の今致すへし即能のすん天下
 の事未だ知るへからず是よ於て漢王乃ち使を發して彭越も許すと留侯の策の如くす使者至れ
 の彭越乃ち悉く兵を引て垓下の地も會し遂も楚を破りけり五年も項羽已も死し春彭越を立て梁
 王と爲し定陶も都す六年陳も朝す九年十年皆長安の都も來朝す十年の秋陳稀代の地も謀反せり
 高祖自ら往撃て邯鄲も至り兵を梁王も徵せし梁王病と稱し使將も命して兵を將て邯鄲も詣ら
 せける故高祖怒て人をして梁王を讓しむ梁王恐れて自ら往んと欲す其將扈輒の曰く王始め往す
 して今讓られて往往の則ち禽とならん遂も兵を發して反するも如す梁王聽かすして病と稱して
 往さりき梁王其太僕を怒るとありて之を斬んとせしかの太僕亡て漢も走り梁王扈輒と謀反すと
 告げり是よ於て上使をして梁王を不意も掩しむ梁王覺らす使者梁王を捕へて之を雒陽も囚とさ
 し有司之を治へけるも謀反の形已も具て有けれの論するも法の如くせんと請けれとも上之を敢

して庶人と爲し傳を以て蜀の青衣の地も處しむ西の方鄭も至りし時呂后の長安の都より來て
 雒陽も之んと欲するも逢ふ道路も於て彭王を見る彭王呂后も見て泣を涕て自ら罪なきを言ひ
 願くの故の昌邑の地も處んと呂后許諾し與も俱も東雒陽も至る呂后上も申して曰く彭越の壯士
 なり今之を蜀も徒の此自ら患を遺すなり遂も之を誅するも如す妾謹みて與も俱も來れり是よ
 於て呂后乃ち其舍人をして彭越復謀反すと告させ廷尉王恬開奏して之を族殺せんと請しかの上
 乃ち可々遂も越の宗族を夷けて國除かる
 太史公か曰く魏豹彭越の故賤と雖とも然れとも已も席の如く千里の地を卷き南面して孤と稱し
 血を嘔み勝も乘し日も聞ゆると有り畔逆の意を懷き敗るも及び死せずして虜囚もせられ身刑戮
 を被るの何哉中材已上の者すら其行を羞とす況て王者をや彼異なる故なし智畧人も絶たるを以
 て獨身無とを患る耳尺寸の柄を攝とを得り其雲蒸龍變し其度も會所あらんとを欲せり故を以て
 幽囚て辭せずと云ふ

鯨布列傳第三十一

鯨布の六の地の人あり姓の英氏秦の時布衣たり少年の時客あり之を相して曰く當も刑せられて
 王たるべしと壯なるも及て法も坐して鯨せられけれの布欣然て笑て曰く人我を相して當も刑せ
 られて王たるへしと曰り幾と是なるかと人の聞者ありて共も之を俳として笑ける布已も罪を論

せられ麗山れいざんと輸おこられて刑徒けいととありしは麗山の徒との數十万人あり布皆其徒の長の豪傑と交通し
 廻まわち其曹偶そうごを率つれて亡にげて江中かうちうの之ゆき群盜ぐんたうを爲なし居たり陳勝ちんせうの起る時布ふ廻まわち番君ばんくん見まみへ其衆しうと秦しんよ
 叛そむきて兵あつむを聚あつむると數千人番君ばんくん其女めいを以もつて之ゆは妻めかけせり秦の大將じやうかん章邯ちやうかんの陳勝ちんせうを滅ほろし呂臣りよしんの軍きんを破やぶる
 時とき黥布けいふ反かへりて兵へいを引ひて北の方秦せいの左右さゆう校かうを撃うて之を清波せいぱの地ち破やぶり兵へいを引ひて東とうせり楚その項梁かうりやう江東
 會稽かいけいを定め江水かうすいを涉わたり西せいすと聞き陳嬰ちんえいの項氏かうしの世々せせ楚の大將だいじやうたるを以もつて廻まわち兵へいを以もつて項梁かうりやう屬ぞく
 して淮南わいなんを渡わたりけれは英布えいふ蒲將軍ぼくせんも亦また兵へいを以もつて項梁かうりやう屬ぞくしけり項梁かうりやう淮わいを渡わたり西せいし秦しんの將景駒けいこ秦
 嘉等かを撃うつ布常ふじやう軍將ぐんじやうの冠かむらたり項梁かうりやう薛せつに至いたりし時陳王ちんわう定さだめて死しすと聞き乃すなはち楚その懷王くわいを立つ
 項梁かうりやう号ごうして武信ぶしん君くんと爲なる英布えいふを當陽たうやう君くんと爲なす項梁かうりやう軍敗くんでれて定陶ていたう死しす懷王くわい徒たうて彭城ほうじやう都とせしか
 諸將しよじやう英布えいふも亦また皆みな彭城ほうじやう保ほし聚あつりける是の時このとき當あたりて秦しん急きう趙ちやうを圍かこむ趙ちやう數しよく々く人ひとを以もつて救すくひ楚そよ
 請こほし心懷しんわい王わう宋義そうぎを以もつて上將じやうじやうたらしめ范增はんせうを末將まつしやうと爲なし項羽かうよを次將じやうじやうと爲なし英布えいふ蒲將軍ぼくせん皆將軍けいせんたり
 悉しよくく宋義そうぎ屬ぞくして北の方きたう趙ちやうを救すくふ項羽かうよ宋義そうぎを河上かじやう殺ころす及およて懷王くわい因よて項羽かうよを立て上將軍じやうじやうと爲なす
 せしかの諸將しよじやう皆項羽かうよ屬ぞくしけり項羽かうよ命めいして先河せんか水すいを涉わたり秦しんを撃うつ布ふ數しよく々く勝利しやうりを得えしか
 項羽かうよ廻まわち悉しよくく兵へいを引ひて河水かうすいを涉わたり之を從したがひて遂つひに秦しんの軍章邯じやうかん等とうを降くだし楚その兵常じやう勝しやうて功諸侯こうしゆの
 冠かむらたり諸侯しよの兵へいの皆みな以もつて楚そ屬ぞくし屬者じやくしやの布ふ數しよく々く少勢せうせいを以もつて衆兵しゆへいを敗やぶるか故ゆゑなり項羽かうよの兵へいを引
 て西せいの方新安しんあんに至いたりし時このとき又英布えいふ等とうをして夜擊よるて章邯じやうかん秦しんの卒そつ二十餘万人を抗あませしめ關かんに至いたり

りて入るとを得す又英布等えいふとう命めいして先間道せんかんだうより關下かんかの軍きんを破やぶらしめ遂つひに入いり咸陽かんやうの都とに至いたると
 を得たり英布常えいふじやう軍鋒ぐんせんと爲なりて功多こうたし項羽かうよ諸將しよじやうを封ほうして王わうとせし時布ふを立て九江王きうきやうと爲なし六の
 地ち都とせしめけり漢かんの元年四月諸侯皆しよ戲ぎ下げを罷やめて封國ほうこくと爲なし項羽かうよ懷王くわいを立て義帝ぎていと爲なし徙うつして
 長沙ちやうしや都とせしめ陰いん九江王きうきやう布等ふとう命めいして之を撃うつ其八月英布將しやうを遣やて義帝ぎていを撃うち之を追おひて柳
 縣りやうけんまで殺ころせし漢かんの二年齊王田嬰ちんえい楚その畔はなく項羽かうよ徙うつて齊せいを撃うつ兵へいを九江きうきやうに徵めいせし九江王きうきやう布病ふやまひと稱なづ
 して徙うつす將じやうを遣やり數千人を將ひきて行ゆかしむ漢かんの楚そを彭城ほうじやうに敗やぶる時布又病やまひと稱なづして楚そを佐たすけ項王かうわう此
 由よしり布ふを怨うらみ數々かずかず使者しやをして請讓せいじやうして布ふを召よしむ布愈ふよ々く恐おそれて敢あへて徙うつす項王かうわう方まさ北の方きたうの齊せい
 趙ちやうを憂うれひ西の方せいの漢かんを患うれふ與ともする所の者ひと獨ひとり九江きうきやうのみ又布ふの材さいを多たなりとし之を親用しんようせんと欲ほ
 する故未ゆゑだ撃うつ漢かんの三年漢王楚そを撃うつ大だい彭城ほうじやうに戰いくひし利りあらす梁りやうの地ちを出でて虞ぐに至いたり左右
 謂いつて曰いはく彼等かれらの如ごとき者ひと與とも天下てんかの事ことを計はかる足たるとなし謁者けつしや隨何ずいか進すすみ曰いはく臣しん陛下へいかの謂いふ所ところを
 審つまひらかよせず漢王かんわうの曰いはく孰たれか能よく我われか爲なす淮南わいなん使しひして之を以もつて兵へいを發はつして楚そ倍そむかす項王かうわうを
 齊せいに留とどむると數月すげつならは我われの天下てんかを取とると言いふから全ぜんふすへし隨何ずいか曰いはく臣しん請こふ之を使つかひせん
 乃すなはち二十人にじふにんと俱とも淮南わいなん使つかひす淮南わいなんの太宰たいさい因よて之を主しゆとして其舍しやに在ありける三日さんじつまで見みると
 を得えす因よて太宰たいさい説とて曰いはく王わうの何かを見みさるは必かなず楚そを以もつて強つよしと爲なし漢かんを以もつて弱よほしとするをらん
 此臣こゝか爲なす使つかひする所以ゆゑあり何かをして見まむとを得えせしめ之を言いて是こゝなる耶や是こゝ大王だいわうの聞きくと欲ほする

所ならむ之を言て非ある耶何等二十人をして斧質淮南の市に伏せしめて以て王の漢は倍きて楚と與するを明かよせよ大丈夫の事を爲す如此く有たけれ太宰之を王は言けれの王之を見けり隨何か曰く漢王臣は命して敬みて書を大王の御者に進めしむ竊は怪む大王楚と何り親きや淮南王の曰く寡人北郷して之は臣とし事ふれはあり隨何か曰く大王項王と俱に列して諸侯と爲り北郷して之は臣とし事ふるとの必ず楚を以て強くして國を託すへしと爲ならん項王齊を伐し時身板築を負て以て士卒の先と爲れり大王宜く淮南の衆を悉して身自ら之は將として楚の軍の先鋒と爲るへきと今麴は四千人を發して以て楚を助くるは夫北面して人は臣事する者の固より是の如くある者耶夫漢王彭城は戰ふ時項王未だ齊を出さるあり大王宜しく淮南の衆を騷ひて淮と渡り日夜彭城の下は會戰すへきと大王万人の衆を撫附て一人として淮水と渡り戰を爲す者なく手を垂拱て其孰か勝とを觀め玉ふは夫國を人託する者の固より是の如くある者か大王空名を提て以て楚は郷て厚く自託するを欲す臣竊は大王の爲は取さるなり然くして大王楚は背かざる者の漢を以て弱しとし玉へはあり夫楚の兵強しと雖も天下之は負しむるは不義の名を以てする其盟約を背て義帝を殺すを以てなり然而楚王戰ひ勝とを恃み自ら強しや今漢王諸侯を収め還て成皋滎陽を守り蜀漢の粟を下し溝を深くし壁壘は卒を分ち徼を守り塞は乘り楚人兵を還す時の間は梁の地を以てし深く敵國は入ると八九百里戰ひんと欲する時の得ず城を攻る時の力

能はず老弱糧を千里の外は轉ひ楚の兵滎陽成皋に至るも漢堅く守りて動かさる時の進ては攻るんと得ず退きては解るとを得ず故は曰く楚の兵は恃は足さるなり楚をして漢は勝しめは諸侯自ら危み懼れて相救ん夫楚の強きは適は以て天下の兵を致すは足のみ故は楚は漢は如さるとの其勢は見易し今大王萬全の漢は與せずして自ら危亡の楚は託す竊は大王の爲は之は感ふ臣淮南の兵を以て楚を亡すは足るとするは非ず夫大王兵を發して楚は倍かは項王必ず留らん留ると數月ならは漢の天下を取ると以て萬全あるべし臣請ふ大王と劍を提て漢は歸しかん漢王必地を裂て大王を報せん又況て淮南をや淮南は必ず大王の有あらん故は漢王敬て使臣をして愚計を進めしむ願くは大王の意を留んとを淮南王の曰く請ふ命を奉せんと陰は楚は畔きて漢は與するを許す未だ敢て泄さず此とき楚の使者も來りて方は急は英布を讓て兵を發せしめんと傳舎は舍りて在りしかは隨何直は入て楚の使者の上坐は坐して曰く九江王已は漢に歸したり楚何を以て兵を發せしむるとを得ん英布之を聞て愕然として驚きけり之を聞とひとしく楚の使は起て歸りける隨何因て布は説て曰く事以て搆れりさらは楚の使者を殺して歸らしむるとなくして疾く漢は走て力を并すへし布は曰く使者の教の如く兵を起して之を撃ん耳是は於て使者を殺し因て兵を發して楚を攻む楚項聲龍且は命して淮南を攻しむ項王留りて下邑を攻ると數月龍且淮南を撃て布の軍は破る布兵を引て漢は走らんと欲す楚王の之を殺さんとを恐る故は間行て隨何と俱は

漢よ歸しけり淮南王至りければ上方よ寐よ 据て足を洗ておのせしか其儘みて布を召し入れて見しむ布甚た大よ怒りて降しとを後悔し自殺せんと欲し出て舎よ就たりしし帳御飲食從官まで漢王の居と異なることありしかの又大よ喜ひて望よ過たりと思ひけり是よ於て廻ち人をして九江よ入らしむ楚己よ項伯よ命して九江の兵を収めしめ盡く黥布か妻子を殺させけり布か遣し使者の頗る故人幸臣を得て衆數千人を將て漢よ歸せしめけり漢益々布よ兵を分て與よ俱よ北の方兵を収て成皋よ至る四年七月布を立て淮南王と爲し與よ項籍を撃つ漢の五年布人をして九江よ入らしめ數縣を得たり六年布劉賈と九江よ入て大司馬周殷を誘きければ周殷楚よ反て遂よ九江の兵を舉て漢と楚と撃て之を垓下よ破る項羽死して天下定る上置酒ありて隨何の功を折き斥けて隨何の腐儒たり天下を爲るよ安んう腐儒者を用んと隨何跪きて曰く夫陛下兵を引て彭城を攻し時楚王未た齊を去す陛下步卒五万人騎五千を發して能て淮南を取らんか上の曰く能す隨何か曰く陛下何よ命して二十人と淮南よ使せしむ至て陛下の意の如くせり是何の功の歩卒五万人騎五千よ賢るなり而を陛下の謂のく何の腐儒者あり天下を爲るの安う腐儒者を用んと是何ある事うや上の曰く吾方よ子の功を圖んと乃ち隨何を以て護軍中尉と爲す黥布の遂よ符を剖賜りて淮南王と爲り六の地よ都せり九江廬江衡山豫章郡皆布よ屬す七年陳よ朝す八年雒陽よ朝す九年長安よ朝す十一年高后淮陰侯韓信を誅す布因て心よ恐る夏漢又梁王彭越を誅して之を醢よし

其醢を盛て徧く諸侯よ賜りて淮南よ至りけり淮南王方よ獵よ出んとせしよ此醢を見て因て大よ恐れ陰よ人よ命して兵を部聚旁の郡よ候伺させ急を警めさせけり布か幸する所の姫病よ係り請ふて醫よ就く醫の家の中太夫貴赫と門を對して向ひ合たり姫數々醫の家よ如くよ貴赫侍中官たるを以て廻ち厚く餽遺し姫よ從ひて醫の家よ酒を飲ける姫從容とせし語の次よ赫の長者なるとを譽しかの王怒て曰く汝安よ從ひて之を知るや姫具よ狀を説しかの王の其與よ乱するかと疑ひけり赫恐れて病と稱しける故王愈々怒りて赫を捕へんとせしかの赫の變事の由を天子よ告んと欲し傳よ乘て長安の都よ詣りけり黥布人を以て之を追しめけるよ及んす赫至て變を上る言ふ布か謀反端めあり未だ發せざるよ先て誅すへしと上其書を讀て蕭相國よ語られければ相國の曰く布よ於ての宜く此あるへからす恐くの仇怨ある者の妄よ之を誣たるあらん請ふ赫を繫置て人よ命して微よ淮南王か反迹を驗なん又淮南王布の赫か罪を以て亡て變を上るを見て固より己よ其國の陰す事情を言ひしかと疑ふ所へ漢の勅使又來り頗る驗あるとを見し容おれの遂よ赫か家を族し兵を發して反しけり反書所々より聞しければ貴赫を赦して將軍と爲し上諸將を召て問て曰く英布反せり之を爲んと如何諸將皆曰く兵を發して之を擊豎子と抗よせんのみ何事を爲得んや汝陰侯滕公故れ楚の令尹を召して之を問けるよ令尹の曰く是因より當よ反すへし滕公の曰く上地を裂て之を王とし爵を疏て之を貴くし南面して立萬乘の主と爲れりざるを是固より反すへ

しどの何事や令尹の曰く往年彭越を殺し前年韓信を殺せり此三人の功を同じくし体を一とする
 の人なり因て自ら禍の身及ふとを疑かふ故反するのみ滕公之上を言して曰く臣の客故の
 楚の令尹薛公と曰ふ者其人籌策の計あり問玉の如何と上廻ち召見て薛公問ふ薛公對て曰
 く布か反するの怪む足ざるあり布をして上計し出しめい山東の漢の有りの非るなり中計し出
 しめい勝敗の數未だ知るへからず下計し出しめい陛下枕を安くし臥し玉ふとも何事も爲すと能
 じ上の曰く何をか上計と謂や令尹對て曰く東の方吳國を取り西の方楚國を取り齊を并せ魯を取
 り檄を燕趙又傳へて固く其所を守らぬ山東の漢の有りの非るなり何をか中計と謂や東の方吳を
 取り西の方楚を取り韓の國を并せ魏の國を取り敖倉の粟を據り成泉の口を塞く時の勝敗の數未
 た知へからず何をか下計と謂ふや東の方吳と取り西の方下蔡を取り重を越の國へ歸し身長沙よ
 歸をい陛下枕を安して臥し玉ふとも漢事おし上の曰く是三つの計の中將は安よ出んとすると思
 ふや令尹對て曰く彼必ず下計し出せん上の曰く何故上中の計を廢て下計し出ると謂ふや令尹
 の曰く布の故麗山の徒なり自ら万乘の主を致せり此皆身の爲のみ後を顧みて百姓萬世の爲慮
 らざる者あり故曰く下計し出ん上の曰く善と薛公を千戸封しける廻ち皇子長を立て淮南王
 とし上遂は兵を發して自ら將として東の方英布を撃よけり布の初め反する時諸將は謂て曰く上
 年老たり兵も厭ひて必ず來ると能す諸將は命せん諸將の中よて獨り韓信と彭越を患るれみ今皆

己は死せり餘の畏るよ足すと故遂は謀叛せしか果して薛公の讎るか如く東荆と撃しか荆王
 劉賈走て富陵は死せり盡く其兵を劫して淮水を渡りて楚を撃しか楚の兵を發して與は徐僮は
 間は戰へり楚三軍を爲りて以て相救て奇兵を爲んと欲せしか或人楚の大將は説て曰く英布の
 善兵を用ふ民素より之を畏る且兵法は諸侯其地は戰ふを散地と爲せり然るを今別て三軍と爲し
 彼吾か一軍を敗らぬ餘の皆走ん安り能相救ふとを得ん大將聽す布果して其一軍を破る其二軍の
 皆散走たり遂は西して上の兵と斬の西會甄の地に出遇たり布か兵精と甚し上廻ち庸城の地は壁
 して布か軍を望むは陳を列ね置と項羽の軍の如くなれい上甚た之を惡み布と相望み見て遂は布
 は謂て曰く何を苦しむ憂ひて謀叛するや布か曰く帝と爲らんと欲するのみ上怒て之を罵り遂は
 大は戰ひけるは布の軍敗走し淮水を渡退て數々止り戰ひしも勝利なかりしかは百餘人と江南は
 走りけり布故番君と婚し居りし故を以て長沙の哀王人をして布を給きて偽て與は亡誘きて趙の
 國へ走らしむ故は信して隨ひ番陽の之しかは番陽の人布を茲郷の民の田舎は殺しける遂は皇子
 長を立て淮南王と爲し賁赫を封て期思侯と爲す諸率功を以て封せられし者多かりける
 太史か曰く英布者其先祖の豈春秋は見る所の楚英六を滅す卑陶の後あるか身刑法を被りて何り
 其拔興するとの暴あるや項氏の坑は殺す所の人千方を以て數ふへし而るを布常は首虐となれ
 り功諸侯は冠と爲り此を用て王たるを得れとも亦身世の大僇と爲るよ免れず禍の興るは愛姫

より殖りたり妬媚患へを生じ竟も以て國を滅せり

淮陰侯列傳第三十二

淮陰侯韓信者淮陰の人なり始め布衣たりし時貧して行ひなし推擇られて吏と爲るを得ず又生を治て商賈すると能す常も人より從ひて食飲を寄せまかひ人之を厭ふ者多し常も數々其下郷の南商亭の長より從て寄食せし數月にして亭長の妻之を患ひ乃ち晨も炊き辱し食ひ食時より信往しも爲る食を具へず信も亦其意を知り怒て竟も絶去れり信城下より釣す諸母漂せり一人の母ありて信の飢たるを見て信も飯せしむ漂を竟るまで數十日養ひけれの信喜ひて漂母より曰けるの吾必ず重し母も報ゆるとあらん母怒て曰く大丈夫自ら食すると能す吾王孫を哀て食を進し豈報を望んや淮陰の屠中の少年信を侮る者あり曰く若長大して好て刀劍を帶たれども中情怯なるのみと衆よして之を辱しめて曰く信能死するならん其劍を以て我を刺せかし死し得ずの我が袴の下より出よ是時信少年等を執り視てありしか臆て俛して袴の下より出て蒲伏たり一市の人信を笑て以て怯者とせり楚の項梁淮水を渡るも及て韓信劍を杖て之より從ひ戲下より居り名を知らるる所なし項梁敗れて又項羽も屬せり羽以て郎中の官とせり數策を以て項羽を干せしも羽用ひず漢王の蜀に入る時信楚を亡て漢に歸し未だ名を知るるを得ず連敖の官と爲りし法も坐せられて斬罪も當しける其輩十三人皆已に斬れ次信も至れり信乃ち仰き視る適々滕公を見て曰く上天下を就

とを欲せざるか何爲り壯士を斬るや滕公其言を奇とし其貌を壯として釋して斬す與も語て大も之を説ひ之を上も言す上拜して治粟都尉と爲す上未だ之を奇とせざる有り信數々蕭何と語る何之を奇とせり南鄭も至りし時諸將行道して亡る者數十人信度るも何等已に數々上も言しならん上我を用ひすと即ち亡去けり蕭何信か亡ると聞き大も驚て上も以聞き及ひず自ら馬も鞭うちて之を追掛たり人上も言ふ者あり曰く丞相何亡たりと上大も怒て左右の手を失ふか如し居ると一二月ありて何來て上も謂す上且怒り且喜ひ何を罵て曰く若亡るとい何事や何か曰く臣敢て亡す臣の亡る者を追留たり上の曰く若の追所の者誰や何か曰く韓信あり上復罵て曰く諸將の亡る者十を以て數ふへしざるを公追留る所なま信を追ひ詐りならん何か曰く諸將の得易きのみ信か如きも至りて一國無雙の士と謂ふへし王必ず長く漢中も王たらんと欲せの信を事とする所なし必ず天下を争ひんと欲せの信も非れの與よとを計る者あり願も王の策安も決する所あらん王の曰く吾も亦東せんと欲するのみ安も能辯々として此地も居んや何か曰く王の計必ず東せんと欲せの能信を用ひよ信即ち留らん用ると能はずん信終に亡去らんのみ王の曰く吾公の推擧なれの將とせん何か曰く將と爲すと雖も信必ず留まらじ王の曰くさらん是非なし大將とせん何か曰く幸ひ甚たし是も於て王信を召て之を大將も拜せんとしけれの何か曰く王素より無禮なり今大將も拜すると小兒を呼か如きのみ此乃ち信か去る所以あり王必ず之を拜せんと欲せの

て臨晋を渡らんと欲し而して兵を伏て夏陽より木罌餒を以て軍を渡して安邑を襲ひければ魏王豹驚きて兵を引て信を迎きけれども不意の一戦は大に打勝韓信遂に豹を虜に玄魏と定て河東郡と爲しよけり漢王張耳を遣て信と俱に兵を引て東北の方趙代を撃しむ後の九月代の兵を破り夏説を闕與に禽よす韓信の魏を下し代を破る時漢輒ち人をして其精兵を收て滎陽に詣りて以て楚と距かしむ信の又兵數萬を率て東の方井陘を下りて趙を撃んと欲す趙王成安君陳餘の漢の且よ之を襲んとするを聞兵を井陘口に聚め号して二十万と稱す廣武君李左車成安君よ説て曰く聞く漢の將韓信西河を涉り魏王を虜よし夏説を禽よして新血を闕與に噓して勝誇たるよ今乃ち輔るよ張耳を以てし議して趙を下んと欲す此勝よ乘て國を去り遠く門ふ其鋒當るべからず臣聞く千里糧を餽る時の士は飢たる色あり樵蘇て爨時の師宿飽せずと今井陘の道車軌を方るとを得ず騎列を成すとを得ず行と數百里其勢糧食必ず其後よ在らん願くは足下臣よ奇兵三万人を假せ間路より其輜重を絶ん足下溝を深し壘を高し營を堅して與に戰ふと勿れ彼前て門ふとを得ず退て還とを得ず吾奇兵其後を絶ち野を掠る所無らしめ十日よ至らすして兩將の頭戲下よ致すへし願ひ君意を臣の計よ留めよ否の必ず二子よ禽よせられん成安君の儒者なり常よ義兵と稱し詐の謀奇なる計を用ひす曰く吾聞く兵法よ十ある時の之を圍み倍する時の戰ふと云へり今韓信の兵數万と號するも其實の數千よ過す能千里よして我を襲ふ亦已よ罷極らん今此の如き兵を

避て擊されの後よ大衆の攻來るとあらん何を以て加之よ加ん則諸侯吾を怯しと謂て輕しく來て我を伐んと廣武君の策を聽す韓信人を以て問視のせけるよ其策用ひられざることを知て還て報せければ則ち大に喜ひて乃ち敢て兵を引て遂に下り未だ井陘口よ至らざると三十里よして止り舍し夜半よ至て傳發し輕騎二千人を選ひ人ことよ一本の赤幟を持しめ間道より山を算よして趙の軍を望ましめ誠て曰く趙我か走るを見る時の必ず壁を空くして逐來らん若疾趙の壁よ入り趙の幟を拔去て漢の赤幟を立よ其裨將よ命して殮を傳しめて曰く今日趙を破て會食せん諸將此言を聞て信する者なし伴り應て曰く諾又軍吏よ謂て曰く趙已よ先便地よ據て壁を爲せり且彼未だ吾か大將の旗幟を見されの未だ肯て前行を撃す恐くの吾嶮岨よ至て還んと信乃ち万人をして先行せ出て水を背よして陣を布しむ趙の軍望み見て大に笑ふ平且信大將の旗幟を建て鼓行して井陘口より出つ趙壁を開て之を撃ち大に戰ふと良久し是よ於て韓信張耳旗鼓を棄て水上の軍よ走る水上の軍開きて之を入る趙果して壁を空くして漢の鼓旗を争ひ韓信張耳已よ水上の軍よ入る水上の軍水を背よ爲せし故退きて溺れんより進て敵よ死せんものと必死と戰ひたりしかの趙軍敗るとを得ず韓信か出す所の奇兵二千騎共よ趙の壁を空くして利を逐て候ひ則馳て趙の壁よ入り皆趙の旗を拔去て漢の赤幟一千を立て旭よ輝して備たり趙の軍の已よ勝す韓信等を得ると能ひす還て壁よ歸んと欲すれこの如何よ皆漢の赤幟なりければ大に驚きて以

爲く漢言己よ趙王の大將を得たりと趙の兵遂に乱れて遁走りければ趙の大將之を斬て走る者を留めんとしけれども禁むると能はず是に於て漢の兵爽み撃て大に破り趙の軍を虜にし陳餘を泝氷の上より斬り趙王歇を禽よせり韓信乃ち軍中よ令すらく廣武君李左車を殺すと母れ能生得者あらん千金よ購んと是に於て廣武君を縛して戲下よ致す者あり信乃ち其縛を解き東よ郷て坐せしめ自ら西よ郷ひて對坐し之よ師とし事へけり聽て諸將等首虜を効し休息して畢く勝利を賀し因て信よ問て曰く兵法よ山陵を右よし倍き水澤を前よし左よすと今者將軍臣等をして反て水を背よまて陳せしめて曰く趙を破りて會食せんと臣等其時の心よ服せさり然るも竟も以て勝得たるに此何の術あるや信か曰く此兵法よ在り願ふ諸君察せざるのみ兵法よ曰すや之を死地よ陷れて而して後生き之を亡地よ置て而して後存すと且信素士大夫を拊循たるよ非ず此所謂市人を驅て戰はず者よ其勢ひ之を死地よ置き人々よして自ら戰を爲するよ非ずして今之よ生地を與へん皆走らん寧か尙得て之を用ゆへけんや諸將皆服して曰く善し臣の及ぶ所よ非ずと是に於て信廣武君李左車よ問て曰く僕北の方の燕を攻め東の方の齊を伐んと欲す何若して功あらん廣武君辭謝して曰く臣聞く敗軍の將の以て勇を言へからず亡國の大夫の以て存を圖るへからずと今臣の敗亡の虜何う以て大事を權よ足んや信の曰く僕之を聞く百里奚虞よ居て虞亡ひ秦よ在て秦霸たり虞よ愚よして秦よ智なるよの非ず用ると用ひさると聽と聽さるとなり誠成安君をして

足下の計よ慮しめ信の如き者も亦己よ禽とせたらん足下を用ひさるを以て故よ信侍るとを得るのみ因て固く問て曰く僕心を委ね計を歸す願くは足下辭すると勿れ廣武君の曰く臣聞く智者も千慮よ必す一失あり愚者も千慮よ必す一得ありと故よ曰く狂夫の言も聖人擇ふと願ふ臣の計未だ必すしも用ゆるよ足す願くは愚忠を效さん夫成安君百戰百勝の計あるを一旦よして之を失ひ軍部の下よ敗れ身泝の上よ死す今將軍西河を涉り魏王を虜よし夏説を禽よし一舉して井陘を下り朝を終すして趙の二十萬衆を破り成安君を誅せり名の海内よ聞へ威の天下よ震へり農夫も耕を輟め耒を釋て衾衣甘食して甲を傾けて以て命を待さる者あり此の若き將軍の長する所あり然れども衆勞れ卒罷れ其實の用ひかたし今將軍倦疲たるの兵よ擧て之を燕の堅城の下よ頓さんと欲すれは恐くは久よして力拔と能す情見れ勢屈み曠日よして糧竭て弱燕服せずんは齊の軍必ず境よ距て以て自ら強くせん燕齊相持して下らすんは劉項の權未だ分る所有へからず此の如き者よ將軍の短き所あり臣愚よして竊よ以爲く過てりと故よ善兵を用ゆる者よ短を以て長を擊すして長を以て短を擊韓信か曰く然時の何よ由て善らん廣武君對て曰く方今將軍の爲よ計よ甲を案め兵を休へ趙を鎮め其孤を撫て百里の内牛酒日よ至り以て士大夫を饗し兵よ驛せ北の方燕路よ向ふよ如くは而して後辨士を遣り咫尺の書を奉して其長する所を燕よ暴さの燕必しも敢て聽從いすんはあらず燕已よ從ひなり諠言の者よ命して東の方齊に告しめ齊必す風よ從ひて服せ

ん智者有と雖も亦齊の爲に計ることを知らず是の如くなる時天下の事皆圖るべきあり兵の固より聲を先よして實を後よするとの此の謂あり韓信の曰く善しと其策よ從ひ使を發して燕よ使せしめければ燕の風よ從ひて靡き從へり乃ち使を遣て漢王よ報せ因て張耳を立て趙王と爲して以て其國を鎮め撫んと請けるよ漢王之を許しけり乃ち張耳を立て趙王と爲す楚數、奇兵を出して河水を渡りて趙を撃しむ張耳韓信往來して趙を救ひ因て行て趙の城邑を定む兵を發して漢よ詣らしむ楚方よ急よ漢王を滎陽よ圍む漢王南よ出て宛葉の間よ之き黥布を得て走て成阜よ入る楚復急よ之を圍む六月漢王成阜を出て東して河水を渡り獨勝公と俱よ張耳の軍よ修武の地よ從ひ至て傳舍よ宿し晨よ自ら漢の使なりと稱し馳て趙の壁よ入るよ張耳韓信未だ起出す其臥内よ即て上其印と符を奪て諸將を麾召て之を易置けり信耳起出て乃ち漢王の來ることを知りて大よ驚きける漢王兩人の軍士を奪ひ即ち張耳よ命して趙の地を備へ守らしめ韓信を拜して相國と爲し趙を兵の未だ發せざる者を収て齊の國を撃しむ韓信兵を引て東し未だ平原を渡らざるよ漢王鄒食其をして已よ説て齊を下さしむ韓信兵を止めんと欲す范陽の辨士蒯通信よ説て曰く將軍詔を受けて齊と撃て漢獨間使を發して齊を下す寧ろ詔ありて將軍を止むるか何を以て行と母とを得んや且鄒生一士よて軾よ伏し三寸の舌を掉して齊の七十餘城を下したり將軍數万の衆よ將たると歳餘よして趙の五十餘城を下せり大將たると數歳反て一豎儒の功よ如さらんやと是よ於て信之を然

りとして其計よ從ひて遂よ河を渡りけり齊王の已よ鄒生よ聽し即ち留りて酒を縱よし漢よ備ふる守禦を罷けり信因て齊の歴下の軍を襲ひ遂よ臨菑の都よ至りける齊王田廣鄒生を以て已を賣として乃ち之を烹殺して高密の地へ走使を楚よ遣て救を請らしむ韓信已よ臨菑を定め遂よ東の方田廣を追て高密の西よ至る楚も亦龍且を將たらしめ号して二十萬と稱して齊を救しむ齊王廣龍且軍を并て信と戰ふ或人龍且よ説て曰く漢の兵遠く門て窮戦せり其鋒當るへからず齊楚自ら其地よ居て戰ふ兵敗れ散易し壁を深くし齊王よ令せしめ其信臣をして亡ふ所の城を招かしむるよ如す亡城の人々其王在し楚來り救ふと聞なれば必ず漢よ反かん漢の兵二千里の客居なり齊の城之よ反せれば其勢ひ食を得る所なし戰ふと無くして降すへし龍且か曰く吾平生韓信の人と爲りを知れり與し易きのみ且夫齊を救ひ戦はずして之を降すの吾何の功かあらん今戰ひて之よ勝なり齊の半の得へし何う止るとを爲んと遂よ戰よ決し韓信と濰水を爽て陣したり韓信乃ち夜士卒よ一萬餘の囊を爲らせ沙を盛滿て水の上流を壅かせ軍を引て半の渡りて龍且を撃ち伴りて勝する爲して還り走りければ龍且果して喜て曰く吾因より信の怯きとを知るとて遂よ追て水を渡る信人をして壅る沙囊を決せしむ水大よ至て龍且か軍大半渡るとを得ず即ち急よ撃て龍且を殺す龍且か水東よ遣りし軍の皆散々よ走よけければ齊王廣も堪えず亡去よける信遂よ北を追ふて城陽よ至り皆楚の卒を虜よせり漢の四年遂よ皆降して齊を平く人を以て漢王よ言して曰く齊の人民

の偽詐て變多く反覆の國なり南の方の楚と邊たり假王と爲りを之を鎮めざる時の其勢定まらず願くは假の王とあらんと便なりと此時も當て楚の項羽方は急漢王を榮陽に圍けり韓信の使者至る齋す所の書を發し見るは假王の請おれは漢王大に怒り罵りて曰く吾此に困み且暮る若か來て我を佐くると望みしは乃ち自立して王とならんと欲す張良陳平漢王の足と斷み因て耳に附て語て曰く漢方よ利ならず寧か能信の王たることを禁せんや因て立て善之を遇ひ自ら爲り守らしむるは如す然らされは變生せん漢王も亦悟り因て復罵て曰く太丈夫諸侯を定たれは即ち眞の王と爲んのみ何り假を以て爲んやとて乃ち張良を遣て往て信を立て齊王と爲し其兵を徵て楚を撃しむ楚己は龍且を亡ひ項王恐れ盱眙の人武渉をして往て齊王信に説しめて曰く天下共は秦よ苦むと久し相與り力を戮せて秦を撃ち秦己は破れて功を計り地を割き士を分て之を王とし以て士卒を休ふ今漢王復兵を興して東し人の分を侵し人の地を奪ふ己は三秦を破り兵を引て關を出諸侯の兵を収て以て東の方楚を撃つ其意尽く天下を呑み非れは体す其厭足とを知らざる是の如く甚たしきあり且漢王の必とすへからす身項王の掌握の中は居ると數あり項王憐みて之を活せり然るは脱るゝとを得れは輒ち約は背て復項王を撃つ其親み信すへからさると斯の如し今足下自ら以て漢王と厚き交を爲し之か爲り力を盡し兵を用ると雖とも終よ之を禽よせられん足下須臾も今よ至るとを得る所以の者は項王の猶存するを以ての故あり當今漢楚二王の事の權足下の

心よあり足下右よ投する時の漢王勝ん左よ投する時の項王勝ん項王今日亡る時の次の足下を取らん足下項王と故あり何り漢よ背て楚と連和し天下を參分して之よ王たらさる今此時を釋て自ら漢よ必して以て楚を撃つ且智者たる者の固より此の如き乎韓信謝して曰く臣項王よ事ふる時の官郎中よ過す位執戟よ過す言聽れす畫用られず故は楚を倍て漢よ歸せり漢王我よ上將軍の印を授け我よ數万衆を予へ衣を解て我よ衣せ食を推て我よ食しむ言聽れ計用ひらる故は吾此よ至るとを得たり夫人深く我を親み信するよ之よ倍くは不祥あり死すと雖とも易す幸は信か爲り項王よ謝せよ武渉己は去りけり齊人酈通天下の權韓信よ在ることを知り奇策を爲して之を感動せんと欲し人を相するを以て韓信よ説て曰く僕嘗て人を相するの術を受たり韓信か曰く先生人を相するとい何如對て曰く貴賤の骨法は在り憂苦の客色は在り成敗の決斷は在り此を以て之を參するよ万よ一を失はす韓信か曰く善し先生寡人を相するい何如對て曰く願は少く問せよ信か曰く左右の者去るへし通か曰く君の面を相するよ封侯よ過す又危くして安からず君の背を相するよ貴きと乃ち言ふへからす韓信か曰く何の謂りや酈通か曰く天下初て難を發するや俊雄豪傑號と建て壹呼へは天下の士雲の如くは合ひ霧の如くは集り魚鱗の如くは雜逐し燦の如くは至り風の如くは起る此の時よ當りて憂へ秦と亡すよ在るのみ今楚と漢と分れ争ひ天下罪なきの人をして肝膽地は塗れ父子骸骨を中野よ暴さしむると數るよ勝へからす楚人彭越よ起り轉門して北

るを逐て滎陽に至る利に乗じて席の如く卷き威天下を震へり然れども兵京索の間を困み西山を迫て進むと能はざる者此は三年漢王數十萬の衆を將て鞏雒を距き山河の險を阻て一日は數戦し尺寸の功なく折け北て救はず遂は宛葉の間を走る此所謂智勇俱は困む者なり夫銳氣險塞は挫けて糧食内府は竭き百姓罷極怨望し容々として倚る所なし臣を以て之を料は其勢ひ天下の賢聖は非れは因より天下の禍を息ると能はず當今兩主の命足下は懸れり足下漢の爲はすれは則ち漢勝かん楚は與すれは則ち楚勝かん臣願は腹心を披き肝膽を輸し愚計を效さん恐くは足下用ゆると能はざることを誠は能臣の計を聽なは兩ら利して俱は之を存し天下を三分し鼎足して居は若し其勢ひ敢て先動くは有るとなかれ夫足下の賢聖を以て甲兵の衆を有ちて強き齊國は據り燕と趙とを從へて空虚の地は出で其後を制し民の欲は因て西は郷て百姓の爲は命を請ふ時は天下風は如く走て響の如く應せん孰か敢て聽さらん大を割き強を弱めて以て諸侯を立ん諸侯己は立て天下服聽して德は齊は歸せん齊の故を案て膠泗の地を有ち諸侯の德を懷き深く拱き揖讓する時は天下の君王相卒て齊は朝せん蓋し天の與ふるを取されは反て其咎を受く時至りて行はされは反て其殃を受く願くは足下孰く之を慮れ韓信か曰く漢王我は遇すると甚は厚し我を載るは其車を以てし我は衣するは其衣を以てし我は食するは其食を以てす吾之を聞く人の車は乗者は人の患を載し人の衣を衣する者は人の憂を抱き人の食を食するは人の事は死すと吾豈以て利欲は郷ひ義は

信く可んや蒯生か曰く足下自ら以爲く漢王は善と爲し万世の業を建んと欲せり臣竊は以爲く誤れりと始め常山王張耳成安君陳餘布衣たりし時相與は刎頸の交を爲したりしも後張驥陳澤の事を争ひて二人相怨み常山王は項王は背き項を奉て竄逃て漢王は歸したり漢王兵を借て東は下らしめ成安君を泝水の南は殺し頭足處を異はし卒は天下の笑と爲りたり此二人相與すと天下の至驢なり然くして卒は相禽は至る者は何うや患は欲多きは生して人の心の測かたき故はこころ今足下忠義信實を行ふて以て漢王は交らんと欲するも必ず張耳陳餘二君の相固より固きと能はざるへし而事は多くして張驥陳澤よりも大あり故は臣以爲く足下漢王の己を危くせざるは必ずしも亦誤れり大夫種范蠡亡越を存し其君勾踐を伯とし功を立名を成して身死亡せり野の獸己は盡れは獵狗烹らると曰へり夫交友を以て之を言ふ時張耳と陳餘とは如き者あり忠信を以て之を言ふ時大夫種范蠡の勾踐は於るは過ざるなり此二人の者以て觀て法とするは足れり願くは足下深く之を慮かれ且臣聞く勇略主を震しむる者の身危し功天下を蓋ふ者の賞せられず臣請ふ大王の功略を言はん足下西河を陟り魏王を虜はし夏説を禽はし兵を引て井陘を下り成安君を誅し趙を徇は燕を脅し齊を定め南の方楚人の兵を摧く事二十万東の方龍且を殺し西は卿を以て漢王は報す此所謂功天下は二ツかくして略世は出さる者なり今足下主を震しむるの威を戴き賞せられざるの功を挾みて楚は歸するとも楚人信せず漢は歸するとも漢人震し恐れ

ん足下是を持て安の處に歸せんとするや夫勢人臣の位に在て主を震ふの威あり名天下に高し竊
 よ足下の爲よ之を危む韓信謝して曰く先生且く休せよ吾將も孰と之を思慮すへしと後數日蒯通
 復説て曰く夫聽とい事の候なり計の事の機なり聽と過り計失て能久く安き者の鮮し聽と一二を
 失のさる者の乱言を以てすへからず計本末を失のさる者の紛ふ辭を以てすへからず夫厮養の
 役も隨ふ者の万乗の權を失ひ儋石の祿を守る者の卿相の位を闕ふ故も知れ決乃斷あり疑の事の
 害あり毫釐の小計を審かよして天下の大數を遺れ智識よ之を知り決して敢て行のさる者の百事
 の禍あり故も曰く猛虎の猶豫の蜂の螫ことを致すも若す騏驥の踟躕するの驚馬の安行よ如す
 孟賁の狐疑するの庸夫の必至よ如す舜帝禹王の智有と雖も吟て言のされの瘡蠆の指麾するよ
 如すと此能之を行をふ貴ふとを言なり夫功の成り難くして敗れ易し時の得がたくして失ひ易き
 あり時乎此時の再ひ來らず願くは足下詳かよ之を察せよ韓信猶豫して漢よ背くよ忍す又自ら以
 爲く功多し漢終よ我か齊を奪はずと遂も蒯通よ謝しけり蒯通説聽れさるよより己よ伴り狂と
 爲り巫よて世を送りけり漢王の固陵も困む時張良の計を用ひて齊王信を召て遂も兵よ大將とし
 て垓下の地よ會せしむ項羽已も破れ高祖襲て齊王の軍を奪ひけり漢の五年正月齊王信を徙して
 楚王と爲し下邳も都せり信國よ至る從て食する所の漂母よ千金と賜ひ及び下郷の南昌亭の長も
 百錢を賜ふて曰く公の小人あり徳を爲すと卒す已を辱むるの少年勝の下より出さしむる者を召

て楚の中尉の官となし諸將相も告て曰く此壯士なり我を辱むる時よ方て我軍ろ之を殺すと能さ
 らんや之を殺せし名なき故も忍て此も辱を就たりと項王の亡將鍾離昧の家も伊廬も在り素より
 韓信と善し項王死して後亡て韓信も歸したり漢王味を怨む其楚の國も在とを聞き楚も詔ありて
 味を捕しむ信初て國よ之き縣邑を行るよ兵を陳て出入せり漢の六年人の上書して楚王信反すと
 告る者あり高帝陳平の計を以て天子巡狩して諸侯を會す南方よ雲夢の澤ありて名勝なり使を
 發して諸侯も告陳も會せよ吾將も雲夢も遊んとすと實の信を襲んと欲す信更も知らず高祖將も
 楚も至らんとす信兵を發して反せんと欲す自ら度も罪なき上も謁んと欲す禽られんとを恐る人
 或の信も説て曰く昧を斬て上も謁かり上必ず喜ひて患へあからん信味を見て事を計る味か曰く
 漢の撃て楚も取らざる所以の者の味か公の所も在るを以ての故なり君我を捕て以て自ら漢も媚
 んど欲せし吾今日死するならん公も亦手も隨て亡ひなんと乃ち信を罵て曰く公の長者も非すと
 卒も自ら到けり信其首を持て高祖も陳も謁しけり上武士も命して信を縛らしめて後車も載られ
 けり信の曰く果して人の言の如し狡兔死して良狗烹られ高鳥盡て良弓藏れ敵國破れて謀臣亡ふ
 と天下既も定れり我固より當も烹らるへし上の曰く人公の謀反を告たりとて遂も信を械繫て洛
 陽も至り信の罪を赦して淮陰侯と爲す信漢王の己か能を畏れ惡むとを知りて常も病と稱して朝
 從せず信此より日も怨望せり居常鞅々の容もて絳侯灌嬰等と列することを羞つ信常て樊將軍噲も

過く噲跪き拜して送り迎ひをさし言ひ臣と稱して曰く大王乃ち肯て臣は臨むと信門を出て笑て曰く生ての乃ち噲等と伍を爲す恥甚しと上常て從容として信と諸將の能不言ふは各々差ありけるよ上問て曰く我か如きの幾何の人を將たるへき信か曰く陛下の能十萬を將たるよ過す上の曰く君の如きの幾何の人を將たるや曰く臣の多ければ多くして益々善のみ上咲て曰く多ければ多くして益々善き者何爲よ我か擒と爲たるう信か曰く陛下の兵卒を將たると能すして善大將を將たり大將十萬人の將たるへき陛下を擒と爲りたる所以の宜あらずや且へ陛下の所謂天の授るよて人の力の及ふ所よあらず此時しも陳稀と曰ふ者拜せられて鉅鹿の太守と爲り韓信の家へ辭よ往けるよ韓信其手を携へて左右の臣を斥け庭上よ歩み天を仰て歎し曰く子と與よ言ふへきか子と言とあらんと思ふなりと陳稀之を聞て曰く唯將軍の令よ任せん韓信の曰く公の居る所の天下の精兵の地あり而へ公の陛下の信し幸する所の臣なり人の公の天子よ畔りと言とも陛下必ず信せず再び其報至りあり陛下必ず疑はん三たひ其報至りあり必ず怒て自ら將たらん我公の爲よ中より起りなひ天下を取ると圖るへし陳稀素韓信の能を知り居る事故之を信して曰く謹て教を奉すと漢の十一年よ陳稀果して謀反せり上自ら將として往けり信病ありて從はず陰よ人を稀か所へ遣して曰く第兵を舉よ吾此地よて助ん信乃ち謀て家臣と夜詔と詐りて諸官の徒奴を赦して發して以て呂后太子と襲んと欲し部署已よ定りて稀の報を待けるよ其舍人罪を韓信

よ得たり信囚て之を殺さんと欲しければ舍人の弟變と上り信の謀反の狀を呂后よ告げる呂后信を召んと欲すれとも其儻の召よ就さるとを恐れ乃ち蕭相國と謀り詐りて人をして上の行宮より來る者とし稀已よ死するを得たり列侯群臣皆賀よ參内すへしと相國韓信を欺きて曰く疾と雖とも強て入て賀せよ信以爲く我計の未だ露れすと入て賀しければ呂后武士よ命して信を縛せしめ之と長樂宮の鍾室よ斬る信斬る、よ方て曰く吾悔らくの蒯通の計を用ひて乃て兒女子よ詐かる、とを豈天よ非ずや遂よ信の三族を夷けり高祖已よ稀か軍より至り信の死を見て且喜ひ且之を憐み信か死する時亦何とか言ひしと問の后の曰く信蒯通の計を用ひさるとを恨むと言したりと高祖の曰く是齊の辨士なり在所禍を受んと乃ち齊よ詔して蒯通を捕へしむ蒯通至る上の曰く若韓信よ謀反を教たるか對て曰く然り臣固より之と教へたり然るを豎子臣の計を用ひず故よ自ら此よ夷けられたり如彼豎子臣の計を用ひて陛下安り得て之を夷んや上怒て曰く之を烹よ通か曰く嗟乎冤あるか烹らる、と上の曰く若韓信よ謀反を教へたり何り冤と謂とを得んや對て曰く秦の綱絶維弛みて山東の國々大よ擾れ異姓並ひ起り英俊烏の如く集る秦其鹿を失し天下の人々共よ之を逐て捕へ得んとす是よ於て高材疾足なる者先得たり盜跖の畜る狗堯帝を吠るの堯の不仁なるよの非す狗固より其主よ非るを吠るや是時よ當て臣唯獨り韓信を知るのみ陛下を知るよ非るあり且天下精を鋭くし鋒を持て陛下の爲所をせんと欲せし者甚た衆かりしも願よ力

能さるのみ是人々も又盡く之を烹る可きや高帝の曰く之を置せ乃通の罪を釋せり
太史公曰く吾淮陰は如きしは淮陰の人余か爲言し韓信布衣たり其時より其志衆人と異なり其母の死する時貧くして以て葬ると無し然るは乃ち行て高敞地を營み葬り其旁は萬家の邑を置へからしむ余其母の塚を視るは良し然り假韓信をして道を學ひ讓り讓て己か功を伐す己か能よ矜らさらしめり則ち庶幾するかな漢家の勳は於て周召太公の徒に比て後の世までも血食すへし此も出るを務めずして天下已に集りて後乃て畔逆を謀る宗族を夷け滅さるゝ亦宜からずや

韓王信 盧縮列傳三十三

韓王信の故の韓の襄王の孽孫なり長八尺五寸項梁の楚の後懷王を立るは及て燕齊趙魏の國々の前より王たり唯韓のみ後あるとさし故に韓の諸公子橫陽君成を立て韓王と爲し以て韓の故地を撫定めんと欲す項梁敗れて定陶に死しければ成の懷王の所へ奔りけり沛公兵を引て陽城を撃し時張良は命して韓の司徒を以て韓の故地を降下さしむ信を得て以て韓の將とさせしは依り信其兵を將て沛公に從ひて武關に入りける沛公漢王と爲る韓信從て漢中に入り乃ち漢王に説て曰く項王諸將を近地より王として王獨り遠く此地に居れり此左遷と謂へし士卒は皆山東の人にして跋て歸ることを望めり其鋒の東に向ふ及ては以て天下を争ふへし漢王還て三秦を定む乃ち信を許して韓王と爲す先信を拜して韓の太尉と爲し兵を將として韓の地を畧せしむ項羽の諸王を封する時

皆國を就く韓王成從ひす功なきを以て遣て國を就しめす更て以て列侯と爲す漢韓信を遣て韓の地を畧すと聞及ひて乃ち故項羽か吳も游し時の吳の令鄭昌を韓王と爲して以て漢を距かしむ漢の二年韓信韓の十餘城を略定す漢王河南に至る韓信急し韓王昌を陽城に撃ければ昌は降ぬ漢王乃ち韓信を立て韓王と爲す常は韓の兵を將ひて高祖に從ひけり三年漢王滎陽を出つ韓王信周苛等滎陽を守れり楚滎陽を破るは及て信楚に降る已にして亡を得て復漢に歸す漢復立て以て漢王と爲し竟は從ひて項羽を撃破り天下定めり五年春遂は與符を剖て韓王と爲し潁川は王とす明年の春上以爲韓信の材武あり王たる地の北の鞏洛は近く南の宛葉は迫り東は淮陽有り皆天下の勁き兵ある所なりと廼ち詔して韓王信を徙して太原は王として北の方胡を禦し備へて晉陽は都せしむ信上書して曰く國邊を被り匈奴數々入て寇せり晉陽の塞を去ると遠し之を防ぐは便からず請ふ馬邑は治所を構へん上之を許せり信乃ち徙て馬邑を治所と爲しはけり秋匈奴の冒頓大は韓信を圍みしかの信數々使を匈奴の營に遣て和解を求めし中漢もて兵を發して之を救ひ信か數々間使を遣すを以て二心あるかと疑ひ人を以て信を責讓しめければ信誅せられんと恐れ因て匈奴と約して共は漢を攻め反て馬邑を以て胡に降て太原の地を撃しけり七年の冬上自往きて信か軍を銅鞮に撃破り其將王喜を斬る信亡て匈奴に走る其將白土の人曼丘臣。王黃等と趙の苗裔趙利と立て王と爲し又信か敗れ散したる兵士を收て信及び冒頓と謀て漢を攻む匈奴左右

賢王を萬餘騎マンリウキ將として王黃等と廣武クワフと屯して以て南して晉陽シンヤウに至らしめ漢の兵と戰ふ漢大之を破り追て離石リシキに至て後復之を破りたり匈奴復兵を樓煩ロウハンの西北キホクに聚む漢車騎をして撃て匈奴を破らしむ匈奴常敗走せしか漢勝カンカウに乗て北るを追て冒頓代の上谷コクに居ると聞て高皇帝普陽より冒頓を視せしめけるハク還報して曰く撃へしと上遂平城ヘイゼウに至る匈奴の騎兵上を圍みて甚た苦戰クハクに至りしか上人をして厚く冒頓の妻の閼氏カクシを物を遺れける閼氏乃ち冒頓ハクドウを説て曰く今漢の地を得るとも猶居ると能はず且兩王相厄せずと居と七日胡の騎兵稍々タンク引去りけり時天大に霧降クワフキけれ漢マテ人を往來せしむるハク胡の騎兵キヒ覺らざりき護軍中尉コクの陳平上チンヘイ言して曰く胡の弓矛キウマウのみの全兵ゼンあり請ふ強き弩キウマウ兩矢を傳て外ウチ向ムカしめん斯カクて徐ユルヤか圍みを出て平城へ入ける間マも亦漢の救ひ乃兵も亦到り胡騎遂解去り漢も亦兵を罷て歸りたり韓信匈奴の爲キム兵ヘイ將として往來して國邊クニノヘと撃ち漢の十年信王黃等をして説て陳豨を誤らしむ十一年の春故の韓王信復胡騎を將て入て參合サンカフ乃地居て漢を距みけれ漢の柴將軍命して之と撃しむ信キム書を遺て曰く陛下の寬仁クワンニあり諸侯シヨウは畔セウき亡る者有と雖イナども復歸する時トキの故の位號キウゴウ復して誅し玉タマさるハ大王の知る所シなり今王敗れ亡るを以て胡ハク走る大罪あるハ非シ急キウ自歸せよ韓王信報して曰く陛下僕を擢て閼巷カクヤウより起て南面して孤と稱するトを得さしむ此僕キムの幸なり滎陽の事僕死すると能す項羽キョウウ囚トる此一ヒトの罪なり寇馬邑コウマを攻るハ及て堅く守ると能す城を以て之ハ降

此二ニツの罪ツミなり今反て寇の爲ハ兵ヘイ將として將軍と一旦の命を争ふ此三サンツの罪ツミあり夫大夫種一罪ヒトツミなくして身死亡シす今僕陛下ヘイカ三罪ありて世ヨ活るとを求めんと欲するハ此伍子胥シゴか吳ウ償るハ所以ソノなり今僕山谷の間マ亡匿れ蠻夷マンイ乞貸キカれり僕ボクの歸るを思ふと痿アシたる人の起タツとを忘れず盲者メウシャの視るとを忘れさるハか如し勢不可なるのみ遂ツヒと戰ひと爲り柴將軍參合を屠り韓王信を斬キリしけり信の匈奴コウコ入る太子と俱トモす顔當城ゲンタウに至るハ及て子を生む因て名ナて顔當と曰ふ韓の太子も亦子を生む嬰エイと曰ふ孝文皇帝の十四年シヨウに至て顔當及ひ嬰其衆を率て漢マ降る漢顔當を封して弓高侯と爲し嬰を襄城侯と爲す吳楚の軍の時弓高侯の功諸將の冠たり子コ傳へ孫ソに至る孫子ソ亦侯を失ふ嬰の孫ソ不敬ケイ坐して侯を失へり顔當の孽孫韓嬀ヘイ貴幸せられて名富當世フタウ顯るハ其弟説再ヒ封せられ數々將軍と稱す竟ツヒ案道侯と爲る子代カヘて歳餘サイヨして法ハフ坐して死す後歳餘コノチして説の孫曾拜ヘイせられて龍額侯と爲り説の後を續けり

盧縮ロシュクの豊人トウあり高祖と里リを同くす盧縮の親チ高祖の太上皇と相愛せり男を生ハ及て高祖盧縮と日ヒを同くして生たり里中の人々羊と酒とを持て兩家へ賀を陳チよけり高祖盧縮の壯サカあるハ及て俱トモに書を學ふ又相親アヒみ愛しける里中兩家の親の相愛し子を生む同日壯サカよして又相愛するを嘉し復ヒ兩家リウカ羊酒を贈て賀しよけり高祖布衣たりし時吏事ありて辟匿ヒキカクれけるハ盧縮常ロシュク隨ひて出入上下せり高祖の初沛ハク起るハ及て盧縮客といふを以て從ひ漢中マ入る時將軍となり常トモ中ナカ侍り

けり東項羽を撃ける時太尉を以て常より従ひ臥内より出入し衣被飲食賞賜群臣敢て盧縮と同じからんとを望む者あり蕭何曹參等と雖も事を以て禮せらるゝのみ其親幸より至ての盧縮より及ぶ者なし封せられて長安侯と爲る長安の故の咸陽なり漢の五年の冬項羽を敗るを以て乃ち盧縮をして別將たらしむ劉賈と臨江王共尉を撃て之を敗る七月よりして還る從ひて燕王臧荼を撃藏荼降る高祖已より天下を定む諸侯劉氏より非ずして王たる者七人盧縮を王とせんと欲せしも群臣の觖望んとを恐れしか臧荼を虜にするより及て乃ち詔を諸將相列侯より下して群臣の功ある者を選て燕王と爲せど群臣上の盧縮を王と爲んと欲することを知り皆言して曰く太尉長安侯盧縮常より従ひて天下を平定し功最も多し王とすへし詔して之を許して燕王とす漢の五年八月乃ち盧縮を立て燕王と爲す諸侯王の幸を得るの燕王より如く者あるとなし漢の十一年秋陳稀代の地より謀反せり高祖邯鄲より如て稀か兵を撃燕王縮も亦其東北の方より之を撃たり是時より當て陳稀王黄をして救を匈奴より求めしむ燕王縮も亦其臣張勝を匈奴より使して稀か軍既より敗ると言しむ張勝胡より至る故の燕王臧荼の子術出亡して胡より在り張勝を見て曰く公の燕より重せらるゝ所以の者より胡の事より習ふを以てかり燕の久く存する所以の者より諸侯數々反して兵連りて決せざるを以てなり今公燕の爲より急より稀等を滅さんと欲す已より亡尽る時の次に必ず燕より至らん公等も亦且より虜と爲んとす公何より燕をして且より陳稀を緩く攻て胡と和睦せざる事寛なれり長く燕より王たるを得ん即漢の急ありとも

以て國を安すへし張勝以て然ありとし廻ち私より匈奴をして稀等を助て燕を撃しむ燕王張勝か胡と反するかと疑ひ上書して張勝を族殺せんと請し時しも張勝還て具より爲す所以を道しかの燕王悟り乃ち詐りて他人を論誅し勝か家屬を脱し匈奴の間を爲すとを得せしむ而して又陰より范齊をして陳稀か所より之かかしむ久しく亡畔して兵を連て決すると勿らしむ漢の十二年東の方豎布を撃稀常より兵より將として代より居る漢豎噲をして之を撃しめ陳稀を斬り陳稀か裨將より降りける燕王縮范齊として計謀を稀か所へ通せしむると言ふ者あり高祖使を以て盧縮を召さしむ縮病と稱して至らず上より辟陽侯審食其御史大夫趙堯より命して往て燕王を迎へしめ因て左右の臣を驗問させければ縮愈々恐れて閉匿り其幸臣より謂て曰く劉氏より非ずして王たるの獨り我より長沙とのみ往年の春漢淮陰を族誅し夏彭越を族誅せしり皆呂后の計あり今上病より係り呂后より屬任せり呂后の婦人かり専り以て異姓の王たる者及び大功の臣を誅するを事とせんと欲すと遂より病と稱して行す其左右の臣下皆亡匿れしより語頗る泄たり辟陽侯之を聞て歸りて具より上より報ければ上益々怒る又匈奴の降參の者を得て之を問けるより張勝の亡て匈奴より在て燕の使を爲せりと上の曰く庸縮果して反せりとて樊噲をして燕を撃しむ燕王縮悉く其宮人家屬數千を將て長城の下より居て伺候ひ上の病愈へり自ら入て謝せんと幸より四月高祖崩しぬ盧縮遂より其衆を將て亡て匈奴より入りける匈奴以て東胡の盧王と爲せり縮蠻夷より侵奪て常より復歸を思ふ居ると歳餘胡國より死しぬ高后の時

盧縮の妻子亡て漢は降る高后の病は會ひ見ゆるを能す燕の邸は舎り爲置酒して之を見んと欲せしは高后竟崩し見るとを得す盧縮の妻も亦病て死しぬ孝景皇帝の中六年は盧縮の孫他之東胡王を以て漢は降りけれの封して亞谷侯とせり

陳稀者宛朐の人なり始め從ふとを得る所以を知らず高祖の七年の冬は當り韓王信謀逆して匈奴は入るは及て上平城は至て還り麴稀を封して烈侯と爲す趙の相國を以て將として趙代の邊兵を監せり國邊の兵士皆屬しぬ稀常て告歸して趙を過たり趙の宰相周昌稀か賓客之は隨ふ者千餘乘邯鄲の官舎皆滿るを見るは稀か賓客を持ふ所以の布衣の交の如く皆客の下は出つ稀還て代は之く周昌乃ち入りて見るとを求め上見へて具は言す稀賓客盛あると甚たし兵を外は擅はすると數歳恐くの變あらん上乃ち人をして稀か客代は居る者の財物及ひ諸の不法の事を覆案させけるは多くの稀は連引あり稀恐れて陰は客は命して使を韓王信の臣王黄。曼丘臣の所は通せしむ高祖の七年七月太上皇崩するは及て人として稀を召しむ稀病甚しと稱して至らず九月遂は王黄等と反し自立して代王と爲り趙代と劫。畧せり上聞て乃ち趙代の吏人稀は誑誤劫畧されし者を赦しけり上自ら邯鄲は至り喜ひて曰く稀南の方漳宗は據り北の方邯鄲を守らす其能爲すと無きを知れりと此時趙の相常山の守尉を斬んと奏して曰く常山の二十五城陳稀反するより以來已は二十城を亡ひたり上問て曰く守尉は反せんとするか對て曰く反するとなし上の曰く是力足ら

ざるありとて之を赦して復て常山の守尉と爲しけり上周昌は問て曰く趙も亦壯士の將たらしむへき者ありや對て曰く四人あり四人謁見しけれの上慢。罵て曰く豎子とも能將たるか四人慙て伏しけり上之を各々千戸は封して以て將とせり左右諫て曰く嘗て上は從て蜀漢は入り楚を伐し者は功賞未だ徧く行れざるは今此者等何の功ありて封するや上の曰く若の知る所はあらす陳稀反すれは邯鄲より北は皆稀か所有なり吾羽檄を以て天下の兵を徵とも未だ至る者有らす今唯獨り邯鄲中の兵のみ吾胡は四千戸を愛ん四人を封して以て趙の子弟を慰めんと思ふなりと皆曰く善し是は於て上の曰く陳稀の將は誰あるや曰く王黄曼丘臣皆故買人なり上の曰く吾之を知れり乃ち各々千金を以て黃臣の兩人を購はるは十一年の冬漢の兵擊て陳稀の將侯徹王黄を曲逆の下は斬り稀の將張春を聊城は破り首を斬ると一万餘太尉勃入て太原代の地を定む十二月上自ら東垣を擊東垣下らず卒上を罵る東垣已は降りけれの卒の罵者は之を斬り罵る者は之れを諒。よせり更めて東垣を命けて眞定と爲せり王黄曼丘臣は其麾下之を購ひ賞するを受て皆生得ける故を以て陳稀か軍敗れたり上還て洛陽は至れり上の曰く代は常山の北は居れり趙乃ち山南より之を有つは遠しと乃ち子恒を立て代王とし中都は都せしむ代鴈門皆代は屬せり高祖の十二年冬樊噲の軍卒追て稀を靈丘は斬る

太史公曰く韓信盧縮は素より徳を積み善を重ねたるの世は非す一時の權變を徼めて詐力を

以て功を成せり漢初めて定まるる遭ふ故に地を列南面して孤と稱するを得たり内の強大を疑
ひれ外の蠻貊は倚りて以て援とせり是を以て日天子と疏くして自ら危むるに至れり事究り智困
しみて卒に匈奴は赴たるに豈哀しからずや陳稀の梁人なり其少き時の數々魏の公子を稱し慕へ
り軍を將とし邊を守るに及て賓客を招き致して士を下り名聲實よりも過ぎ周昌之を疑ひ疵瑕頗
る起り禍の身よ及ふを懼れ邪人説を進め遂に無道に陥たり於戲悲ひ夫夫計の生執成敗の人よ於
るや深し

田儋列傳第三十四

田儋者狄人なり故の齊王田氏の族あり儋の從弟田榮々の弟田橫皆豪もて宗強し能人心を得た
り陳涉の初て起て楚も王たる時周市も命して魏の地を略定めしめ北の方狄に至りしは狄城を守
て拒みたり田儋伴りて其奴を縛ると爲して少年を從へて延よ之き謁て奴を殺さんと欲して狄の
令を見因て撃て令を殺し豪吏の子弟を召て曰く諸侯皆秦も反きて自立せり齊の古の建國なり儋
の田氏なり當も遂も自立して齊王と爲るへしと兵を發して周市を撃周市の軍還去ける田儋因て
兵を卒て東の方齊の地を略定せり秦の大將章邯魏王咎を臨濟も圍む臨濟急なり魏王救を齊も請
ふ齊王田儋兵も將として魏を救ふ章邯夜枚と衝み擊て大も齊魏の軍を破り田儋を臨濟の下よ
死せり儋の弟田榮儋の餘せし兵を収て東阿も走る齊人王田儋死すと聞て乃ち故の齊王建の弟田

假を立て齊王と爲し田角を宰相とし田間を大將として諸侯を拒けり田榮の東阿も走るや章邯退
て之を圍む項梁田榮の急なるを聞き乃ち兵を引て撃て章邯か軍を東阿の下よ破る章邯走て西
せり項梁因て之を追ける而して田榮齊の假を立てることを怒り乃ち兵を引て歸て撃て齊王假を逐
ふ假亡て楚も走る齊の宰相田角亡て趙も走る角の弟田間の前も救を趙も求めて在りしかり因て留
りて敢て歸らず田榮乃ち田儋の子の市を立て齊王とし榮之も相たり田橫大將たり因て齊の地を
平く項梁既も章邯と追ふ章邯の兵益々盛かり項梁使をして趙と齊と告兵を發して共も章邯を
撃しむ田榮か曰く楚の田假を殺し趙の田角田間を殺しかり乃ち肯て兵を出さん楚の懷王か曰く
田假の與國の王なり窮して我も歸す之を殺すの不義なりと趙も亦田角田間を殺して以て齊も市
のす齊の曰く螻手を整時の手を斬り足を整時の手を斬る何となれり身よ害あるか爲なり今田假
田角田間の楚趙も於る直も手足の戚のみもあらず何の故も殺さるる且秦志を天下も得る時の
事を用ゆる者の墳墓を齧齧たん楚趙聽かず齊も又怒て兵を出肯せず章邯果して項梁を殺して楚の
兵を破る楚の兵東も走る章邯河水を渡りて趙を鉅鹿も圍む項羽往きて趙を救此より田榮を怨む
項羽既も趙を存し章邯等を降し西の方咸陽を屠り秦を滅して侯王を立てる時迺ち齊王田市を徙し
て更も膠東も王として即墨も治せしむ齊の將田都從て共も趙を救ひ因て關も入る故も都を立て
齊王と爲し臨淄も治せしむ故の齊王建の孫田安項羽方も河を渡り趙を救ひし時田安濟北の數城

通俗史記列傳

を下して兵を引て項羽は降りぬ項羽因て田安を立て濟北王と爲し博陽を治せしむ田榮項羽は負
き兵を出し楚趙を助けて秦を攻むるを肯せざるを以て故に王たるを得ず趙の將陳餘も亦職を
失て王たるを得ず二人俱に項羽を怨む項羽既に歸り諸侯各々國を就く田榮人をして兵を將と
して陳餘を助けしめ趙の地を反せしむ而して榮も亦兵を發して以て距きて田都を撃つ田都亡て
楚は走る田榮齊王市を留めて膠東の之しめす市の左右の曰く項王強暴なり王當は膠東の之へし
國を就すんは必ず危し市懼れて廻ち亡て國を就きたり田榮怒て追撃て齊王市を即墨の地を殺し
還り攻て濟北王安を殺せり是は於て田榮廻ち自立して齊王と爲り盡く三齊の地を并せたり項羽
之を開て大に怒りて北の方齊を伐つ齊王田榮兵敗れて平原の地へ走りけるは平原の人榮を殺し
ぬ項羽遂に齊の城郭を燒夷け過る所の者の盡く之を屠りけれは齊人相聚りて之を畔く榮の弟橫
齊の散兵を収めて數万人を得たり反て項羽を城陽を撃て漢王も諸侯を卒て楚を敗りて彭城に入
りけれは項羽之を聞て乃ち齊を釋て歸り漢を彭城を撃ち因て連りて漢と戦ひ榮陽は相距く故を
以て田橫復齊の城邑を収むるを得たり田榮の子の廣を立て齊王と爲して横之は相たり國政を
專よし巨細となく宰相と決斷しけり横齊を定ると三年漢王酈食其をして往て説て齊王廣及び其
相國横を下しむ横以爲く然りと其歴下の軍を解く漢の大將韓信兵を引て且は東の方齊を撃んと
す齊初めの華無傷田解をして歴下は軍して以て漢を距かしむ漢の使至る乃ち守戰の備を罷て縱

酒し且は使を遣て漢を平かんとす漢の將韓信已は趙と燕とを平け蒯通か計を用ひて平原を度り
齊の歴下の軍を襲ひ破り因て臨淄に入る齊王田廣宰相田橫怒て酈生を以て已を賣として酈生を
烹る齊王廣東の方高密より走り田橫は博陽より走り守相田光は城陽より走る將軍田既膠東より軍す楚龍
且をして齊を救はしむ齊王與は合て高密より軍す漢の大將韓信龍且を破り殺す齊王廣を虜はす漢
の將灌嬰追て齊の守相田光を得たり博陽に至て横齊王死すと聞て自立して齊王と爲り還て嬰を
撃つ嬰横の軍を贏下は破る田横亡て梁より走り彭越は歸す彭越是時梁の地は居て中立且は漢の爲
よし且楚の爲よし韓信已は龍且を殺し因て曹參をして兵を進て田既を膠東より破り殺ししめ灌嬰
をして齊の將田吸を千乘より破り殺ししむ韓信遂に齊を平け自立して齊の假王とあるを乞しか
は漢因て之を立けり後歳餘にして漢項羽を滅し漢王立て皇帝となる彭越を以て梁王と爲す田橫
誅を懼て其徒屬五百餘人と海に入りて島中より居れり高帝之を聞て以爲く田橫兄弟本齊を定め齊
人の賢者多く附たり今海中に在り収めされは後至て恐くは亂を爲んと乃ち使を以て田橫の罪
を赦さしめて之を召す横因て謝して曰く臣陛下の使酈生を烹たり今聞く其弟酈商といふ者漢の
將と爲りて賢なりと臣恐懼して敢て詔を奉す請ふらくは庶人と爲りて海島中を守らん使還て報
す高皇帝乃ち衛尉酈商に詔えて曰く齊王田橫即至るとも人馬從者敢て動搖する者の族夷の刑と
致さん乃ち復使節を持せて具は告ふ商は詔するの狀を以てして曰く田橫來れ大おれは王とし

小かれの乃ち侯とせんのみ來すべし且兵と擧て誅を加んとす田横乃ち其客二人と傳よ乘て雒陽に詣り未だ至らざると三十里戸郷の廐置よ至り使者よ謝して曰く人臣天子よ見るの當よ洗し沐ふへしとて止留し其客よ謂て曰く横始め漢王と俱よ南面して孤と稱えたり然るも今漢王の天子とあり横の乃ち亡虜と爲りて北面して之よ事るの其恥固より已甚し且吾人の兄を烹て其弟と肩を併て其主よ事るの縦ひ彼天子の詔を畏て敢て我よ動かさるるも我獨り心よ媿さらんや且陛下我よ見んと欲する所以の者の一たひ吾か面貌を觀んと欲するよ過さる耳今陛下洛陽に在り今吾か頭を斬り三十里の間を馳なれり形容未だ敗ると能す猶觀る可ありとて遂よ自到ねて客をして其頭を奉て使者よ從ひて馳て之を高帝よ奏せしむ高帝の曰く嗟乎以有る夫布衣より起りて兄弟三人更々王たり豈賢ならずやと之か爲よ流涕し其二客を拜して都尉と爲す卒二千人を發して王者の禮を以て田横を葬る既よ葬り二客其冢の旁よ孔を穿り皆自ら到て下田横よ從ひたり高帝之を聞て乃ち大よ驚き以よ田横の客皆賢あり吾聞く其餘尙五百人海中に在りと使をまて之を召しむ至り則田横の死するを聞て亦皆自殺せり是よ於て廼ち田横の兄弟能士を得るを知るなり

太史公曰く甚たし脚通の謀齊國を亂し淮陰を驕らしめ其卒り此兩人を亡せり脚通の善長短の説を爲し戰國の權變を論して八十一首と曰ふ書を爲れり通齊人安期生よ善し安期生嘗て項羽を干

せし項羽其災を用ゆると能す已よして項羽此兩人を封せんと欲す兩人終よ受肯せず亡去けり田横の高節なる賓客義を慕ふて横よ從て死せり豈至賢よあらすや余因て列す善畫かざる者なきよ能圖すると無き何りや

樊鄴滕灌列傳第三十五

舞陽侯樊噲者沛人あり狗を屠るを以て事とせり高祖と與よ隱る初め高祖よ從ひて豊より起り攻て沛を下す高祖沛公と爲り噲を以て舍人と爲す從ひて胡陵方與を攻めて還りて豊を守り泗水の監と豊の下よ撃て之を破り復東の方沛を定め泗水の守を薛の西よ破り司馬尼と楊の東よ戰ひ首を斬ると二十五級爵國大夫を賜ふ常よ沛公よ從ひて章邯か軍を濮陽よ撃ち城を攻るよ先登す首を斬ると二十三級爵列大夫を賜ふ復常よ從ひて城陽を攻るよ先登し戶闔を下し李由か軍を破り首を斬ると十六級上間爵を賜ふ從て攻て東郡の守尉を成武よ圍と敵を卻け首を斬ると十四級捕虜十一人爵五太夫を賜ふ從て秦の軍を撃て毫の南よ出つ河間の守杠里よ軍す之を破る趙賁の軍を開封の北よ破り敵を卻け先登し候一人首六十八級を斬り捕虜二十七人なるを以て爵卿を賜ふ從て揚熊か軍を曲遇よ攻破る宛陵を攻むるよ先登し首を斬ると八級捕虜四十四人爵封を賜ひ賢成君と號す從て長社轅轅を攻て河津を絶る東の方秦の軍を尸の南よ攻め秦の軍を犍よ攻め南陽の守齧を陽城の東よ破る宛城を攻るよ先登して闕よ至る敵を卻け首を斬ると二十四級捕虜四